孤独と孤立

～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能～

黍稷農季人

2021

Kibikibi Noukijin 2021

孤独と孤立　～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能～

目次

序　・・・　4
第1章　ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生　・・・　5
1.1.　村とムラ社会
1.2.　フィールドワーク
1.3.　幸せになる学び
1.4.　ムラ社会におけるムラ撥撫の発生
1.5.　直接体験から
1.6.　田舎と都市、および民族と民俗
1.7.　他者の体験からの補足

第２章　心の構造と機能　・・・　18
2.1.　心の構造の変容
2.2.　人類の進化史
2.3.　農業文明から自己家畜化
　1）自己家畜化
　2）伝統的知識
2.3.　生き物の文明への移行

第３章　素原の超個人主義　・・・　36
3.1.　超克へ祈りと願い
3.2.　嫉妬と保身の自律制御
　1）心理セラピストの見解
　2）保身について
3.3.　教養を磨く

第４章　内面への道　・・・　49
4.1.　さらなる内面への道
4.2.　ムラ社会とイジメの仕組み
4.3.　社会ダーウィニズム
4.4.　自然の階層と全体論

第５章　自然への祈り　・・・　64
5.1.　やまとたましひと武士道
5.2.　学問は独学で
5.3.　自然への祈り
5.4.　死に至る病・絶望の恢復と希望

用語集　・・・　73

関連資料 ・・・ 74
引用文献 ・・・ 75
参考文献 ・・・ 77

Solitude and Loneliness: Structure and Function of Mind and Heart against the Ostracism in Mura Societies

Contents

Preface
Chapter 1. Formation of Mura Societies and Occurrence of Mura Ostracism
Chapter 2. Structure and Function of Mind
Chapter 3. Fundamental Transpersonal Individualism
Chapter 4. Way to Inner Life
Chapter 5. Prayer to the Nature
References

概要

日本には封建時代後半以来、今日までの半千年紀を経ても、課題解決できないムラ社会という事象があらゆる共同体に残存している。ムラ社会は田舎であれ都市であれ、地域であれ企業や学校であれ、どこにでも見られる人間関係である。ムラ社会は必ずしも日本特有の事象ではない。しかしながら、日本の小規模村や学校など閉鎖的な地域共同体や社会組織では、複数のムラ社会が出来上がり、隠然と構成員や周辺に良きにつけ悪しきにつけ影響を及ぼす。たとえば、都市で目立たないことであるが、良い場合は相互扶助として、悪い場合はムラ撥撫（イジメ）として作動する。ムラ社会はヒトや地域社会の暮らしを幸せにしたり、不幸にしたりもする。

ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生は人間の自己家畜化の過程で文化的進化し、心の構造と機能の発達・退行にも強く影響してきた。これらの悪習は、過剰な嫉妬と保身、あるいは支配欲に基づくと考えられる。内面への道を辿り、心の構造（一般的知能、博物的知能、社会的知能、技術的知能、言語知能）、機能（五感、第六感・直観、第七感・良心）、これらをつなぐ認知流動性を磨くことで、悪習を克服することができる。

孤独と孤立は学校教育を越えて、自ら学習することによって解決でき、さらに素のままの美しい暮らし、幸せへの希望が祈りとして、発見することもできる。

序

自反而縮、雖千万人、吾往矣。
孟子（公孫丑上、前４世紀）

孟子の言葉は「自ら反省して正しいと思ったら、敵が千万人いても恐れることなく向かっていこう」と解釈されている。私は孤独が嫌いではない。孤独は自由であり、孤独にならなければ内省もできず、創造的な仕事ができないと思う。一方で、集団性動物である人間は孤立して生きることはできず、私とて孤立すれば淋しいし、辛くは思うだろう。孤独と孤立は似て非なる概念である。広辞苑では孤独を「仲間のないこと、ひとりぼっち」、孤立を「ただひとりで助けのないこと」と解説している。両語彙は一人の点では同義だが、孤立の方は助けがない点で異なっている。孤独を志向して学び考え、善なる者とつながり孤立せず、悪なる者を避けるがよい。

私の植物学の師、阪本寧男を、社会人類学者の谷泰が孤高の農学者と評した。雑穀の調査研究において、阪本は自らをやっと間に合った男と言った。これでは、その弟子である私は間に合わなかったことになり、それこそ孤低（造語）に足掻くことになってしまう。したがって、間に合わせようと抗ってきた。研究人生では、孤独と孤立は常態だ。孤独は独創性の要であるが、時として孤立する。先達から孤立していては、求めて得られる他者の経験から学べずに、自らの学びは広まらず、また深まらない。我儘 selfish な自由人でも、師友は広く求めて、人脈を大切にしてきた。意見が異なり、たとえ厳しく対立しても喧嘩はしないように妥協し、勝敗はつけないように律した。イジメられっ子が身をもって学んだ処世の作法であったのだろう。

省庁関係からの委託調査研究に基づき、都市民の自然回帰が進むと予測して農村・都市交流ネットワークの促進を政策提言した。その後も、山村の現場に身を置き続けてきたが、この期に及んで、その提言の実現の厳しさに対して、生きているうちに責任を明確にしておかねばならないと考えた。

本論考は山村に関する一連の研究３部作の第３論考である。第１論考は事例研究「山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～」（木俣 2021）、第２論考は「日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析」（文福洞 2021）である。さらに、この第３論考は、前２論考事例研究を踏まえて、一般理論「孤独と孤立～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能～」としてまとめたものである。

未知の一本鎖 RNA ウィルス COVID-19 が猖獗を極めているこの時期に、偶然にも、まさにホットな課題に合致してしまった。決して世の中に迎合したのではなく、何十年にもわたる懸案の課題解決であった。できれば正面から向き合うことなく、避けて通りたい問題であったが、ありがたいことに心的苦痛を和らげて、かつ、新たな閃きを得て、環境学習の奥義を見出すことができた。それは心の構造に、機能と認知流動性、また、五感、第六感に第七感（良心）を連結できたことである。もう一つ、性善説を克服できたことも加えてよいだろう。

なお、本論考では恣意的解釈を防ぐために原文（訳文）の引用を多くし、用語集も本文末に示した。

第１章　ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生

今の日本人は薄暗い澱み、霞みの中におり、あまりに立ち竦んでいるように見え、ファンタスティックではない。日本には地道に働き、堅実で優れた仕事をしている人々も多くいる。それでも社会の中で人々がなかなか縁を結び、絆を広げようとせずに、個人が立ち竦み、孤立しているのはなぜなのか。これは孤独好きな個人主義による状況ではなく、個人を集団のなかに埋没させて、消そうとしているようだ。出る杭はイジメにあい、打たれるので、この空気を読むという同調圧力に脅えているのだろう。脱空気罪は知らないところで、不特定のノッペラボー妖怪に下されるから恐ろしいのだ。若者すらなお、皆同じリクルート・スーツを着る。どうしたら、明るい心が自由往来するのだろうか。現実を暴き、悪ばかりを見せつけるのではなく、あわせて善をも周知するように気を付けたい。ファンタジェンが虚無 Nothing に蓋われてしまわないように、寛容な心にファンタジー（空想)、すばらしさを取り戻したい。

個人の欲望、名利を過剰に募らせて、それを適度の程度に平衡を保つように自律できなければ、寛容さを弱める。寛容という想い遣り、すなわち第七感・良心が揺らぎ、個人は自ら孤立に向かう。どうしたら良心を鍛え、情理を平衡に保てるのだろうか。現代社会は憎悪を煽り、人々を分断、孤立させ、不幸に陥れている。他者に裏切られることを怖れ、心を閉ざして胸襟を開かないのだろう。心の構造ばかりか、機能が健全ではなく、著しく劣化しているのだ。

日本語の言葉に魂が宿らなくなった。権力者や権威者の言葉が軽く空虚で、虚偽、隠蔽もあり、言霊は去ってしまった。たとえば、「丁寧に説明する」と繰り返すばかりで、事実は虚偽、隠蔽され、説明に内容がほとんどない。これを丁寧ということはできないので、丁寧という言葉の言霊は無責任によって意味をなさずに、失われた。

ドイツのメルケル首相の演説（訳文）には涙が出るほど情理による説得力がある。民主主義と自由を COVID-19 の緊急事態下においても、明確に述べている。「開かれた民主主義に必要なことは、私たちが政治的決断を透明にし、説明すること、行動の根拠をできる限り示し、伝達し、理解を得られるようにすることです。私たちは強制ではなく、知識の共有と協力によって生きています。これは歴史的な課題であり、力を合わせることでしか乗り越えられません。」メルケル首相と同様な発言をしているのが、台湾のタン IT 担当大臣で、政府が事実を隠さず、十分に説明することで市民、国民の信頼を得ていると言っている。

「美しい日本」という日本会議は日本語の「美しさ」の言霊を偽って失わせておきながら、あまりに無知で、恥知らずだ。要するに下品ないい方をすれば、無知無恥ムチムチなのである。また、「可能性」という語彙には希望という言霊が宿っていたはずだが、今どきの日本では、虚偽や隠蔽に毒されており、可能性は虚無や絶望に近づくようにばかり聞こえさえすることがある。言霊は持続可能性にではなく、持続にあり、スピード感ではなく、スピードに所在する。自分の立ち居、振る舞いに気を使い、何にも責任は取らねばならない。

私はアルベルト・シュバイツアー、エルネスト・チェ・ゲバラやモハンダース・カラムチャンド・ガンディーに憧憬し、彼ら偉人を規範として、自己を鍛錬することが私の人生であった。世の中をよくするための革命はできると、大学生の頃、若気の至りでほんの一瞬思ったことはある。この時の直接体験と、その後に自ら歴史を振り返って学び、革命の実態は権力闘争であって、人々を傷つけて、幸福にすることは少なかったと知った。それ

でも、フランス革命の精神の自由、平等、友愛はホモ・サピエンスの心の機能における文化的進化であったと共感している。

1.1.　村とムラ社会

中山間地における村とは自然集落であり、山村で家族農耕をしている人々が山村農だ。ムラ社会は地域有力者の名利欲によって形成される集団である。本論では、村（自然集落・地域共同体）とムラ社会とは明確に区別して論考を勧めたい。日本のムラ社会は村で固有に形成されるものではなく、都市でも先住有力者やあらゆる社会領域で形成されうる。ムラ社会は地元有力者たちの過剰な保身によって、ムラ撥撫（村八分）を発生させる。

大島ら（1979）は、『日本を知る小事典 1 冠婚葬祭』において、日本のムラの特性について紹介している。次に要約を記す。

「ムラ入り」ムラ境の外から入ってきた者が、ムラ内に定住するには、種々の手続きを要した。ムラが自給自足で確固とした自治組織のもとに地域生活が営まれればいるほど、自律性が強く閉鎖的で、他所者（ヨソモノ）にたいしてはわけもなく反撥する風があった。したがって、ヨソモノに対しては厳格なムラ入りの慣行があった。自治組織維持のために確固たるものが存在していた。それは俗にムラハチブ（村八分）となってあらわれる、ムラの協同生活を維持するための制裁慣習である。ムラハチブとは、ムラのつきあいで大切な十種の交際のうち、死生と天災あるいは葬式と火災だけの相互協同はあるが、他はいっさい行わないというものである。窃盗・暴行・失火などの犯罪や、ムラ規約違反・協同作業上の怠慢、ムラの住民一般に対する反抗などを行った者に対しては、ムラ寄合いなど公的集会での提案・論議のうえ決定され、本人に通知あるいは掲示板告知などをして交際を断つわけである。

この現象は、日本に蔓延するイジメの推移病理と非常に類似している。加害者が同調者ばかりか、傍観者まで巻き込んで、被害者を孤立に追い込む。被害者は自尊感情を失い、自分を責め、心身を自傷して、鬱状態になり、場合によっては、果ては自殺にまで至る。あるいは、耐えきれずに暴発すれば、窮鼠猫を噛み、復讐として暴力や殺人という犯罪に至ることもあった。こうした社会的事例は、現代でも日本全国で少なからず見受けられる。ムラ社会によるムラ撥撫は加害者による著しい人権侵害で、明らかに犯罪である。もちろん加害者は罪を免れるべきではないし、同調者や傍観者も罪が問われてしかるべきである。被害者を理解して救助しなければ、被害者が一層不幸にも逆転して犯罪者になってしまうこともあるのだ。

田中（2011）は「1955 年頃から工業化による経済大国に向かう中で、農山村から働き手を奪った。学校教育も家庭教育も、国を挙げて農山村から出ていけ教育、出ていけ政策がとられてきた。」と指摘している。他方、同じ書籍で、私は次のことを指摘していた。

自然文化誌研究会が農山村のために、実はより以上に都市のためにでもあるのだが、時間と労力および自費（会費と寄付）と助成金を使い、環境学習活動を実践してきた。相当数の村人に受け入れられ、参加した子どもや保護者、村人や市民にも感謝されて、地域社会にとって本格的に経済的効果が上がってくると、陰の有力者から排除の圧力がかかり、活動中断に追い込まれてしまった。私はこの悔しい思いを繰り返してきたが、今日も懲りずに農村に通っている。追い出されはしないが好意的に無視される段階にまでやっと至ったと考えるこの頃である。窮地にある農山村は本当に

開かれた地域社会になるのだろうか。歴史的な恨みの蓄積、見えない上下関係、自由な民主主義を望まない因習、こうしたものは新住民の増加によって変わるだろうか。債務を重ねる行政機関や税金による公共に頼ることが出来ない時代に、市民の任意な寄附や活動によって新しい公共が創成されるように、家族を守るために価値観を大変化させれば、持続可能な地域社会を基盤にした、この国の将来が見えてくる。

ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生を比較研究し、体験事実を詳細に解析し、この課題を解かなければ、日本の鎖国封建遺制はなくせない。日本の人びとが自律できず、くにが自立できない。

機械文明の発展と伝統文化の衰微は生き物としての退行である。若い母親（いわゆるママ友）の間でのマウンティングやスクール・カーストと言った用語を日本人に適用するなど、無知で恥ずかしいことだ。マウンティングはサルに見られる社会行動であり、これでは日本人はまるでサル並みの日常行動に退行しているということだ。さらに、カーストはインド憲法で禁止されている古色蒼然の差別制度だから、この用語はかりそめにもこの状況で使用すべきものではない。

個人の自律は任意自由によって解放される。ムラ社会への同調は卑小権力によって強要される。素心は純朴、美しい。邪心は名利、醜い、邪まである。学校教育歴と教養は正の相関があるだろうが、学校教育歴は教養を担保保証するものではない。山村に生きた朴訥の高い人格は第１論考で示した農人降矢に実現されている。ムラ社会に巣くった名利を求めるばかりの悍ましい低い人品については第２論考で検討した。アメリカなどと同じく、日本でも、複合毒と純粋誠を持つ人々、それぞれ数％、弱毒と弱誠の人々20～30％、残りの付和雷同の人々40～50％といったところだろうか。

思考停止して、単に何々したかっただけだと言い募ることの非論理、不条理、不情理。飯が喰いたかっただけだ、弁当を盗んで何が悪い。面白いから石を投げただけだ、人を殺す気はなかったと正当化などできるものか。このような醜い言い訳が子供にとってさえ、ましてや大人にとって成り立つわけがない。高等教育を受けてきた人々でも、自らの行為を直観できず、生活信条が弱く、行動規範が自律していない。学校教育履歴が教養を担保保証していないことが残念でならない。

1.2.　フィールド・ワーク

教育研究を職業として以来、村々を訪ね歩き、とても大勢の人々から暮らし向きの話を聞き、それを参照して山村振興の理論を立てて、かなりの自費や助成を受けて地域振興活動を実践してきた。日本の山々は好きだし、自然に近い山里も好きだ。大勢の親切な人々にも出会った。楽しいこと、うれしいこと、人生を支えてもらうようなことが沢山あった。私にとっては都会も面白いが、疲れやすいので、街よりも里が過ごしやすい。山里以上に都会に多量の罪悪があるのだから、村を悪く言いたくはなかったが、事実からしかムラ社会の変容は始まらない。村に地域共同体としての絆があると思いこんでいる都会人は村に深く関わってこなかった人々だ。現場や実際に立ち会わない人は何とでも言い逃れをする。事実に立ち会って、嘘を言いたくないのなら、口ごもることしかできない。

今やつくづく思い至った、ムラ社会は暴力だと。何十年、山村を徘徊して、山村農民からは歓迎されてきたし、もちろん一度たりとも身体的な危害を受けたことはない。しかし、それでもムラ社会は暴力である。日本のムラ社会には自由、平等、友愛という近代の社会

的精神があまり及ばず、理解受容が進んでいない。端的に言えば、教養（想い遣り）がまるでないのだ。どんなに山村に貢献していても、ムラ社会からは話し合いもなしに、突然有無を言わせず、度重ねて追放されてきた。これはまさに暴力そのものだ。

アフガニスタンでの中村哲への襲撃は、その犯行理由がまだ十分に解明されていないが、灌漑事業を進めた中村に反感を持った人たちが犯行に至ったとの説がある。水争いが原因ではないかということである。私も少年の頃はシュバイツアー博士に習い、医者になってアフリカで医療奉仕をしようと志していた。人生の結果では、民族植物学者として、日本の山村で地域振興のボランティア活動を 40 年以上行ってきた。中村のような特別な人格者と比較するなど不遜ではあるが、それを承知で類推をしてみたい。中村はアフガニスタンにおける成果を妬まれて銃撃されたのだが、私はささやかな地域振興活動で疎まれて、何度も地元有力者ら（主に大土地所有者）に撥撫され、心的外傷後ストレスを度重ねて受けてきた。これはかなり堪えることであった。それでも、山村振興に関わり続けてきたし、人生の残りの時間も懲りずに抗い続けており、その理由は山村に日本の希望をなんとか見出そうとしているからである。

1.3.　幸せになる学び

区別と差別は異なる語彙である。人種や民族、男女、職業などの社会的属性を区別、あるいは分類することはあり得ることだが、基本的にはその属性によって差別を受けることは望まない。区別はすべての属性の社会的、文化的多様性を受け入れることだが、差別は特定の属性を排除することだ。差別は多様性を否定することになる。

公共学校教育制度が 1 点を争う受験教育に忍従し、子供達の協働の心を衰微させた。相当数の小学校教員は国家主義に敗北を重ねて、空気を読み、教育の本質から逃げた。ゲーム感覚が良心を麻痺させた。VR がリアルに勝った現実である。自然の中での暮らしを乖離させる教育が心の構造の諸知能の発達を阻害する。さらに諸知能を豊かにする経験や学習を支える諸機能を鍛えなければ、諸知能を統合する心の構造は分離されたままで、心の機能は良く働かずに、発達障害を起こす。

文明の組織化された野蛮を改善するべきである。良心の健全な発達を求め、自律的な鍛錬をするべきである。国のためにとして多くの人殺しをしたら、英雄と称賛される。理不尽な犯罪に対して抵抗して、自己防衛のためにでも人を傷つければ、犯罪者として指弾される。組織化された野蛮をどうしたら、昇華、改善し、無くすことができるのだろう。権力の野蛮な暴力、少数の人に潜む悪意の嫉妬心、個人の名利およびムラ社会における支配欲を自己制御してほしい。生きるために必要な物も金銭もほどほどに知足し、儲けるための物、儲かった金銭も適正に寄付や納税してほしい。自律した個人は信念や信仰に支えられている。

誰もが幸せになってよいのだ。この国には不幸で、悲しい人々もいる。個人の幸せさえ、隠さなくてはならない。個人が幸せを見せると、身近な人々さえもが羨み、妬み、あら捜しをして陰口を聞き、幸せから引きずり下ろすのだ。不幸な素振りをみなければ、妬みの対象にされるからだ。私はこうしたことを直感していたから、自ら幸せであることを自認しないようにしてきた。幸せを認めた途端に、幸せは逃げてしまうと思い込むようにした。人の不幸は蜜の味と世俗で言われてきたように、換言すれば、幸せは妬まれるのだろう。だから、幸せの絵は描いてはいけないのである。しかしながら、いい爺さんが不幸の苦虫を噛み潰していては、若者にとって良い見本にならない。これでは若者が老いを嫌がるだ

ろう。誰でも必ず老いるのだから、恐れることなく、幸せな爺さんであることを隠すことはない。誰もが人生を幸せに過ごしてよいのだ。

1.4.　ムラ社会におけるムラ撥撫の発生

後述で引用したように、神奈川県相模原市の旧藤野町周辺には第二次世界大戦末期に、藤田嗣治など文化人と呼ばれる人々が疎開していた。今日の藤野に若いＩターン移住者が多く集っているのも、その歴史への想い入れ故なのだろう。しかし反面で、たとえば、大塚久雄（イギリス経済史専攻）は戦争末期に相模湖周辺の農村に疎開して、とても嫌な体験をした。それを近代以前的と見なした。それから 75 年以上も経ているが、いまだにムラ社会の発生は存続しているようだ。

原則として個人情報は犯罪者についても保護すべきだ。加害者の個人情報には注意するとしても、被害者本人としてはその犯罪を告発する人権はあると考える。また、被害者である私はセラピストではないので、職業的な守秘義務はない。とある加害者が自分の力によって行政助成を獲得できたと思った時から、私もその支配下に置こうと考えたようだが、私は高慢にも支配下に置かれるのを拒絶した。そこで、その加害者の心の闇に澱んで、隠れていた有毒な本性に火がつき暴発したのだろう。助成獲得成果が自分の手から離れることを怖れ、望まなかった。そこで形成していたムラ社会を使ってムラ撥撫を発生させたのだ。ムラ撥撫の発生者は心の闇の中に毒をもっていて、第七感（良心）未発達で、罪悪感なく、心は痛まないのだろう。巧妙に平気で虚偽を言い、事実を隠蔽し、人々の心を操るのだ（文福洞 2021）。実に、不公正 injustice で不公平 unfair なことだ。ムラ（ムレ、シマ）における支配関係の保身、広くつながりを持とうとしない。衰退するしかない。ムラ社会の支配に浴さないから、利害を共有しないから、これで撥撫を受けたのである。

再び確認しておく。私は被害者であっても、加害者側の個人情報保護義務はある。彼らには二度と会うことはないが、報復行為はしない。ただ、私の経験した事実を記録して、原因と解決法を考察し、どうしても地域活動に役立たせたい。個人の属性とその利害関係を明示すれば、原因はより明確になる。しかし、個人情報保護に関わるので、事例の詳細は記述せずに、一般理論として考察を深めることにする。

私は国内外で調査研究をし、人生経験を積んできたが、名利を得ることは極力避けてきた。それでも職業属性により他者には傲慢尊大に見えて、砕いて言えば、職業病で鼻持ちならぬ高慢ちき野郎で、ムカつく奴なのだろうか。しかし、改めて考えるに、それは実際の本性ではないので、ここまで自分を傷つける必要があるのか。早暁の目覚めの中で、自分は多くの人達に好かれ、支えられてきたのだと感じた。私はやっと PTSD から立ち直ったようだ（2020.7.5）。

志と才能のある若者たちは村を出て行ってしまった。それでも、そこを故郷とする人々、あるいは新たな移住者で強い信念や事情があって在村する人々、どこにも行く当てがない人々が多様な思いで残っているのだ。村に住むのなら、地元有力者のもとに忍従するしかない。少子・高齢化の現代、こうして村は衰退する。それでも例外として、今となっては極まれに山村農人として自給知足する高い教養人が山村に隠れ住んでいる（木俣 2021）。たとえ、ほんの少数の志ある篤農や協働者が在村していても、村は彼らを黙殺する。こんなこのくにの村でも、忍耐して関わり続けなければ、自然も山里も遠ざかり、さらに都会近郊も孤立し、圧倒的に非情な野生に侵入されるようになる。苦痛でも、虚無と戦い、村に住み、あるいは通わなければ、さらに悪化するのだ。

一方、昨今の都会人の無教養についても真に非情理である。本来、文芸や教養は都市民から豊かに発露したものだ。ところがすべて商業化された都市文明においては、金にならないような文芸や行為は意味をなさなくなった。最初に閃いた思い付きが尊敬されず、瞬く間に物真似され、増幅し、広まれば、この商品はすぐに飽きられて消える。個性、独創性、多様性などといっても、舜次瞬くだけで、消費されてしまうのだ。誰もがノッペラボーにされて、見ず知らずの他人に突然襲われる。過密な人口圧ストレスが限度を超えて、まさに都市には多くの狂気が増殖して潜んでいるようだ。

日本では原子力ムラでも、高い教育を受けてきた人々がムラ社会を形成するのだから、これは学校履歴の多寡に関わらず、教養（想い遣り、第七感良心）を鍛錬していない人々により形成される日本特有の封建遺制・悪習の事象なのだろう。しかし、この特殊性をさらに深めて考えてみれば、人間の心の暗がりに巣くう普遍的な事象でもあるのだろう。心の構造における知能の分断が、根底的に現代課題なのであろう。人々を幸せにする真の文明（生き物の文明）にたどり着くためには、このムラ社会の形成を阻害するように、心の構造を変容させねばならない。ジャマナカ君(山中伸弥)は Covid-19 への対応においては、日本人の自律性が試されると言っていた。さすがに苦労人で、大いに共感している。彼の研究室がテレビ映像に映っていたが、座右の銘「万事塞翁馬」とあった。私は三浦梅園の「人生恨むなかれ、人知るなきを、幽谷深山、華自ずから紅なり」を座右の銘としてきた。

鎖国して 260 年余り、明治維新で開国して後、すでに 150 年ほど、第二次世界大戦で敗北してから、日本国憲法下ですでに 75 年が過ぎている。それでも未だに封建時代の悪習遺制による悪心に呪縛されている人々が多い。柳田国男の稲作単一民族説に従った日本民俗学者、官僚、政治家、そして田舎の有力者、これらの人々はすべて過剰な自己保身で、山村の伝統的生活文化、生業、雑穀などの在来品種を貶めて、都市に若い人々を誘導して、そこに過剰の人口集中を招き、村を過疎、高齢化させたのである。

1.5.　直接体験から

自然を信仰し、山村の暮らしを信頼し、篤農を敬愛して、これらに私は人生を導いていただいてきた。山村を愛しく想い、雑穀農耕を中心とする生物文化多様性保全をしながら、環境学習・環境保全による山村振興活動を、関東山地南部、秩父多摩甲斐国立公園周辺の東京都奥多摩町、五日市町、埼玉県大滝村、山梨県小菅村に順次その活動拠点を置き、45 年以上にわたって継続してきた。私たちの活動には何千人にも及ぶ子供たち、村人、市民、学生、教職員などが参加してきた。総額では数億円の公私の資金（国の事業や民間助成事業、個人寄付などを含む）と関係者・ボランティアによる何十年にもわたる労力が協働・提供された。大いに山村の文化継承と経済振興に貢献したはずだ。

ところが、それにも関わらず、私たちの活動が順調に定着すると、すべての事例に共通したことであるが、なぜかほんの一部の自己保身的な地元有力者から追放の憂き目にあってきた。山村を愛しく想って地道に活動してきたことだから、山村の何事をも悪しくは言いたくない。しかし、曖昧模糊とした追放の後退動因を明らかにしない限り、地域振興や地方創生などは本質的にはなしえない。教え導いてくださった篤農の皆さんも私も、残り少なくなった人生の時間でこの課題解決を、せめて課題の所在を明確にすることだけでもしておかないと、大きな歴史的変曲点にある日本の基層文化が喪失してしまう。為政者らは地域を愛しく想う人々やその伝統的基層文化の営みを見捨てておきながら、あまりに無恥にも内容のない愛国の言葉だけを声高に言っていることは実に空しい。情理が絶えよう

としている、このくにの未来は悲しい。

まるでシーシュポスの神話のように、今また追放に会おうとしている。 私には徒労に見える岩上げの苦行を強いるのはギリシャの神々ではなく、名利に憑りつかれた人間たちである点は実に現代的であり、シーシュポスの神話とは違う。大欲望に憑依され、カミ殺しを続ける人間たちが、やっと運び上げた岩を山頂で蹴落とす。岩は山村で、その中には伝統的知識・技能（生物文化多様性）が沢山詰まっている。何度繰り返しても虚しく労するだけにみえる過程がこの虚しさを超克した時に、自然への信仰を感得し、理知への信頼を認知するのだろう。虚無と過剰な便利に抗うのが私の自味（地味、滋味）な人生なのだ。私が多くの物者に支えられて生きていること、私も微力ながら少しは物者を支え、愛おしまれ、愛おしんでいること、やっと人生が少しずつ見えてきた気がしている。

私たちのように山村を愛しく想う都市民は山村の心無い有力者には気に入られない。 短期間だけ、下働きする地域おこし協力隊員は歓迎だが、長期にわたって山村で協働をする都市民は迷惑なのである。村役人は都市民の税金（地方交付税交付金）をあてにしているので、その上、都市民に私費で山村の為に働かれては居心地が悪いのだろう。彼らは出自の山村を愛しくは想わず、都市に出られなかったことに怨嗟を感じているのだろうか。山村を引け目に思い、都市に従属したいのだろうか。だから、山村を敬愛する心を追放したいのだろうか。こうした推測に反して、過去お付き合いのあった役場職員の中でも誠実に礼義を忘れない人々も稀にはおいでになる。なかなか、本当の動因にはたどり着けない。

どこの山村でも直耕してきた多くの篤農とは心を通わせるまで昵懇になり、ご婦人方からも料理を教えていただいたり、農産物やおやつをくださったりと親切にされてきた。 しかし、村役人や大地主から私たちと篤農たちの協働した環境学習・環境保全による山村振興活動の前進動因による成果はおおかた黙殺されてきた。ムラ社会やタテ社会、 イエ制度の封建遺制などと論考されてきたが（中根 1967)、実体験を思い起こしてみると、はっきり言えば、第一の追放動因は山村に巣くう屈折した小権力志向の男たちの、まさに低レベルの嫉妬だ。彼らは村内では特段に裕福であるのだから、無欲で名利を求めない者たちへの反感と怖れから、ムラ社会での地位を脅かされると曲解するのだろう。彼らは自然や山村を愛しいとは心底では思っていないのではないのか。このために実にいじましい男の嫉妬であって、彼らに特有の隠微で醜い心の実態だ。もちろん、私たちは山月記の人喰い虎になった李徴のように尊大な態度（中島 1942）によって嫉妬されているなどと、社会的成功者の彼らに対して言っているのではない。この心の悪弊を超克しなければ、未来に向けて山村は再生しない。山村を衰退に任せれば、結果的に都市も健康さを失い衰微する。

自然と暮らす山村民の生活文化も知的好奇心から共感を呼ぶ。これから観光はより「知的な物事」へと深まっていくだろう。たとえば、イギリス人の多くは大人の趣味をもって暮らしているので、図書館、博物館、美術館、植物園などは専門学芸員が調査研究を深め、高い学識を蓄えていないと、知性の高い来館者には応対できない。しばらく、イギリスのカンタベリーで暮らし、また大陸ヨーロッパ諸国を旅してまわった。保守的というのは保身的とは大いに異なり、伝統を保全しながら、新たな創作として再生する町や人々の暮らしを垣間見ることができた。ヨーロッパの文学、芸術、思想からスポーツ、探検、園芸などまで、王侯貴族に限らず、市民の遊びは幅広い。 市民のボランティア活動や税金とは別に、任意の寄付がその遊びや地域社会を支えている。 市民は教養を磨き、自律心を鍛える必要がある。

スコット（2017）は遊びの本質について、次のように的確な示唆を与えている。

遊びは喜びと遊びそのものを楽しむことを超えたところでは目的を持たない。この種の開放的で、あらかじめ決められていない遊びは、広い視点から見ると、非常に真剣な仕事だからである。すべての哺乳類、とりわけホモ・サピエンス（絶滅種を含む新人類）は、実に多くの時間を明らかに目的のない遊びに費やしている。遊びの無秩序によって、人間は、体の使い方と身体能力、順応性、帰属意識と仲間との交流の感覚、信頼、経験などを発達させていく。遊びの重要性は、ホモ・サピエンス・サピエンスを含む哺乳類の行動様式から遊びを奪ったときにとりわけ明らかになる。遊びを否定されると、どの哺乳類も立派な大人になれない。人間について言えば、遊びを奪われた人間は、はるかに暴力的かつ反社会的行為に走りやすく、抑鬱状態や根強い不信感に捕らわれやすい。

1.6.　田舎と都市、および民族と民俗

小熊（2002）は、『＜民主＞と＜愛国＞』において、戦後日本人のナショナリズムと公共性について次のように述べている。

中国文学者の竹内好が、戦後に元疎開児童たちの体験を聞き集めたところ、「家庭からの贈り物は教師がうわまえをはねる。配給の油は横流しする。止宿先の旅館では一般客や教師には銀メシを供し、学童たちはイモや雑穀入りの黒いメシをあてがわれる」といった事例が大半であった。こうした農民への反感は、疎開児童にかぎらなかった。戦中から戦後にかけて、なけなしの家財や衣類をたずさえて農村に食料買い出しに出かけた都市住民たちは、自分たちの家財を二束三文に買いたたく農民に反感をもった。

一方で渡辺（清）の日記によれば、農民たちは「都会のやつらも、こんどというこんどは百姓の有難味がわかったずら」「このさい町場のやつらをもう少しきゅうきゅうの目にあわしておいたほうがいいずら」と述べていたという。のちに読売新聞社長になった渡邊恒雄は、戦争末期に二等兵として招集されたさい、自分たちの食事は「麦かヒエか粟。それが茶碗に半分程度」だったのに対し、「小隊長は山盛り食べて」いたと回想している。丸山眞男は一九五一年の論文で、戦前の教育は個々人の責任意識に根ざした愛国心を育てたのではなく、「忠実だが卑屈な従僕」を大量生産したにすぎなかったと論じている。丸山は、「近代的な個人主義と異なった、非政治的な個人主義、政治的なものから逃避する、或は国家的なものから逃避する個人主義」が現れていったと位置づけている。日本社会では、「自由なる主体的意識」を持った個人が確立されておらず、そのため内発的な責任感がない。そこでは権力者さえもが、責任意識を欠いた「陛下の下僕」あるいは「下僚のロボット」でしかないという、「無責任の体系」が支配する。

大塚久雄は戦争末期に、相模湖周辺の農村に疎開しており、そこで農民たちの「近代『以前』的」と彼が見なしたありように接触した経験が、影響したと思われる。こうした「大衆蔑視」や「アジア蔑視」は、後年になって吉本隆明や新左翼系の論者たちなどから批判された。そしてそれは、丸山や大塚が、西洋近代を理想化した特権的な知識人だったと位置づけられる要因ともなった。相模湖周辺の農村に疎開した法学者の川嶋武宜も、一九四八年に『日本社会の家族的構成』を出版して、地方の家族制度を「日本封建制のアジア的性質」を示すものとして激しく批判した。丸山などと対極に置かれる存在だった「無頼派」作家の坂口安吾も、一九四六年の「続堕落論」で、農民をこう非難している。文化の本質は進歩ということで、農村には進歩に関する毛一筋の影だにない。あるものは排他的精神と、他へ対する不信、疑り深い魂だけで、損得の執拗な計算が発達しているだけである。こうした論調の背景にあったのは、当時における都市と農村の対立と、闇経済の蔓延であった。このことは、都市住民の生活苦をいっそう深刻化させ、坂口に見られるような「脱税」への

非難をひきおこした」。「生活様式の変化は、人びとの意識をも急速に変えた。西日本の農村を調査していた民俗学者の宮本常一は、一九六八年に、「昭和三五年頃を境にして村人の統一行動が非常にむずかしくなってきていると記した。地方コミュニティが崩壊し、全国の生活様式や文化が「単一化」するにしたがい、人びとは「村人」から「日本人」に変容しつつあった。

また個人主義と他者への想い遣り（教養）とは相互に矛盾はない。日本人も鎖国をする前は、イギリス人のように海外に出ていた。この時代には封建領主の支配はあっても、国家も国籍もなかったから、自由な渡航や移住は成り行き任せでありえたのであろう。

日本人はどうしてこれほどまでに、本を読まなくなったのか、哀しくて仕方がない。日本の公教育が強固になるにつれて、このくにの市民は皮肉にも知的劣化を起こしているのだろう。私たちの「森とむらの図書室」（小菅、藤野分室）にも、国内外で収集した山村調査原票のほか、環境学習や生物文化多様性関係の図書が五千冊ほど所蔵してあり、山村振興を願う人々に活用していただきたい。しかし、これまでは蓄積してきた資料を利用する人々は残念ながら少なかった。

現代の日本人に打ち捨てられた過去が、私には失ってはならない未来に想えるのだ。過剰に便利を追い求める現代文明は自然災害、人為災害によりほころび、生き物の文明に移行する秋が必ず来るだろう。預言者でなくとも、論理的に考え、感性的に観れば、このことは自明なことだ。エコミュージアム日本村、日本村塾を勧めてきた。でも、私は国粋主義、日本民族主義、国家主義、いわゆる右翼、そのどれでもない。私は民族の伝統文化には敬意をもっているが、あえて言えば、自然主義、地域主義であり、保守底流であっても、保身に汲々とはしなかった。どの民族でも伝統文化は再創作し再生しながら、継承することが大事だと思う。調査研究で世界各地を巡って、日本に限らず他地域の民族や伝統文化には敬意を払ってきた。この点では世界市民 cosmopolitan である。

海洋に浮かぶ花綵列島に連なる日本は本来開放的であった。大陸から度重なって、多様な民族集団が移住し、また、ここからも大洋の彼方へと移住していった。山地が多く地理的隔離が容易であったので、人口の少ない先史時代や古代には移住者集団は客人として受け入れられて、各地で安住の地を得てきた。しかし、中世の封建制を経て、ついに近世の幕藩体制が確立し、鎖国によっておおよそこの島々は 250 年余り閉鎖された。これによりシマ国根性は逆転的内向きに変質し、村の中のムラ社会も排他的に変容した。村外からの移住者への差別は潜在する。やはり心因性の後退動因が潜んでいるということか。

検地により封建・幕藩体制が確立、刀狩によって武器は武士専有になった。必然的に、農民・常民の抵抗は「非暴力・不服従」となる。アメリカのような銃社会ではない。田舎の一揆や都市の打毀しといっても、武士に専有された武器を振り回すようなことはできなかっただろう。圧政に耐え、苛酷な税や飢饉などでやむなく上訴し、おおよそ非暴力・不服従の抵抗であっても、見せしめのために首謀者らは極刑に処せられた。この精神風土が根深く今に続き、お上に異論を唱えることは自粛し、盲従する。なかなか民主主義や個人主義、あるいは自由・平等・友愛の精神は普遍的にならない。脱亜入欧して物欲を昂じただけで、もう一方の教養は高めなかったのだ。和魂洋才と言いながら、和洋の魂を抜き去り、和才を捨て、洋才の実利だけを猿真似した。

ご婦人方からは山村の為にありがとう、これからもよろしくと言われることが多い。 有力男性からは、たとえ言われても、外交辞令で、本心からではない。老農からは「頭が良い人」は住めないし、追い出されるから、移住するなと言われた。村役人は、観光客とし

て浅く付き合い、「お金を落としに」来村するのは良いが、「頭が良い人」が深く山村を知り、居つくのは迷惑なのだ。しかし、私たちは相当額のお金を支払ったのだから、金目当てだけが前進動因でない。もちろん、頭が良い訳ではないのだが、志はあったのだ。

排外的な応対により、土地を持たず、生業を持てず、地場産業に安定した職を得られず、移住者は定着できないで、都市に舞い戻るのだろうか。限られた土地であるからには、大勢を受け入れることはできないので、排他的になることは地域社会の維持に不必要なことではなかった。しかし、現在はその対応によって、山村自体を失う状況にある。都市では出生率が低い。農村から子供たちが都市に出てきて、都市人口は増加し続けた時代も終わったのだろう。山村は過疎高齢化により、もう多くの子供たちを都市に送りだせない。都市民の定住を寛大に受け入れ、 緩やかな地域社会の変容により、持続と復元を図るのが良い。

何が地域、郷土の仕打ちか。イエ、ムラ社会である故郷の実態を、その極限の現代史に探ってみよう。一ノ瀬（2010）はとても丹念に「銃後の故郷」の実態を検証している｛注３｝。一ノ瀬によれば、＜郷土＞は人々にとって親しいものであったが、同時に徴用された兵士らを拘束し、死へと追いやるという面も持っていた。戦死者たちの問いに生者が正面から向かい合うことは、「何不自由のない生活」と良心を脅かすから危険であり、戦死者への態度は「感謝」にとどめておくのが適切で、「なぜ」という問いなどは禁句にするのがいちばん賢いのだろうと述べている。結局、一ノ瀬は民俗学の研究には、あえて不遜ないい方をすれば、「政治」の臭いがしないと述べているが、日本民俗学者ではない私は政治を覆い隠し、責任逃れをしたのが、柳田民俗学ではなかったかと勘ぐっている。これに関する事実を明らかにして、根拠事実に基づき批判的に再検討しなければ、日本民俗学は非情理に、また日本人を不幸な戦争へと導くだろう。

イエ、ムラ、シマといった封建遺制によって、自然や山村を大事にしたい私たちの活動が、なぜ、何度もムラから追い出されてきたのか。情けないことに山村は誇りを失っているからだろう。それでも、誇りある思想信条として、私は自分の問題として、山村の誇りを受け継ぎ、伝えたいと考えている。「絆と思いやり」こそが教養であり、これらを失ったから、このくにははしたなくなっているのだ。言葉の心（含意）を歪曲して使う為政者や「学者」が多いので、市民が惑わされる。市民は騙されないように、自分で考え、このためには生きるための学びから逃げてはいけない。

雑穀栽培を保存するために、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請しようと普及啓発活動を 5 年間ほど続けてきた。最近、山梨県上野原市農業委員会の方々から次の事を聞いた。村では村人が話し合うことも少なく、それぞれに孤立的存在である。農耕技術の改善協力、作物作付の状況共有などがなく、技術・技能の継承ができず、作物の生産過剰と不足が浮動する。残念なことに、私の直観はおおよそ合っていて、村という地域共同体は助け合いを大事にしているということは誤解であったようだ。羽島での経験とは異なって、関東山地の山村では村人個人から旅の人のことはほとんど広がることがなかった。つまり、山村では地域共同体が著しく傷つき、崩壊に向かっているということだ。同じことを上述したように、1960 年代に宮本常一が西日本の農村調査ですでに指摘していた。

1.7.　他者の体験からの補足

小此木（1998）はモラトリアム心理について次のように述べている。私も共感し、同意する指摘が多い。

まず、モラトリアム（支払猶予期間）とは戦争、暴動、天災などの非常事態下で、国家が債務・債権の決算を一定期間延長し、猶予し、これによって金融恐慌による信用機関の崩壊を防止する措置のことである。E.H.エリクソンは、語彙モラトリアムを転用して、青年期を心理社会的モラトリアムの年代と定義した。このモラトリアムは大人になることで終わり、自分固有の生き方（アイデンティティ）を獲得して大人になり、一定の職業、特定の配偶者、社会組織、役割としっかり結び合い、安易なやり直しのきかないことを覚悟した倫理的な人生となり、ここでは義務の遂行と社会的な責任が問われる。

ところが、多くの日本人には個人主義が身についていないので、常に外のものに頼り、お互い依存しあいながら、それをまた生きがいにして暮らしてきた。日本では、島という地勢的条件により、文化的モラトリアムを経て、同人種、同言語、同文化といわれる一体感幻想が共有されるようになった。海外から知識・技術を輸入するのに、都合の良いときは歓迎し、都合が悪くなれば迫害し、鎖国する。海外文化の影響を制限して、江戸時代には日本文化の基礎を確立した。いつまでも子供、あるいはウチワの人々との間で依存しあい、それ以外の世界を見ない。ヨソ者は何らかの侵略や恐怖の対象とみなすといった島国的心理はモラトリアム人間と共通性がある。日本の大衆は伝統的な文化そのものを次第に見失い、他人指向的になり、周囲と調子を合わせる毎日を送り、科学技術の進歩によって生み出される新しいライフスタイルを次々と身に着けることに追われ、受け身的な生活態度が共通の心性になっていく。核家族化現象の急速な進行により、地域社会と家族のかかわりもなくなり、都市化と団地化がどんどん進んだ。

自我理想は自己中心的な自己愛を一度否定した心によって成り立っている。自己中心的な欲望を否定し、自分のアイデンティティのため、国家社会のため、学問のため、自分を超えた何かに身をささげる人間としてあるべき姿が自我理想である。しかし、教育関係者は次のことを指摘している。子供のイジメが社会問題化している背景には、子供たちの心から正義の観念や勇気が失われたからだ。イジメられているのを見ても助けず、イジメっ子に逆らったら、自分が逆にイジメられるという恐怖感を抱き、関わり合いにならないように見て見ぬふりをするか、イジメの側に加わって、自分がイジメられないように保身を図る子供が大多数になっているという（小此木 1998）。

米国の国立精神保健研究所における、苛酷なストレス状況を生き抜いた人々の研究によれば、彼らの心の強さを支えたのは、信念と自己コントロールであった。目標達成への信念、希望とか、自信も大切だ。人間の心は社会や環境の変化によって受身的に強いられた心の状態でいるかぎり、積極的な機能を果たすことができない。モラトリアム人間心理は受身的にただ押し流されていけば、何事にも責任を持つことがなくて、当事者意識を欠き、決断を先送りして、対応が後手に回る。エリートたちが無力さを露呈する背景には、偏差値志向の受験進学教育がある。個々の人びとの価値と真の能力を現代社会は評価する方法を欠いている。学校教育は創造知や実践知を開発する機会を持てなかった。全人間的な成功知の活力を子供たちが発揮できるようにすべきだ。短縮定型化の法則は最も普遍的で最も強力な原理として、われわれの心理行動を規定している。この法則は現代人が従わねばならない生きるための基本原理となっている。しかし、この進歩とともに、古き良き人間的な様々な体験や伝統、文化も人との関わりもどんどん失われていく。この法則を唯一絶対とする衝動こそ、次の世代に悪影響を及ぼす恐れのある環境破壊や、人間の心が耐えられないかもしれない急激な変化を容赦なく作り出していく。どうしたらこの衝動に歯止めをかけることができるのだろうか。われわれは欲望を拒絶する自己コントロールを取り戻さなくてはならない。現代人は確かに豊かな社会の中で、あまりに不自然に、人間本来の欲望を過剰に、人為的に歪め、商品化して、貪欲に求め、その中に溺れている。モラトリアム人間たちが自分を取り戻す上で、再会を願うのは、

それぞれ克己の規範となるモーゼのような父性像なのではなかろうか（小此木 1998）。

もう一人、中島義道（2006）の『醜い日本の私』から意見を要約する。中島の変人度は現場に生きてきた私の比ではなく強いが、彼の情理をもった哲学的論考には大いに共感する。特に、日本人の自然観が実は観念的であるとの指摘には私も同意する。

日本はたいそう美しいし、日本人も清潔で規律正しく、穏やかで趣味の良い服装で、外見は比較的美しいと思う。しかし、自分のこと以外の事象には無関心だ。日本人にとっての自然とは固有の領域ではなく、副詞的自然で、語彙自然は自然にという意味しかもたない。俳句の季語も半分以上は人為的なものである。日本語には対照される語彙として自然がなかった。自ずからは西欧近代的意志とは無限に隔たった概念である。したがって、日本人は自他の行為に対して責任追及の手が緩み、自ずから第 2 次世界大戦は起こってしまい、空気支配に抵抗できなかった。あらゆる人為現象も自然現象の一部であり、あたかも自然現象のように自ずから起こってしまうのである。古来、日本人は自然に親しんできたといっても、その自然とは客体としての自然ではなく、観念あるいは言葉という人工膜を通してはじめて現出してくる自然なのだ。日本人はあくまでも観念や言葉を通して、眼前の自然を楽しむのである。こうした観念的自然観が、街の喧騒を削減し猥雑な景観を改良するという方向にブレーキをかけているのである。

日本的欲望自然主義は前後左右から自分を突き刺す他人（世間）の視線を気にかけた欲望の実現であって、日本では自然な欲望追及の仕方なのだ。日本的自我ははじめから徹頭徹尾他人の視線のもとにある。頭で考慮するのではなく、他人の視線を考慮して、複雑な要因からなる状況にさからわず、いっさいのはからいを捨てて、まさに自然に動いていく。定型化された礼儀正しさが、表面的にそうした態度に出ていれば何が起ころうと大丈夫だ、という手堅い保身術に見えてしまうのだ。

定型化された言葉は、自然現象なのであり、だからそれに異議を唱えても、まったくわかってもらえない。自然に反する異常者とみなされてしまう。心から虚しいことに、いかなる合理的な反論を出しても、相手は梃子でも動かない。なぜなら考えて行動しているのではないのだから。人間であれば、他のすべてが与えられていても、自分の信念に反したことを常に強制され、自分の感受性に反したことを常に感じるように強制されたとしたら、その人生は生きるに値しないであろう。

言葉を定型的に使うべきことを骨の髄まで学んで、いささかの疑問も感じない日本人は嘘に対してすこぶる寛大である。なぜなら真実より大事なものがあるからであり、それは対立を避けることだからである。イギリス人のオールコックが幕末に日本に来て、驚いたのは幕府の役人から商人たちまで、申し合わせたように嘘をつき、真実をいわず、しかも、さらに驚いたことには、嘘をついた当人はまったく罪の意識がないことである。日本では深層演技に基づいた言葉遣いや態度がおとなの振る舞いとして歓迎されるからであり、これに従っていれば安全で、非難されず、臭いほどの自己防衛が働いている。マスメディアの人たちが、真実らしい感情をこめて語るのは、集団的催眠の実施であり、ここには大量の嘘が繁茂している。

私は病的なほど異常だとはみなされず、一応は普通人と認知されるゆえに、偏屈、傲慢、自分勝手、等々ありとあらゆる小石を投げつけられる。誰もまともに聞いてくれず、提示している問題を正面から見てくれない。私を迫害する善良な市民の感情の表出は、ただ多数であるゆえにわがままと思われないのに、私が私の感情を表出すると、わがままだと一蹴される。こうして、自分の周囲の人々との感受性の微妙なずれを日々自覚しながら生きていくうちに、私は絶え間ない迫害を自覚し、あきらめ耐えるようになり、精神的に退化し、危険な状態、自己嫌悪に陥っていく。自分の感受性を大切にしたい者にとっては恐ろしい責め苦であり、子供たちは大人の社会をよく観察して、

自分が抹殺されないために誰かを抹殺するすべ、感受性のファシズムを学んだのである（中島 2006）。

私とて、ムラ社会からの原因不明瞭で不条理な追放にあっても、原因を深く追求せず、村（田舎）を批判せずに、自分にあるだろう原因を考えてきた。白いスカイラインや赤いボルボに乗って、着心地の良いシャツを着て村に通っていたからかな。隠れたムラ社会の有力者にあまり貢納しなかったのか、都市に住む偉そうな大学教授であったことか、さらに、私の性格が堅物で問題なのか、いやになるほど考えた。しかし、このように自分を責めても問題は解決しなかった。日本の世間一般で見れば、ムラ撥撫というイジメ行為は被害者個人を追い込み、鬱状態、自傷から自殺に追い込むか、あるいは被害者が恨みを晴らすために、反発して暴力的になり、果ては殺人に至ることも全国的には少なからずあった。

私は、多くの師友や家族に恵まれていたので、自殺や犯罪行為には至ることはなかったのだが、冷静さをいくらか失って、心を自傷してきたことは自覚する。中島や清泉（2018）が論述している通りである。この国は加害者に甘く、被害者を貶めていつまでも痛めつけるのである。つくづく加害者側に立つ弁護士という職業につかなくて良かったと思う。清泉の所論のように、ムラ社会には要領よく距離をとって暮らすか、中島の所論のように抗い続けるかである。どちらもありうることだが、しかし、このくにをよく変えるにはしたたかに抗うしかないのだろう。

このように、子供のイジメの構造はむしろ大人社会の模倣か、あるいは、数％の人々にはイジメは生まれながらの所業であるのかもしれない。

日本の江戸時代に幕藩体制下で鎖国して以来、閉鎖したシマのムラにおいて、約 400 年続いてきた悪習が払拭されないままにあるのだ。明治維新によって脱亜入欧、和魂洋才を標榜しながら、科学技術は無批判に受け入れても、その思想・哲学は無視し、拒否した。ヨーロッパの自由、平等、友愛の精神や個人主義を本質的に理解したのは坊ちゃん（夏目漱石）のほか何人もいるが、ほんの少数であったのだろう。第二次世界大戦に敗戦しても、教科書を黒塗りしただけで、日本はアメリカと比べて物量的に劣っただけだと精神的にも反省せずに、精神の変容もせずに、悪習を断ちもしなかった。自分の頭で考えないので良くは変わらず、易きに付和雷同し、悪く流されるばかりである。

第 2 章　心の構造と機能

言葉がいちばんいい効果をあげるのは、
語り手が彼の新しい見解によって、
聞く人たちよりほんの鼻の高さほど
先んじているにすぎない場合である。
（K. ローレンツ 1963）

環境学習原論を探求することによって、心の構造について思索してきたが、自ら体験したムラ社会の形成とムラ撥撫の発生を事例研究する過程で、心の機能についても思索が必要なことに気づいた。

2.1.　心の構造の変容

ミズン（1996）は『心の先史時代』の最後の章の大部分をスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの滞在中に書いた。ここは中世ヨーロッパにおける有数の巡礼地であった。9 世紀に建っていた小さな教会の場所に建築された大聖堂はロマネスク建築の代表的な傑作である（図 1）。私はポルトガル旅行（2019）の延長で、ポルトから国境ミーニョ川を越えて、スペインの聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラに行き、カテドラルを訪問した。ここにはヨハネ黙示録を基にした、名匠マティによる 200 体ほどの彫像がある。

ミズンはこの古い都市の建物の間を歩いていて、心の構造の比喩を、大聖堂を用いてすることにした。人間の心の構造は進化の産物である。現代人類にとっては類推や比喩は思考のすみずみにまで浸透し、芸術や宗教、科学の根幹をなすものになっている。

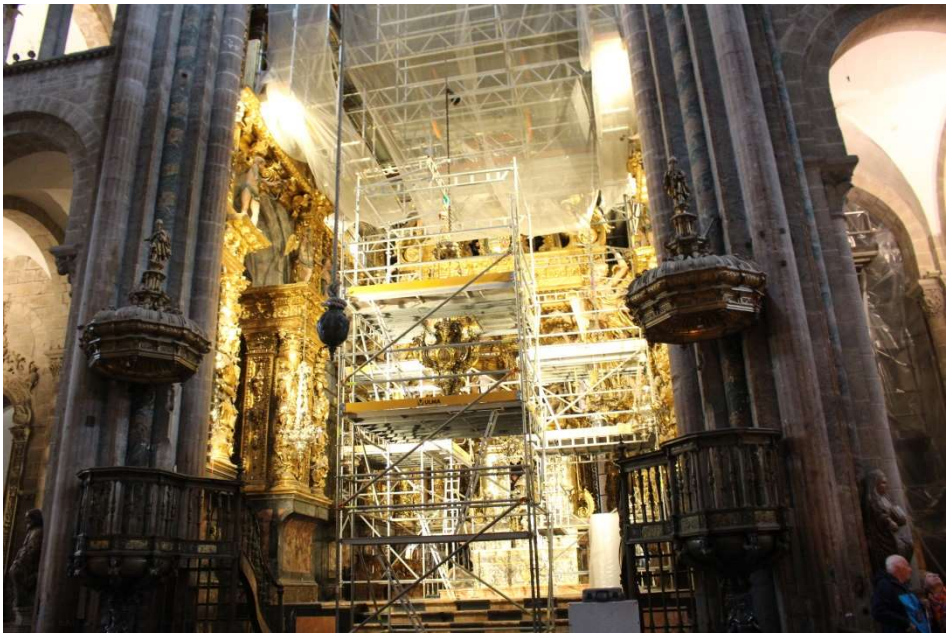

図 1.　拝観した大聖堂の内部、工事中（2019）

心の構造についての新しい説を、ミズンはこの大聖堂の構築過程を比喩として用いて説明している。

聖堂のような心の進化の第 1 期は、一般知能という心から始まった。この一般知能は聖堂の中央にあり、一群の情報を受け入れて、すべての役務、思考の過程を生じる心である。第 2 期には知能が特化して、狩猟採集で暮らしていた人々の心の構造では、進化した結果、3 つの礼拝堂が付加されたと比喩すれば、それらは社会的知能（直観的心理学の痕跡)、博物的知能（直観的物理学の痕跡）および技術的知能（直観的生物学の痕跡)、である。社会的知能は他の個々人とやり取りをするために用いられ、心を読むモジュールを含んでいる。博物的知能は自然界の理解、狩猟採集民の暮らしに不可欠な理解に関するモジュールの束である。技術的知能は石器や木器を製造し、それを操るための心のモジュールを内蔵しており、人工物を投げるということも含んでいた。ただし、この段階では行動領域での知能の統合をすることがまだできなかったようだが、一般的知能（広間）は依然として基本設計の根幹をなしていた。また、第 4 の礼拝堂として言語知能があったのかもしれないが、これの位置づけや他の知能と関係については不明である。第 3 期における、同じく狩猟採集民の心の構造はすべての知能（礼拝堂）が連結されて、認知流動性が生じる心の構造になった。したがって、特化された知能によって生成された思考と知識は心の中を自由に流れて、統合することができるようになっていた。

ミズンの解説した心の構造のうち現代の狩猟採集民の心と、私が敷衍した現代の都市民の心を図 2 に示した。現代の狩猟採集民は優れて統合的な心の構造をもっていると、ミズンは評価している。技術的知能（生業に関わる伝統的技能）を裏づける博物的知能（自然に対する伝統的知識体系）が豊かにあり、これら基層文化を継承し、狩猟採集民集団を治める社会的知能（家族や小集団)、必要な言語知能と全体的に機能する一般知能が、統合された心の構造を形成している。生き物としてのホモ・サピエンス・サピエンスの心の構造進化の現代的到達点にある（木俣 2009)。

それでは、私たち都市民はどうなのだろうか。自然から離れて都市生活になり、伝統的な生業技能を失いつつあり、技術的知能は工業的なテクノロジーに偏在するようになりながら、あまりに高度・高速化によって、大方の都市民とっては自ら手を加えることができないブラックボックスやパーツになり、次第に技術的知能も衰えてきている。同時に、博物知能はデジタル化映像や情報で代替されるようになり、これまた、都市民には自然（原自然）の現実が衰微し、仮想こそが自然（半自然）であるかのように、誤認識するようになってきた。これらの知能の中で唯一拡大しているのが情報言語である。一方で、本来の言語知能は衰退して、数えきれないほどあった民族言語は消滅の危機にある。一般的知能も縮小して、認知流動性が低下し、それぞれの知能を統合することが困難になってきている。現代は、新たな代替言語知能が現れて、人間の心身の構造を強化するという名目で、心の構造をも制御しようとしている。最近では、これを人工知能 AI、 artificial intelligence と呼ぶようになった。いずれ近未来には、この外付代替知能がホモ・デウスと一体化して、生き物であるホモ・サピエンス・サピエンスを隷従させるか、滅亡させるかもしれない（ハラリ 2011、2015)。

狩猟採集民は腕の良い博物学者であり、植物や動物に関する博物的知能はすでに 180 万年前の人類の心には十分に発達していた。農耕開始以前に彼らはとても多様な植物利用を行っていた。それでも何ゆえに、12000 年ほど前から農耕を始めたのだろうか。その後、農業で暮らしを立てるようになった。狩猟採集、農耕など状況変化に対応できる生業に基づいて暮らすことに比べて、農業に依存して暮らすことは大きく見劣りがする。穀物の畑を手入れすることに一定の人員を定住させね

ばならず、衛生や社会的緊張、資源の枯渇などの問題が起こる。狩猟採集民は移動するので、このような問題は起こらない。近東の最古の農業社会では歯や骨の状態から見て、健康状態が狩猟民より著しく悪かった。定住した農業の起こりは感染症、栄養不足、平均寿命の低下を招いたようだ。

歴史をもう一度整理すると、15000～10000 年前頃に、地球が温暖で湿潤な気候と寒冷で乾燥した気候とを行き来するゆらぎの時期があった。最後の氷河期が終わりを迎えていた時期に、世界各地で農耕が行われるようになった。13000～12000 年前頃に、狩猟採集民は乾燥という気候的危機の時期に、その生業を維持しながらも、建物や貯蔵施設を備えた定住地を築いた｛ナトウフ期は 10500 年前まで続いた｝。農耕文化の初期には野生オオムギが集中的に利用されていた（ミズン 1996）。

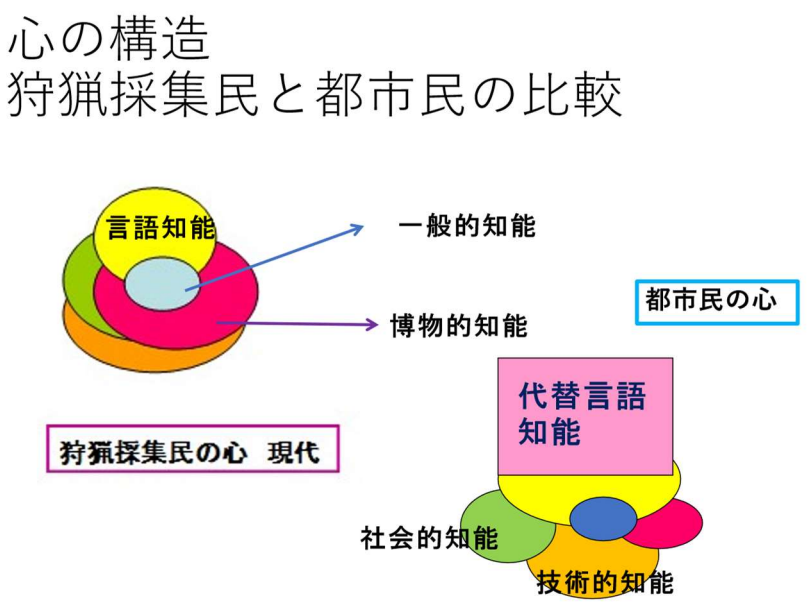

図 2. 現代人の心の構造（木俣 2009 改変）

2. 2.　人類の進化史

人類の進化を大まかに振り返ってみる。

新第三紀鮮新世（約 600 万年前）に類人猿と分岐して、人類はその進化を始めた。主要な種分化の流れは、アウストラロピテクス・ラミドゥス（450 万年前）、第四紀更新世になってホモ・ハビリス（250 万年前）、ホモ・エレクトゥス（180 万年前）、後期更新世から完新世にかけてホモ・ネアンデルターレンシス（20 万年前～3 万年前）、そしていよいよホモ・サピエンス・サピエンスが 10 万年前に出現して現代に至っている。この間には、他にも多くの人類の祖先種が分化しては消滅してきたのである。現生人類であるホモ・サピエンスについては、6 万年前～3 万年前に文化の爆発的発達が起こった。この間に、同時に存在していたホモ・ネアンデルターレンシスは絶滅し、ホモ・サピエンスだけが現在、完新世に至るまで生存を続けている（ミズン 1998）。一説によれば、サピエンスがネアンデルターレンシスを絶滅させたとも言われている。サピエンスの発達した知能による血塗られた初期文明が心性を浄化するためにシンボルとしての芸術や宗教を萌芽させたのだろうか。サピエンスも遊動のムレ群から、定住の村落に社会構造が変わる。これによって変転する指導者リーダーが固定的な支配者に代わる。村落にムラ社会が形成されて、ムラ社会の支配

者に支配欲が昂じ、他方で地位を脅かされる恐怖感から猜疑心が募る。この猜疑心が闘争の萌芽になったのだろう。

ミズンは一万年ほど前に環境的な条件が突如として変化して、栽培される植物や家畜に依存すること、すなわち農業｛注：初期には生業としての農耕｝の起源を決定づけた心の在り方の変化には 4 つの側面があると言う。1）植物資源を収穫し加工するときに集中して使える道具を開発する能力。これは技術的知能と博物的知能から発する。2）社会的権威や権力を獲得するための媒体としての動物や植物を用いる傾向。これは社会的知能と博物的知能を統合することに由来する。3）植物や動物との間に、人間との間に発達させられる関係と構造的に相似な、社会的関係を発達させる傾向。これは社会的知能と博物的知能との統合がさらに進んだ結果である。4）技術的知能と博物的知能を統合してできる、植物や動物を操作しようとする傾向。

先史時代には狩猟採集民として暮らしていた現代人類（サピエンス）は、近年の狩猟採集民にみられると似たような性質の関係を、植物や動物との間に発達させたのだろう。狩猟採集か農耕かという単純な二元論ではなく、四万年ほど前になってやっと発達した生業における連続的な関係の中での二極でしかないのだ。しかし、今日生きている人の大多数にとっては、狩猟採集の世界は技術的知能や博物的知能という特化した認知的領域を含め、先史時代のものでしかないということで、取り残されてしまっている（ミズン 1996）。

現代を暮らす日本人の多くは心の構造を構成する各知能が分断されており、これらを統合できずにいるようだ。このところ若年層の自殺（自傷）が急増しており、心的傷害を直観する機能あるいは回復力 resilience が弱いのだろうか。また、神仏の提示した戒めを崇敬せずに、信仰を衰微させている。昨今、日本の世俗では、語彙・神があまりにも安易に使用されている。たとえば、古くから用いられてきた神童というような語に加えて、人間のささやかな行為に対して神対応、神業、ビールの味に神泡などが用いられている。日本では能力の著しく高い者や物、事象を、神ならぬも、神と崇めてきた。しかし、今どきの日本の現人神が能力も低いのに、巷には氾濫しているようだ（島田 2020a、2020b）。信仰論については別の機会に詳細に論じる。

心の構造における一般的知能は、ピアジェの見解に従えば、学習および意志決定についての汎用の規則によって構成されている。基本的特徴はどの行動領域であり、経験されたことに照らし合わせて行動を修正するために用いられる。学習と問題解決のための包括的な規則群。博物的知能（直観的生物学）は自然界の理解、動物、植物についての思考。居住地域についての地理学。社会的知能（直観的心理学）は他の個々人とやりとりする心を読む。個人間の社会関係を調整する。社会的な相互作用、社会的柔軟性の能力。技術的知能（直観的物理学）は道具を作り、操る。環境から資源を取り出し利用する。言語知能は感情や情報を伝達する（ミズン 1996）。

ミズンの論考に加えて、現代都市民における心の構造を考察してきた（木俣 2019）。さらに、超克を進めるために、心の構造における一般的知能の認知流動性が心の機能を高め、心の統合をもたらす可能性について考察の端緒を得ようと試みた。そこで、心の構造はその機能と一体的に作能することを考えてみたい。

心の構造の諸知能はミズンの見解によれば狩猟採集民において統合されていたが、次第に、集住する都市国が成立し、その権力支配が強まるにしたがって、諸知能の領域は再び分断されるように向かった。具体的には、小集団における自治的な社会的知能は国社会の

制度に依存するようになった。その後、諸産業が発達し、18 世紀半ばには産業革命が起こり、以来とりわけ現代では高度な科学技術による生産商品がブラックボックス化し、日常生活における技術的知能さえもほとんど無力無用になり、自然と乖離した都市的生活は五感の鍛錬を阻害し博物的知能を縮減し、言語知能は情報処理機器に代替し、これまた直接的な意思疎通を衰微へと導いている。広く普及した公共学校教育制度での画一教科とその分断は全体的な認知流動する一般的知能を発育させない。さらに、現代人の心の構造の主要部は代替言語知能としての情報機器で、これは効率的なアルゴリズムはあるが、非効率的な良心（第七感）はそこには組み込まれ得ない。現代の科学技術による便利さのすべてを全否定的にとらえているのではなく、便利の過剰を選択する必要性について述べているのである。個人の自律した選択が生活や人生の質量を知足するように願いたい。

心の機能を支える五感（視・聴覚、味・嗅覚、触覚）は美を感じ、第六感（直感・直観）は真を観ぬき、第七感（良心・教養）は善を行う。すべては天性（生物の遺伝子ジーン、gene）のみならず、師友を求め選び、自律した学習（文化の自己複製子ミーム meme）によって、粗野・野蛮から洗練・文明の品性を鍛え磨くのだ。素のままの美しい暮らしは自然と文化の粋であって、自然が粗野、文明が洗練と固定的偏見はしておらず、むしろ現代文明が粗野で野蛮な状態にあるのではないのかを問いただしたい（木俣 2019、黍稷 2020）。

農人降矢静夫は自然に接して暮らしてきたので、博物的知能は当然ながら高い。社会的知能は狭い生活世界に暮らしながら、多様な交友が幅広く、他地域、海外の世界にも関心かあるので、高く維持される。地域社会では適切な距離をもって交際を保っている。技術的知能、特に農耕については研究的に実践している。言語知能は俳句や書簡で鍛えている。一般的知能、直観は鍛えられている（木俣 2021、第一論考）。

すなわち統合的な心の構造が健全に築かれている。年老いて体も衰えて、目を患い、それでも晴耕雨読の暮らしで、自然の中で、五感（視・聴覚、味・嗅覚、触覚）は美を感じ、俳句を作り、書簡をしたためる中で、第六感（直感・直観）は真を観ぬき、自ら読書し、学び、さらに多くの訪問者、交友者から学び、思索し、第七感（良心・教養）を豊かにしている。素のままの美しい暮らしを実践する農人である。ミズンが現代の狩猟採集民に認めた統合された心の構造に匹敵するほどに統合された心の構造に加えて、豊かな機能が農人には心の質と量において認められると僭越ながら思う。

受験教育による学校教育歴と自己学習による自由学問歴とは全く異なった内容にある（図３）。高校生の時に NHK 名古屋放送局の番組で、ソニー創業者の井深大の学歴無用論について討論した頃から学歴 school career とは何だろうかと考えてきた。東京学芸大学に 40 年間勤務して、優れた同僚教授や学生たちに出会ったが、それでも大方の振る舞いを見てきたところで、学歴は教養 culture を担保しているのだろうかと疑問に思い、教養とは何だろうかと考え始めた。さらに、世俗で苦労するうちに、学校教育歴と教養とは必ずしもそれほど高い相関はないのではないか。私は教養とは想い遣り sympathy であると理解し、第七感良心 conscience であると知るに至ったからには、なおさらそう思えるようになった（黍稷 2020）。

専門性について、考えるところがある。スペシャリスト、ジェネラリスト、さらに、両者を兼ね備える人、狭い専門性、広い専門性、それをまとめられる人。原初の大学には熱心な学習者しかいなかったと思う。私がそれぞれ 30 年ほど（ないし 50 年以上）、個人として特に親しく接してきた３人の師は、大学教授、山村農人および国鉄総裁であったが、それぞれに親しく、私の人生をよく導いてくださったと思う。これらの師とは学校制度に

よらない偶然と必然が混じった出会いであった。自ら師を求め、人生の学問を探求するのが本来の大学だと思う。私は理ばかりの客観主義的な自然科学者は学生の頃から好まなかった。国内外での野外調査、圃場試験、さらに実験研究も行い、かつ、それでも情理ある学習者が好きだ。

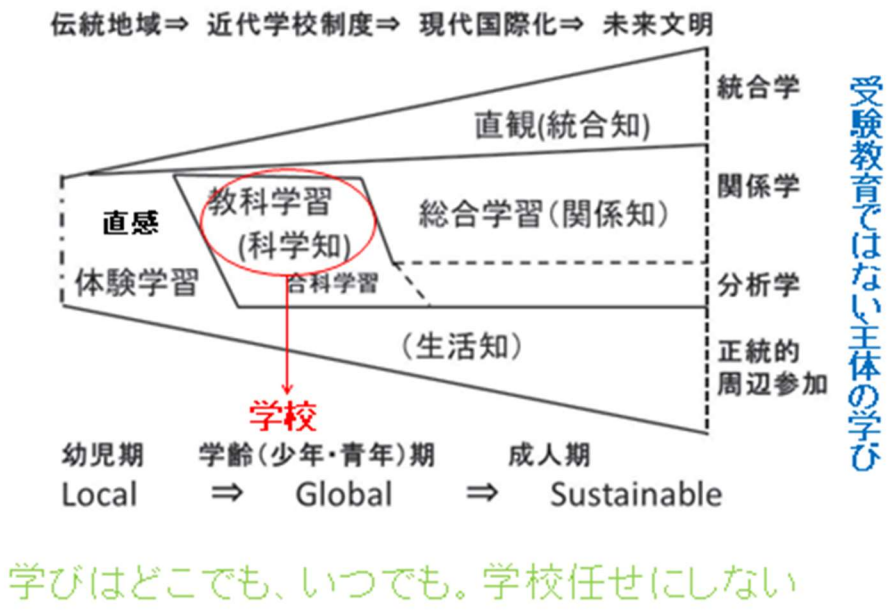

図 3. 人類の文明社会の複雑化に適応する生涯にわたる環境学習過程の構造

図４に示した ELF 環境学習過程は、いわば大聖堂という心の構造（ミズン）をシンボル化したもので、各学習プログラムは、これもいわば小聖堂に相似している。五感を磨く基本学習プログラム（博物的知能）、生活を磨く関連プログラム（技術的知能）、直観を磨く行動学習プログラム（社会的知能）、楽しみを深める統合学習プログラム（一般的知能）、小聖堂間の壁の一面を開け、各知能間の認知流動性を良くするのは柔軟な学習プログラム間の流れで促される。これらは心の構造を創り、機能を高め、第七感（良心・教養）を発達させる有効な道具になる。私はこれこそが環境学習原論の奥義だとやっと閃いたのだ。人生の苦難には辛くとも、直面、対峙するものだ。岩田（1986）の示唆した自然の三相と私見が合致することに意を強くし、ミズンの提起する心の構造に触発され、ゴールドシュタインの全体論によって心の機能に気づき､ELF 環境学習過程の役割を確信するに至った。

岩田（1986）は自然の三相（すがた）について次の様に説明している。私の想念ともよく親和するので、図 4 の枠組みを創作、改善し、この図示に至るために大いに励みになった。

ここでは自然観という観点からアプローチしてみよう。他界は、どのような自然観の、どのような側面に位置づけて考えたらよいのだろうか。ここでは、いわゆる自然の相（すがた）を、＜自然＞、＜半自然＞、＜非自然＞という三つにわけて考えてみたい。自然はわれわれの生活の周囲にあって目に見える自然を指す。日月星辰、山河大地、草木虫魚のありようが自然なのである。原自然といってもよい。半自然は人間の働きかけによって改変された自然を指す。集落、耕地、山林など

として、人間の、あるいは文化の秩序のなかに組み入れられた自然である。人間化し、文化化された自然である。この点を強調し家畜化された自然といってもよい。非自然は眼に見えない自然である。人間の手の加わっていない自然。文化という名のフィルターをとおして見られる以前の自然である。森羅万象がそこから生まれてくる自然の母胎、時・空の誕生する以前の眼に見えない自然、それが非自然である。非自然はほんとうの自然なのである。それが同時に他界なのである。このほんとうの自然を母胎として、そこから自然がその多様性をあらわし、半自然が自分の姿をさしだし、自分を犠牲にして、人間のために役立ってくれているのである。

われわれが自分ながら気づかない願望、衝動、あるいはあこがれというものは、自分自身のアイデンティティを求める行為（五項目）に関連していた。その一は外へ出たいということ、村落社会、コミュニティから出たい。その二は自分の足もとを確かめたいということ、自分が住んでいる世界を遍歴してみたい。その三は見えないものを見たいということ、結局は部分ではなく全体を見たいのである。その四はそういう世界に近づき、その世界の住民に対面したいということ、異質の世界、異形の人に交わりたいという願いがある。その五は自分の身近にもう一つの世界をつくりあげたいという止みがたい願望がある。

博物的知能は主に基本学習プログラムの自然誌 N を巡って、技術的知能は自然誌 N と文化誌 C を関連学習プログラムの生産 M によってつなぎ、社会的知能は行動学習プログラム（地域 L、協働 Cp、保全 Cn）によって広く展開する。言語知能は文化誌 C と世界観 W をつなぐ関連学習プログラムの思索 T によって豊かに発達する。一般的知能は統合学習プログラムの遊び P を巡るすべての学習プログラム、特に、感得 F によって楽しみを伴い、ほど良く作動する。これらの諸学習プログラムにおける領域を、いわば小聖堂の壁あるいはバカの壁を取り払うように認知流動性が心を機能させているのだ。

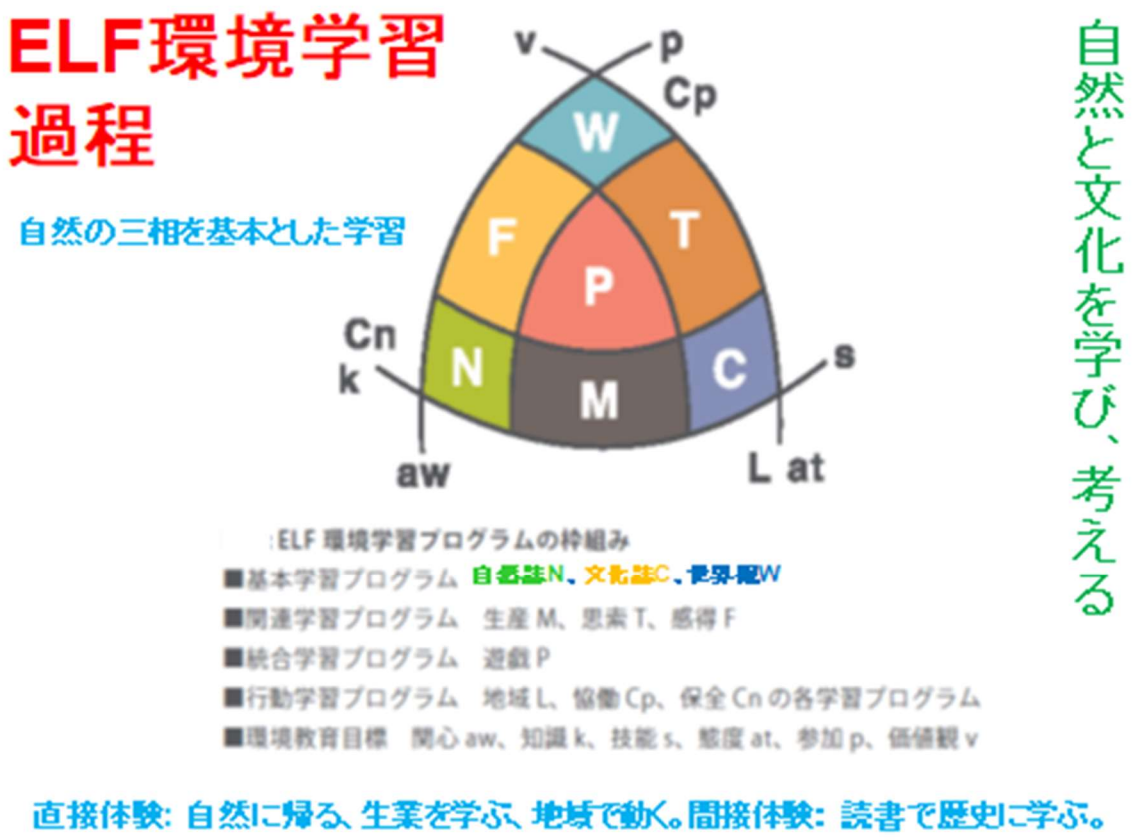

図 4. ELF 環境学習プログラムの枠組み

一般的知能は統合学習プログラムの遊び P、すなわち遊び心によって励起される学びのようだ。図３に示した生涯にわたる環境学習過程はいつでもどこでもの遊び・学びによる認知流動性の励起ということではないのか。身体的な五感（五官）から精神的な第六感（直感・直観）、第七感（良心・教養）にわたり、図４の環境学習の枠組みは人々の生涯を貫通しているのである。

心の構造は諸知能によって形成され、心の機能は感情によって作用する。心が弱く不安定な人は恐怖心に駆られて反応的攻撃をする。ヒト集団における遺伝子給源には善人から、中間人、悪人までという多様性がある。諸知能間のバカの壁を取り壊すのが認知流動性だ。直感だが、その壁がいわゆる痴呆性を強めていくのではないのか。このために認知流動性を鍛える連関学習プログラムが必要である。知能間をつなげ、知識を結合させ、思考を深める。自己家畜化は natural selection と artificial selection の調合を受ける。心の意思が文化的進化に影響するのなら、社会はよく変化移行できる。私的利害、雇用や借地などの関係によって囲い込み、公共（社会的共通資本）に対しては閉ざす。協調性、社会的学習能力は H. サピエンスの文化的適応進化、これらを弱めている個人らの集団は劣化する。村里があって里山があるのであって、里山だけがあるのではない。自然（原初からの自然）、半自然（文化としての自然）および非自然（心の中の自然、世界観）には時空間を超えるつながりがあるのだ。

M. コール（1996）は、『文化心理学～発達・認知・活動への文化―歴史的アプローチ』において文化的進化について次のように論じている。

文化を周辺にではなく中核に据える別のかたちの、心理学の提案に、大変共感を感じる。また精神における文化の問題を考える別の路を定式化するにあたっては、あらゆる人間科学の知識を統合することが重要であると強く確信している。

現代の文化人類学の創設者の一人であるB.タイラーは、社会は社会文化的発達の過程を受けるものであり、それは当然、心理学的機能にとっても重要な意味をもっていると考えた。{注：未開民族の研究により比較人類学の基礎を確立し、アニミズムを提唱した。文化人類学の父といわれている} 進化と進歩を等しいものと考える狂信的な考え方は、その世紀に相当鎮まったが、社会文化的進化についての考えは社会諸科学のなかでその重要性を保持していた。タイラーは文化を、環境の人間が作った部分と考えていた。その中に、知識、信念、芸術、道徳、法律、習慣などを含めた。文化的進化の水準を、さまざまな領域における達成水準、特に、科学的知識の程度、道徳的諸原理の定義、宗教的信念と儀式の条件、社会的・政治的組織化の程度を用いて評価した。

H.スペンサーは文化的発達と精神発達のアナロジーで、最も原始時代の人間は非常に単純な生活を送ったので、複雑な精神構造をつくりだすための基礎的な材料を持っていなかったと仮定した。世界の異なる民族の精神的特性や社会文化的環境が、時間の経過と共に分化してゆくと仮定して、ダーウィンが提案した進化の概念とこれらの考えを結びつける。

教育改革の目標としての持続性の問題に私が関心を持つようになったのは、西アフリカにおける私の初期の研究においてであった。教師たちは歌を歌って機械的に暗記するという手続きを使って、読み書きや数の表面的な側面を教えていた。また、大部分の子どもたちは、彼らがほとんど知らない言語で教えられていた。古いお下がりの教科書は、在来文化にも社会的環境にもおおよそ不適切であったし、ドロップアウトする割合も驚異的に高かった。しばしば、学校教育がもたらした最もはっきりとわかる結末は、若者が彼らの両親や地域社会の伝統的な経済生活の形式に背を向けるようにさせたことだった。私の考えによれば、問題の解決は、地元の技能、知識、関心の文脈のなかで、現代の経済的、社会的、政治的実践に参加するために決定的に重要な知識と技能を教える新しい学校教育の形態をつくりあげることであった。このアプローチはあまりに当然と思えたので、いろいろな地方を旅行してそのような学校に出会うことがなかったのに驚いたのだった。文献によれば、私が適切と思う原理にのっとってつくられた学校もかなりあった。これらの学校のカリキュラムは、在来の農業、工芸技能、民間伝承の訓練を思慮深く取り混ぜたもので、それに、探求し、記録を保持し、コミュニケーションする道具として基礎的な読み書き能力と計算能力が組み入れられていた。そうした学校は、生徒自身の実際の経験を教育の基礎とするデューイの理念をまさに具体化したものと思われた。そして、それらの学校はうまく機能したようだ。それを実行した人々は、より伝統的であるがヨーロッパ的な基礎をもつカリキュラムを、子どもたちが修得したと報告している。しかし、これらの学校はその後、例外なく消え去ってしまっていた。

第五次元と呼ばれている特別に構成されたコンピューターを媒介にした活動である。フィールド大学の研究の過程で、この第五次元は子ども、学生、研究者に長期間にわたって強力な相互作用をおこなわせる力をもつ柔軟な活動であることが分かった。第五次元は持続的な教育改革の過程を研究する効果的な道具であると信じることができた。教育と遊びを特殊なしかたで結びつけるこの方法は、多くの放課後教育施設が採用したいと思う種類の良い活動であると思えた。第五次元の活動計画目標は、実践的関心と理論的関心を結合させること、問題解決の目標や方略についての、文字や口頭でのコミュニケーションが使われる機会が豊富に生じる活動をつくりだすことであった。反省的抽象を重視するピアジェを見ても、コミュニケーションのなかでの思考の完成を強調するヴィゴツキーを見ても、あらゆる機会をとらえてコミュニケーションを道具として用いることには、理

論的に正当性がある。

2.3.　農業文明から自己家畜化

狩猟採集など多様な生業が基盤であった時代から、半栽培の前農耕時代を経て、約 1 万年前に植物や動物の栽培化・家畜化が進み、農耕文明がその数千年後に、ムギ、イネやトウモロコシなどを権力支配の基盤として国の成立を導いたようだ。第四紀は更新世、完新世と推移してきたが、最近では、核爆弾の実験（1945 年）が行われた時から、第四紀の三番目の時代区分である人新世 Anthropocene が始まったという議論もなされている。この核爆弾はすぐに日本に落とされ、多大な犠牲を出し（2019 年 8 月現在、死者数 501,787 人）、第二次世界大戦は敗戦をもって終結した。この科学技術の犯罪は宗教ばかりでなく、科学の原則にも反する。聖ヨハネは黙示録で、悪人にはさらに悪を、善人にはさらに善を、聖人にはさらに聖を行わせよと記されていた。私は自律したアニミストであり、キリスト教徒ではないが、それでも聖ヨハネの言葉に従う他はないような日本国の世間の現実を目の当たりにしているのだ。

後述するように、私は自己家畜化という進化の現象を全否定するようなことはしないが、ヒトが集団性動物として、何らかの権力や権威の下に従順な家畜になることは望まない。

1）自己家畜化

植物の栽培化過程を研究してきた私は人間ホモ・サピエンスの自己家畜化に抗いたい。この言葉を、私がはじめて聞いたのは柴田敏隆（野外教育）からだったと思う。柴田は野性に強く思いれをしていたので、自己家畜化は野性の誇りを損なうことだと、すなわち好ましくないことだと考えているように聞き取れた。当時の日本で、柴田に影響を与えたその現象論の提起は小原秀雄（動物学、1984）だと思われる。

私は栽培植物と農耕の起源について研究を進めていたので、中尾佐助（1968）の農耕文化基本複合を環境学習の中核的プログラムにしようとしていた。ドメスティケーションは自然淘汰と人為淘汰によると考えていたので、自己家畜化論を積極的には認めたくなかった。なぜなら、少なくとも植物の栽培化過程は、人間の側からすれば、無認識、敵対、共存、共生の進化だと考え、植物の栽培化の達成は共生の段階であるとしたかったからだ。人間が主体となって、植物を栽培化、動物を家畜化して共生しているのであって（いわば契約関係）、一方で、柴田が言っていたように人間も上位の何者かに意図されて自己家畜化に至ったとは考えたくなかった。この概念を考察した小原は自己家畜化の兆しは、火の利用や道具の発明以来、意図せずにあり、さらにこの過程は自己内発的であると思索を深めている。柴田とは異なり、小原の考えは後述するランガム（2019）の、自己家畜化を否定的にはとらえていないと詳細な論考とむしろ合致しているように思える。

タッジ（1998）は、農業は人類の原罪であると述べている。彼の記述を以前に読んだ際には、ヨーロッパのキリスト教の考えの系譜で、人間（アダムとイブ、図 5）が楽園を追放されて苦痛のともなう農業を始めたように、単に反農業的な見解だと不覚にも浅はかに受け止めたようだ。しかし、最近、私は産業としての農業と生業としての農耕を明確に区別して、考えるようになったので、改めてタッジの見識を理解し直した。彼は次のように結論している。ホモ・サピエンスが 4 万年ほど前に、大きな歴史の分水嶺を超えたとして、この時に農業｛注：農耕としたい｝がすでに始まり、その後、1 万年前の新石器革命の時に、狩猟採集の片手間であった農業{農耕}が環境の変化と必要性に迫られてノルマとして

の農業に変化した（当時の人口は推定 800 万人）。家畜化は威厳が失われていく過程のように思われるが、家畜化された動物｛注：おそらく人間も含む｝は野生のままでいる近縁種よりも、個体数がはるかに多い。家畜化は支配ではなく、両者の契約 covenant とみなすことができる。農業は楽しいからではなく、良く機能したので、多くの食物を環境から入手させることに成功した。この結果、人口は増加した。｛注：以来、人口は急激に増え続けて、2020 年 4 月 17 日（9：51）現在、推計 76 億 1003 万 7992 人に至っている。｝

スコット（2019）はさらに考察を深めて、次のように記している。私たちの理解は過去数十年ほどで、驚くほど進歩し、メソポタミア沖積層など各地の最初の文明について、劇的に改訂あるいは完全に書き換えられている。定住は動植物の家畜化・作物化よりずっと早かった。これらは、農耕集落らしきものが登場する少なくとも 4000 年前頃には、存在していた。定住と最初の町の登場は湿地の豊穣の産物であった。国家が姿を現したのは、固定された畑での農耕が登場してからずいぶん後のことであった。農業は人間の健康、栄養、余暇における大きな前進ではなく、初期にはその反対であった。初期の国家は様々な形態での束縛によって人口を捕獲し、しばりつけておかなければならず、群衆による伝染病に悩まされていた。たいていの場合、国家の外での生活、野蛮人としての暮らしが、少なくとも文明内部の非エリートと比べれば、物質的に安楽で、自由で、健康的であった。Domestication という用語を最大限に拡張し、これを再生と繁殖の管理として理解したうえで、火、植物、動物だけでなく、広い意味での飼い馴らしとして、奴隷、国家の臣民、そして家父長的家族における女性にも適応する。穀物には稀有な特徴があって、ほぼあらゆる場所で、初期国家の建設に不可欠な主要課税作物になった。初期国家の人口統計学的な脆弱性における感染性群衆疾患の重要性はずいぶん過小評価されてきた。最初の国家が樹立されてから数千年にわたり、国家の中心部に含まれず、外界にとどまった人々についても、彼らは条件が良かったからそこに残った、またはそこに逃げ込んだのではないかと問う。

図 5.　アダムとイブの楽園追放（H. マチス）：2019 年南フランスのニース、マティス美術館所蔵。

私スコットは薄いアントロポセンは 40 万年前の、火の使用から始まったとする。約 12000 年前

に永続的な定住、農業｛農耕｝、牧畜が登場し、世界に 200 万～400 万人いた人類による景観変容はさらなる飛躍を遂げた。初期国家が生まれたのは早くても 6000 年前だから、農業｛農耕｝や定住が行われた時よりも数千年も新しい。国家はその利益のために景観修正のテクノロジーを動員してきた制度だ。そこで、人間が定住し、（農業として）穀物を栽培し、家畜を育てながら、現在国家とよんでいる新奇な制度によって支配される臣民となった経緯を探るために、深層史を探ることにした。今ほど狩猟採集民が、その食生活、健康、余暇の視点から、優秀だと見られたことはない。狩猟採集から農耕への移行は、緩慢で、途切れがちで、可逆的で、ときには不完全な移行であった。今から 400 年前まで、地球の 3 分の 1 は狩猟採集民、移動耕作民、遊牧民、独立の園耕民で占められていた。一方で、国家は本質的には農耕民で構成されるので、その範囲は世界にわずかしかない耕作好適地にほぼ限られていた。飢えや危険や抑圧によって強制されたのでなければ、自分からすすんで狩猟採集や遊牧の生活を捨てて農業に専念するものなどいるはずがない。ほぼすべての古典的国家が雑穀を含めた穀物を基礎としていた。野蛮人の領域が多様性と複雑性の領域だとすれば、国家の領域は農業経済的にいえば、相対的な単純性の領域になる。野蛮人は本質的に文化上のカテゴリーではなく、政治上のカテゴリーで、国家によって管理されていない人々のことである。

新石器時代になって、人間の周りに家畜が集まってきた。これらの祖先種は群れをなす動物であったので、それぞれの種に固有の群集疾患の病原菌をかかえていた。近距離で継続的に接触し合うことにより、広範な感染性生物が急速に共有されるようになった。種の壁を越えた病原菌がかつてないほど大規模かつ急速に増殖した。中国南東部は、人間や家畜が高密度で集中し、野生動物の市場もあり、動物感染症の培養皿である。奇しくも、今現在、世界中に拡大し、犠牲者を激増させている新コロナウィルス Covid-19 も、この地から感染が始まった。黄河沿いでも、初期国家の中心地はつねに激しく変化するデルタ地帯ではなく上流であった。栽培されていたのは雑穀だったが、メソポタミア国家のコムギやオオムギと同じく、中国でも耕作が国家建設の中核にとっての死活問題であった。

狩猟採集民は新しい環境へと集団で移動してしまうから、病気から逃れるには、分散が唯一の妙薬だった。穀物国家は、集中的な農業に好適な、生態学上のわずかなニッチにしかなかった。その水平線の向こうには、収奪不能な生業活動が多種多様に広がっていた。そのうち最も重要なものが、狩猟と採集、海洋での漁労と採集、園耕、移動耕作、および専業遊牧であった。焼畑農民は穀物を植えることも多かったが、典型的な焼畑では、成熟期が異なる何十何百もの栽培品種をもっていた。数年ごとに畑を移し、住居も移した。同様に、専従遊牧民は農業から派生したとみられているが、分散性と移動性がある。原始的に見える人々の多くが、実はより自律的な生活を求めて、意図的に定住農業と政治的服従に見切りをつけてきたとわかったのはごく最近のことである（スコット 2019）。

N.クリスタキス（2019）は、『ブループリント―「よい未来」を築くための進化論と人類史』の中で次のように述べている。

内集団バイアスの傾向。一対の傾向、自民族中心主義と外国人嫌悪は同じ過程の一端として共進化して、つねにいっしょに現れるのか、それとも別々の理由からそれぞれ独自に生まれたのだろうか。自分の属する内集団を好むのは文化的な普遍性の一つである。個人の自尊心はある部分、集団への所属意識から生じているため、自分の属する集団に満足できるということだ。内集団バイアスは自己利益も強化でき、実際的な利益を得ることにつながる。

生態学者の P.リチャードソンと人類学者 R.ボイドは文化の定義を、「個体が同じ種のほかのメン

バーから教示や模倣などの社会的伝達を通じて獲得し、それによってその個体の行動に影響が及ぶような情報」としている。文化は人類が種として持っている遺伝子に影響を及ぼせる（遺伝子と文化の共進化説）。文化的進化と遺伝的進化は、そもそも別々に扱われるべきではない。文化的な伝達ができるようになった時点で、人類は学ぶことと教えることのできる脳が好まれる状況に直面した。それは規範を尊重できる脳、見本を真似できる脳、情報を伝達できる脳ということでもある。文化は人間集団の創発的な特質であり、部分部分だけではなく全体に現れる新しい特質である。人間の文化は蓄積される。教えることと学ぶことができるように進化した人間は、隣りあわせの文化的進化と遺伝的進化からなる進化の撚り糸を生み出した。

世界を見渡すと、いつの世にも変わらない、絶えることのない恐怖と、無知と、憎悪と、暴力がそこにある。人間をばらばらにとらえるような厭世的な見方をしていては、その根底にある重要な一致に気づかずに、誰もが共有する人間性を見過ごしてしまう。人間の歴史を見返すと、なんと悲惨な窮状と機能不全に満ちたものであったかと嘆きたくなる。百年単位で切り取っても千年単位で切り取っても、見えてくるのは恐ろしさばかりだ。たしかに十八世紀には、啓蒙運動の到来とその哲学的な価値観の広まりや、数々の科学的な発見によって状況が劇的に上向きになった。寿命は延び、生活は豊かになり、自由度も増して、平和にもなった。人間は衝突し、憎みあうようにできている一方で、愛情や、友情や、協力を育むようにもできている。現代の社会は言うなれば、この進化的な青写真の表面を文明という緑青で覆っているようなものなのだ。人間の進化の歴史が描く弧は長い。されど、その弧は善いほうに向かって伸びているのだ。

ローレンツ（1949、1963）が詳細な動物の生態観察に基づいて、動物行動学の視点から、人間に至る進化的連続性を論考して、すでに 60 から 70 年になる。院生の頃に、日高敏隆の集中講義において、ローレンツのオオカミの観察事例から、同種同士で争っても負けた方が恭順の行動を見せれば命を奪われるようなことはない。また、同種内で殺し合うのはヒト *H. sapiens* のみだと聞いた。その時は人は凶暴だと思った。しかし、ランガム（2019）によれば、オオカミも他集団に属する同種個体は殺すし、ほかにも数種の動物が種内の集団間でも集団内部でも殺し合い、チンパンジーなどは子殺しまでしている。

わたしたちは、種の変遷の偉大な設計者が地上でこれまでに作りえた最高の作品であり、最新流行品であるが、けっして結論などではないのである。自然を研究する場合、絶対者を定立することは、たとえそれが認識論の分野のものであっても、すべて禁物なのだ。不変な存在などはなくいっさいは永遠に生成しつつ流れ去るというあのヘラクレイトスの偉大な認識、万物流転の聖霊に対する罪である。おそらく今日の人間は時間の中をつき進むその歩みの中でとくに目まぐるしく変転する段階にあるのだろうから、そんな人間を絶対者の地位にすえたり、もう絶対に凌駕されることのない創造の最高位にすわらせることに賛意を表したりすることは、自然を研究するものの目には、あらゆる根のない独断論の中でもっとも思い上がった、もっとも危険なドグマだと思われる。長年人々の探し求めていた、動物と真に人間との中間のもの、それこそがわたしたちなのだと。

おそらく文明は、できるなら文化を置去りにすることなしに、たえず加速されたテンポで成長していくだろう。どう好意的にみても、今日ではたとえばある人間が責任感が強いとか、生まれつきことに善良だ、といった特別な長所がとくに有効な機能を果たすなどということはありえないからである。それどころか今日の商業的社会秩序が、人間同士の競争のまことにぞっとする影響を受けて、ちょうど逆の横行へ向かって淘汰を行っていることを、深刻に恐れなければならない状態だ。

ファウストとは反対にわたしは、人間を善導したり悔い改めさせるようなことを、教えられるか

もしれないと思っている。そう考えるのは思い上がりだろうか。自分の生きている時代より数世紀も先を行く巨大な精神の持主のような特殊な場合しかない。そういう巨星は一般世間に理解されないで、死ぬほど苦しい目に会うか、よくても黙認されるのがおちだ。同時代の人々がその人の言葉に耳を傾け、それどころかその人の書いたものまで読んでくれるということなら、その人は自分が精神の巨人ではないと確信してもいい。

ランガム（2019）は最近の研究成果を踏まえて、ヒトの自己家畜化の進化について論評している。彼によれば、自己家畜化についてはすでに 2000 年前のアリストテレスによって述べられており、その後、1795 年に Y.F.ブルーメンバッハが明確に人の家畜化について記述している。次に要約引用する。

私たちは典型的な野生動物に比べて穏やかで、すぐに激怒することもない。通常攻撃の衝動を制御している。家畜と同様、人間は反応的攻撃に移る閾値が高く、その点で、野生動物よりはるかに家畜に似ている。ヒトが家畜化された種であるという考えは、少なくとも古代ギリシャ時代からある。

2000 年以上昔、その考えにはふたつのバージョンがあった。ひとつは家畜化は人間の普遍的な性質。もうひとつは人間は集団によって家畜化のレベルが異なる。アリストテレスのあとを継いでアテネで逍遥学派の学頭を務めたテオプラストスは家畜化は万人に共通すると考えた。アリストテレスは狩猟採集民は野性的で家畜化されておらず、ある集団はほかの集団より家畜化が進んでいるという見解であった。この尊大な見方は、ナチスによる蛮行の先触れとなり、ナチスは家畜化が進んでいないと見なす人々には暴力をふるってもかまわないと正当化した。

ヒトの家畜化の議論は人類学の父 Y.F.ブルーメンバッハが 1795 年にきわめてはっきりと、「ヒトはほかのどんな動物よりはるかに家畜化され、最初の祖先から進化している」と書いている。1806 年にはヒトの家畜化は生物学的なものだと説明し、1811 年には、「ヒトは自然の力でもっとも完全に家畜化された動物として生まれ、創造されたあらゆる種類の家畜のなかで完璧な存在だ」としている。C.ダーウィンは、特定の個体の繁殖に有利に働く淘汰によって進化が生じ、野生動物では自然に、家畜の場合には人間によって、淘汰が起きる。農場の動物から類推して、人の家畜化も何者かが淘汰をおこなった結果にちがいないと主張したが、それがどのように起きたかはわからなかった。そこで、絶大な権力をもつ君主 F.ウィルヘルムでさえできなかったので、ヒトの家畜化は不可能と考えて、人間は完全に家畜化された動物からはかけ離れていると結論づけた。

ボノボが家畜化に酷似した過程を経てチンパンジーのような祖先から分岐したと結論づけ、その過程を自己家畜化 self-domestication と呼んだ。人類の行動は家畜化された動物の行動と似ていることが多い。人間は所属する社会集団内で争いを避ける傾向がある。人間の家畜化された性質は、恐ろしい暴力とどう折り合いをつけているのだろうか。太古の時代にさかのぼる現代人の心の起源については、今後探求に何世代もかかるほどの謎が残っている。

人類は社会のせいで堕落した生まれつき平和な種であると同時に、社会のおかげで文明化した生まれつき乱暴な種だというパラドックスは、人間の本性がキメラだと認識すれば解消する。ヒト属は能動的攻撃性が高く保たれる一方で反応的攻撃性は抑えられた。ホモ・サピエンスがわずかに出現してきた 30～20 万年前には自己家畜化が始まり、反応的攻撃性は抑えられた。今日の小規模社会で見られるように、言語による共謀により、危険になり得る対立を避けて、横暴な上位者を殺すことができた。自己家畜化をもたらした死刑執行の能力は、道徳感覚も生んだ。かつては社会規範に背くこと、共同体の掟を破ること、卑劣だという評判が立つことは危険な冒険であった。それは

今日でもある程度変わらない。しきたりを守らない者は年長者の利益を脅かすから、よそ者、魔術師、魔女などと決めつけられ、仲間はずれにされるだけでなく、処刑される場合もあった。その結果、個人に集団との結びつきを実感させ、誇示させる情動反応が進化上選好された。万人にとって同調がきわめて重要であった。個人の道徳感覚が進化し、強固な同調行動が競争を減らし、他者の利益の尊重を促し、安全をもたらした。しかし他方で、道徳の強制者とその支持者の集団に恩恵をもたらした。その過程は、人間が所属集団の安泰に意外なほど高い関心を示すのかを説明している。

よそ者への連合による能動的攻撃は言語が発達するまでは限定されていたが、言葉で説明できる利害を共有して、同盟関係が築けるようになると、新たに権力を握った男たちの連合は社会を支配する年長者の集まりになった。つまり、人間の天使のような性質と悪魔のような性質の進化は、言語可能になった高度な意図の共有から生じた。言語は高い殺傷能力と低い感情的反応が同居するキメラ的な人格を作り出した。比類ないコミュニケーション能力のおかげで、我々の精神には比類なく矛盾した攻撃性がもたらされた。進化論のストーリーはこの上なく人の心を引きつける。無生物から生物へ、本能から意識へ、唯物論的な考えから精神性と笑いと喜びと人生の意味の理解へ。暗闇から、自分たちをあるがままに見る種へ、広大でほとんど不毛な宇宙のなかの知性の輝きへ。

将来は何が起きても不思議ではない。人間の潜在能力を思い起こさせる歴史のほうが、進化論よりもはるかに重要だ。変化の歴史のほうがはるかに鮮烈だからだ。未来は本来開かれているものの、進化はときに不穏な予測可能の方法で人間行動に影響を及ぼすバイアスを残している。そのバイアスは認識しておいたほうがよい。一般的教訓は、集団も個人もつねに権力争いに興味がある。だからといって、必ずしも戦争が始まるわけではない。家父長制、学校でのイジメ、セクシャルハラスメント、路上犯罪、富をめぐる社会上層部の権力闘争がつねに存在する必要もない。公正で暴力の介在しない社会の仕組みは十分可能だ。いまより公正で平和な社会の実現は容易ではなく、労力と計画と協力が必要となる。人類が探求すべき重要なことは。協調の促進ではない。その目標はむしろ単純で、家畜化と道徳的感覚によってしっかり基礎づけられている。それより困難な課題は、組織的な暴力が持つ力をいかに軽減させるかだ。

その後も議論がつづき、今、私が改めて自己家畜化論を再考しようとしているのは、人間が AI などと言う情報機械に隷従する方向にあるような議論がなされるようになったからである。ホモ・サピエンスが自己家畜化をさらに進めて、神人ホモ・デウスに隷従するか、ホモ・ネアンデルターレンシスのように絶滅するか、という警告をハラリ（2011、2015）がしているからである。さらに、スコット（2019）が類似の論調で、穀物の栽培化が国権力の成立を可能にして、穀物生産のために、人間を農業へと強制して、隷属させたとしている。昨今の生命科学や情報科学を応用した技術が AI から神人ホモ・デウス *H. deus* によって、動・植物と賢人ホモ・サピエンス *Homo sapiens* の共生進化の過程が隷属退化へと向かうのならば、私はこの流れには強く抗う。過剰な自己家畜化による退行進化を、生業に関わることによって共生進化に向かうよう転換するために、縄文人や山村農人の暮らしぶりから学びたい。

都市民の多くの人々が生業や農林漁業に関与せずに、大量消費・大量廃棄しかせずに、自然や生業を未知の領域に、暗渠のように隠すに至らせたとしても、現代でも、確かに生業や農林漁業を基盤とした文化複合の上に、文明は成り立っているのだ。ところが、人新世が提起されている事象の進展の先には、想像を絶する大きな文明の変曲点があるようだ。私はすでに余生で、遊行期にあるが、人間が一層自己家畜化に陥ることには抗いたい。自由で幸せな暮らしへの希望を求めて、生き物の文明の方向に舵を切ることができるように

努めたい。動物の家畜化が彼らの脳を縮小させたとするなら、人間の自己家畜化もその脳の縮小傾向を逃れられていないのだろう。自己家畜化はマスメディアに過剰に依拠して、諸知能が分断してバカの壁が厚くなり、一般的知能が、肥大する外付機能による言語（情報）に依存して過ぎて、分断かつ縮小した諸知能を統合できなくなった結果によって導かれるのだろう。

2）伝統的知識

過剰な自己家畜化によって、生き物としての多様性を失い、また生命活性を衰微させ、その結果、近未来には人工知能 AI？依存の *H. deus* に退行進化するのか、一層、支配欲が昂進して、魔人 *H. malicious*　（造語；悪意あるヒト）に堕するのか。それなら、私は遊人ホモ・ルーデンス *Homo ludens* になりたいと思う。

私は植物の栽培化過程を研究してきた。植物の場合、おおかた野生近縁種が存在しているので、自然雑種ができる。動物でも、たとえば、ニワトリは野性のヤケイと、ブタはイノシシと交雑できる。ところが、サピエンスは今では 1 属 1 種で、野生の人類は絶滅しているので、祖先野生種と交雑することはない。生き物として遺伝的に野性に戻ることはない。

さらに、植物は脳神経系を持たず、もちろん言語知能はないので、文化的進化は人間との関係においてのみ生じ、ほとんどの変異は自然環境における生物的進化に依拠している。ヒトの進化のように、ありがたいことに偏見や先入観をもって、サルなどの動物の進化と比較して、論じることができない。植物の栽培化はいつでも逸出可能な、共生関係を洗練させてきた。ところが、最近のバイオテクノロジーは栽培植物に、自然ではありえないことを技術的に強要し、隷従関係に至らしめようとしている。

上述してきた諸知能間の認知流動性を低下させて、たとえて言えば、折角取り外した小聖堂の壁（あるいはバカの壁）の一面をまた塗り固めてしまった。このために都市民は諸知能間の統合が困難で、複雑系の現象を直観できなくなった。シヴァ,V.（1993）も次のように記している。

精神のモノカルチャーは多様性を認識の世界から追放し、その結果として現実世界からも多様性を消滅させる。近代においては、いかにしばしば、自然、技術、地域社会、文明全体の根こそぎの破壊が、他に方法はないという口実で正当化されてきたことだろうか。代替案は存在するのだが、排除されているのである。思考様式、行為の脈絡としての多様性に移行することは、多数の選択肢の出現を可能にしてくれる。多様性の保全とは代替的な生産形態を保持していくことである。在来の種子を保護することには、バイオテクノロジーの原材料の確保以上の意味がある。現在絶滅に追い込まれつつある多様な種子は、その中に自然についての別の思考様式、われわれのニーズを満たす別の生産様式の種子を宿している。普遍的なものとみなされて支配的な西洋的知識との相互作用による世界的のローカルな知識体系の抹殺はあらゆるレベルで、多くの段階を経て実行される。まず、存在自体を否定することによって消滅させられる。ローカルな知識体系はシスマティックな知識としての地位を否定され、原始的、非科学的と形容されて消滅させられる。これに対して、西洋の体系は唯一科学的で、普遍的なものと想定される。近代科学のモデルは現実の科学的実践を積み上げた末に生まれたというよりは、むしろ特別な認識論的地位を科学に与えるような理想化された解釈を積み上げた末に生まれたものであった。非西洋文化の歴史的経験から、オルタナティブなものに対して目を向けないのは西洋の体系のほうである。もっとも開放的と考えられている西洋の知

識体系が、実際には精査と評価を拒んでいる。近代西洋科学は冷静に評価されるべきものではなく、単に受容されるべきものなのだ。

さて、私はミズン、スコットやシヴァの教唆に依拠して、ホモ・サピエンス・サピエンスの自由を護るために、心の構造の変容について、自ら体験した具体的事実を事例にして、ムラ社会、田舎民と都市民の行動の具体的事実に関して深く考え直してみる。私の根本的な問題点は、自然、山村、生業、伝統知、雑穀に強く執着していることだ。これらの事象は、ほとんどの日本人が打ち捨てた事象だ。世間的には、こんなどうでもよいことに拘泥することは理解できない、取るに足りないことなのだ。実際、当事者であるはずの、ほとんどの山民、研究者（植物学、日本民俗学など）ですらもう関心を持ってはいないので、消滅した事象になっている。この認識の差が、私の希望に対する誤解へと繋がっているのだろう。

ミズンの心の構造（知能）から見たら、現代の日本人、とりわけ都市民は自然から離れでしまっているので、博物的知能は著しく低下している。大方の日本人自体が観念的に自然を認識しており、実態的自然を感受してはいない。中島義道（2006）も記しているように、元々、IT が発達する以前から、観念的（バーチャル）な自然観をもっていたのだろう。大方が都市に暮らしており、第一次産業に従事していないし、もっと言えば、自然に関わる生業をしていないので、自然に寄り添って暮らす技術的知能をほとんど失っている。都市民は日々、自宅と勤め先を電車やバスで往復するので、地域社会での交流は少なく、社会的知能が劣化している。大いに発達しているのは言語知能だが、しかし、これは外付け装置 IT 機器による高度化である。デジタル・デバイドともいわれているように、高齢者の多くはもちろん、若者でも IT 機器を道具として使いこなせる人は多くはない。スマートフォンは児童でも上手に使え、2 次.3 次情報を得てはいるが、ほとんどの人は IT 機器の高い機能を使って、自ら創造、収集した 1 次情報を処理するために使ってはいない。ハラリ（2011、2015）が言うように、ホモ・サピエンス・サピエンスはいずれ人工知能 AI を使いこなせるホモ・デウスの僕になるのだろうか。

上述した具体的な事例で繰り返されてきたように、地域振興活動がうまく進むようになると、地域社会に根を張らさないようにすること以外に明確な理由もなく、ムラ社会の有力者が見えない力を働かせて、私たちは不情理に追放されてきた。村の収容数量が限定されているので、ヨソ者を追い出すようにムラ社会の機能が慣習として働くのだろうか。山村においても、他の生物種と同じように、人間の環境収容力 Carrying capacity が制限要因として働くことは大いにあり得る。人口（個体数 population）を平衡に保つにはその地の自然環境が有する生物多様性、水、土地、食料生産力などの制限要因の範囲内にせねばならない。しかし、現代の過疎化状況においてさえもムラ社会で追放、撥撫がどうして発生するのだろうか。

村内有力者が権力を保持するために、村民たちが歴史的に労働を強要されたり土地を奪われたりした沈潜した恨みを特殊的に村内の人に向け、他方で田舎、山民を文明に遅れていると蔑視してきた潜在する恨みを、一般的に都市民に向けて一挙に発散する。これではイジメの構造と同じだ。山村の維持には清泉の言うような現実的対応がよい。村には定住しない、どうしても田舎に移住したいのなら別荘地に住むか、あるいは借家をして、必要に応じて通う。

さらに踏み込んで、郷土を保全しようとするのなら、耕作放棄地や所有者不明土地を地

域社会の入会地コモンズ、社会的共通資本として、都市民にも開放することである。生業の自由を自然権として憲法に明文化することである。山村に環境保全、生業、伝統的知識保全、生物文化多様性保全などのための直接支払いをすることだ。詳細は木俣(2019)に論考してある。

2.3. 生き物の文明への移行

山里の朴訥な人々との共感、里山の美しい景観、そのままの美しい暮らしが好きである。しかし、希薄な関係範囲なら良いが、ムラ社会の現実に深く紛れ込むと手痛い仕打ちにあうことも多い。山村への片思いか、50 年付き合ってきても、それでも、誠実な生き方に対して、心も凍り憑く排除の不情理の繰り返しだ。老人の私には、もうほとんど生きる気力を失うほどの出来事がまた起こった。日本人の心にもいまだに巣喰う、今だけ、金だけ、自分だけの悪い心、旧習に現代風を加えての野蛮による不情理、これらの困難をまだ乗り越えられるのだろうか。これからもなけなしの猛勇を振り絞って、なんとか冒険の目的地に至れるのだろうか。残念ながら、こうした不情理が都市の街にはないとは決して言えないが、とりわけ田舎に著しく残っている。あるいは、街と比べて村は小規模な地域社会で多くもないムラ社会の存在が透けて見えやすいのであろう。

こうした無自覚で陰湿な排他性に耐えられるのだろうか。山村への片想いは学問的信念、自然への信仰によって乗り越えて、まるで自虐のような行為に陥らずに、超克して再び心充たされるのだろうか。

田舎と都市との間の障壁を取り除き、人々の幸せな暮らしを回復していくために、生き物の文明への移行 transition を進めたい。この実行にはまさに伝統的な知識や技術を 体験的に学ばねばならないにも関わらず、これらを伝える人々はすでに高齢を迎え、あまりの少数になっている。今のタイミングをおいて、生活文化の再創造と継承の機会はないと思い決める。エコミュージアム日本村／日本村塾ではひたすら先人から体験的に学び、ともに思索していきたい。誰がどう言おうと、黙殺しようと、「自分のことは自分で」決めて、行動するのである。

しかし、このくににおいてもまだ希望を探すことを諦めることなく、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に登録し、雑穀など栽培植物の在来品種を継承すると言う冒険探検旅行の途上である。過去から現在までの直接体験を深く検証して書き記すことだけはしておきたい。世界の潮流は大きく変化していると思う。昨年から国連家族農業の 10 年が始まった。国連で小農宣言（2018）も採択され、インド政府提案で国際雑穀年（2023）も進められるようだ。遠くアフリカからインドや中国を経て、極東の日本にまで至った、命の糧である雑穀を絶滅させずに、継承するという、私の最後の冒険探検は残り少ない人生の時間をかけた総集的な行動を求められているようだ。縄文時代の遺跡から発見されれば文化財だということではない。山村農人が継承して、今に至るまで毎年栽培が続けられ、生き物として保存されてきた雑穀などの在来品種が、高齢篤農と共に、それでもいよいよ絶滅に瀕しているのだ。私は原日本人、縄文人の末裔として、ホモ・サピエンス・サピエンスを隷従に導くような、過剰な自己家畜化の退行進化には抗おう。自然権は憲法で明文として保障することだ。山村への補償、地域環境税や国税から、EU の政策に学び、環境保全への貢献として居住者に直接支払いをする。所有者不明土地や耕作放棄地は地域社会の社会的共通資本、広義の入会地コモンズとして、生態的規制はかけながら、都市民に対しても自然の中で活動する生業の自由を確保するために開放する。これは真の文明（生き物の文明）に至るた

めの喫緊の課題である。

第 3 章　素原の超個人主義　　Fundamental Transpersonal Individualism

ステンドグラスを透過した聖堂の光彩は影と共にある。
心の光は輝き、美しく清んでる。
心の影は奥ゆかしく揺蕩うている。
地下に埋められてきた心の闇には悍ましさ、
もう朽ち果てて消えてしまえ。

全て生き物の文明が新しい地平線のそこまで来ているのだ。
陽光はすでに昇っている。
野の草木の花々も綺麗だ。
生きる幸せの他に余計なものは何もいらない。
安んじて、穏やかに歩んで行こう。
（心の聖堂、2020.5.6）

私はトランスパーソナル個人主義という想念に至り（黍稷農季人 2016）、これを個人主義の拡張・展開、超越による想い遣り、分かち合いと考えた。このために、多くを学ぶことが教養の質で、学び考えることから逃げずに、家族や友人を大切にし、人脈を広く求めることが必要であるとした。意図せずして超克という題名で随筆を書いていたが、倉田百三（1924、33 歳）に『超克』という題名の著作があった。この大正期の倉田はいまだ若く求道精神にあふれ、おおよそ 100 年前に書かれたにもかかわらず、私と同じような課題に対して同じような方向性を示しているように見える。しかしながら、同書との混同誤解を防ぐためにも、超克の語義を広く解釈して、自らをさらに磨く意味で第 3 章の論考を素原の超個人主義と題することにしよう。克己復礼為仁（論語）｛注：私欲にうち勝ち、礼儀をふみ行うようにすること（広辞苑）｝という用語法もあるから、トランスパーソナルを拡大した自己を求めることとするのなら、新造語として超己と改めてみてはいかがだろうか。しかし、己と個人という同義語を重ねるので、超個人主義として、素（もととなるもの）と原（おこり）で形容することにした。

フォックス,W.（1990）は、トランスパーソナルとは、個体性を超え、個人としての発達を超えて、個人よりもっと包括的な何かを目指す beyond ego、自我的、自伝的、ないし個的な自己を超えた自己感覚、できる限り拡張された自己感覚を現世で獲得すること、としている。それならば、超個人主義と記しても意義は通ずるだろう。倉田（1924）は『環境学習原論』(木俣 2019) にも引用したが、もう一度詳細に読み直して、次に要約引用する。

私は全生活の基礎を定める一つの根本仮定、「善と福の一致という観念」を置く。そうあるべきはずのもの、そうありたきものとしては、私の倫理的思想の内に深く横たわっていた。また正統派の宗教家及び常識的な市井の善人にはこれを信じている者が少なくない。しかし私はこれまで未だかつて一度もそれを事実であるとして信じ、したがってその上に精神生活を据えようとしたことはなかった。この地上の生活の相を見るときに必ずしも善人が悪人よりも幸福でなく、吟味するとき我々は地上の生活において、善と福との厳密なる一致の事実を認めることは不可能である。

しからば、われわれの精神生活をこの事実に順応せしめる道は如何であるか。それは三つあるのみである。第一は善と福とは一致しないことを信じて、それにもかかわらず、善を追求する道であ

る。第二は善が福に一致するかぎりにおいてのみ、善を追求する道である。第三はこの事実あるにもかかわらず、なお善と福との一致を可能ならしむごとく世界観を拡張することである。私は人間の本性に最も適合する、最も合理的なるものとして、第三の道を選ばざるを得ないのである。

精神生活とは現実を理想に一致せしめんとして、現実を超克していく生命の過程である。超克は否定ではなく、包摂し、止揚することである。人間、超人を超克して聖人になり、その後再び民衆に没落して、民衆の仲間になる。同情との闘い、羨望と、嫉妬と、肉欲と、愚痴と、すべて卑しく、狭く、誇りなきことを超克せんと努力しなければならない。我々の孤独は我々がこれを欲せずして、しかも避けることのできない悲哀である。

さらに、関東大震災を経験した後、おそるべき出来事がある人生をいかに調和あるものと感じて、生きる悦びを感じることができるか、これが最も大きな問題である。個人意識に終始する限り、恐るべき事件をもつ世界を肯定して生きることはできない。個人意識以上の人類意識、宇宙意識（信仰）をさながら個人意識として把握するべきである。近代人は個人意識を重んじ、人類的宇宙的本能を発達させてこなかった。近代人は自然科学の限界や本質を粗雑に理解しているにすぎず、教養が足りない。この信仰に立って、しかる後に環境を改造し、不合理な経済組織を改革する文化史的必然がある。しかし、環境や経済を改造すれば解決が得られるのではなく、生きがいの問題は残されたままである。

このように倉田の論旨は百年前にして、すでにトランスパーソナルで、超個人主義の嚆矢にも思える。私は常々、栽培植物ほかの起原を考えているので、素や原を主題として求め続けている。そこで、論題にあえて新造語として素原を形容語に用いた。

私はこの論考（第三）を三部作のまとめとする。第一論考は山村農人との篤い親交の書簡からそのままの美しい暮らしの在り方を証した（木俣 2021）。第二論考は経験してきたムラ撥撫の事実を記録し、なぜこのような醜い人為的事象が起こるのかを検証した（文福洞 2021）。真逆の課題である第一論考の自然の美と第二論考の人間の醜を同一文書内で論じたくはなかったので、第三論考では直接体験をあまり語らずに論理をまとめ、一般理論として、あえて先行して別の場所に掲載、公表することにした。何故ならば、第一論考と第二論考にあっては、自ら体験した事実であっても、あるいはなおさら、文章表現において情緒を完全には拭い去ることができないと、読者から公正性に疑念をもたれることを恐れたからである（2020.9.20.）。

3.1.　超克へ祈りと願い　（2020.5.6～5.22）

明日が突如として一本鎖 RNA/COVID-19 に奪われる恐怖が、これほどまでに身近に迫ってくるとは、意識的にはあまりに唐突だ。恐れ多くも神仏ですら、人間として死を生きられたのだから、年老いればいずれ近い年月に自らの死もあることは、覚悟はできないまでも理解はしている。今なすべきことを、明日に延ばすことはできないようだ。しかし、すでに大方書き終えた長文の第二論考は感情を冷まして熟考するために一年間保留するつもりだ。

民族植物学ノオトを発刊した動機は、インドの友人ジャガディシュ博士の論文がシコクビエの葉枯病に関する農薬の効果についてであったので、農薬は環境教育に反する内容だから東京学芸大学環境教育実践施設の研究報告には掲載しないと却下されたからである。私は論文の内容は著者の責任において自由であり、評価は読者がするものだと考えており、過剰な内容審査や検閲行為は学問の自由に反すると考えるから、とても嫌だ。この理由に

よって、自ら雑誌を創刊することにした (2005)。この民族植物学ノオト創刊号の巻頭言に、「もう一つの阿修羅として」と題して次の文を記した。すでに 15 年を経ているが、まさに絵にでも描いたように、私はこの通りの人生を歩み、古希を過ぎても、昨年末からの心的外傷後ストレス障害を忍んでいる。何とか此岸には恨みを残さずに、気持ちよく彼岸への旅立ちを迎えたいと強固に願う。

門男は山梨県北都留郡ほかで、小正月の時に門戸のところに玄関先に向けて 2 体飾る（表紙）。門男の作り方は、まずヌルデを里山から伐ってきて、1 メートル余の大きさの丸太にする。この丸太の端を削った半円形の白肌に墨で目鼻を描き、頭に竹の髷をつけ、次に藤蔓で腰紐をしつらえアーボ（粟穂）、ヘーボ（稗穂）、鍬、鎌をこれに挿す。思うに、門男は山の神の使いで、農耕の智恵と畑作雑穀の収穫を秋に向けて予祝するために各戸を訪れる者であったのであろう。しかし、今からは阿修羅として農山村の各戸に門男が復活し、共同社会と畑作雑穀が維持されるように、ともに活動することを願う。

このところ研究人生に秋霜烈日を思うようになったのか、身体的な衰えよりも未だ混沌として整理できない心の葛藤に感じやすい。自然崇拝、アニミズムなど信仰のあり方にも関心が向き、阿修羅の存在にとても興味をもつようになった。ひろさちや（2005）は『わたしの中の阿修羅』で傲慢不遜の心をもって天を仰ぎ見る阿修羅に、「阿修羅よ、汝、諦めるべし」と確かに結論を下した。これにもかかわらず、興福寺の三面の阿修羅像に再び思いを致して、複雑な阿修羅のあり方を一つの結論にまとめきれず、もう一つの闘う阿修羅によって巻末を閉じざるを得なかった。まだ学生の頃であったか、読みふけったジョージ秋山（1970）の『アシュラ』はむしろ醜い子ども姿であったが、萩尾望都（1995）が『百億の昼と千億の夜』の中に描く阿修羅は美しい少女の姿である。新美南吉（1932）の『ごん狐』も阿修羅なのだ。宮沢賢治（1923）は心象スケッチ『春と修羅』中の 1 編「春と修羅」で、「はぎしり燃えてゆききする　おれはひとりの修羅なのだ」と詠っている。

こうしてみると、今、山の神の使いの門男になりたい私も一人の阿修羅なのだ。農山村の複雑多様な伝統智体系を学び、統合学の提案を求めて民族植物学に挑むことが、象徴的に言えば天道でも人道でもない、己や世間の醜を知り、美を求める阿修羅の道なのであろう。阿修羅の勝つことのない戦こそが誇り高く、忘れてはならないそれぞれの民族の、また私たちの歴史である。忘れてはならない多民族の自然文化誌に関する調査研究と生物文化多様性の現地保全を求め、民族植物学の発展を目指し、民族植物学研究室の成果をささやかな雑誌にまとめ、毎年 1 回発行することにしたい。

心的外傷後ストレス障害 PTSD を引きずり、悔しく苦痛であるが、感情に流されて行為しないように、しばらく時間を置く。明日への不安がありながらも、感情を自律制御できるように、矢張り待つべきだろう。復讐心ではなく、犯罪者個人への反撃でもなく、ムラ社会とそれによって行われたムラ撥撫の罪を許さず、形成と発生のメカニズムを白日にさらして、その事象を告発する。属性は削除、個人情報保護、偏見・先入観を防ぐつもりだ。個人の属性を記せば、心理的構造はより明瞭になるが、個人情報ではある。たんに記号 ABC で論ずるべきなのだろうか。被害者にすれば、犯罪者に対して容赦はいらないはずだ。罪を憎んで人を憎まずは、被害者の苦しみを黙殺する偽善だ。つまらない日本のサスペンスの定石だ。しかし、私は、復讐の行為はしないが、この感情を全否定することはできない。

心優しい日本人は、あなたの幸せや健康などを祈りあるいは願います、と言ってくださる。私もほとんど意識せずに、この 2 語を使っていたようだ。しかし、数年前から、何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、日本人にとって、私にとっても、それが自明

なことなのか、疑問に思うようになった。人生で、力及ばずに苦しいことが起これば、日本人は何方に、あるいは神仏に、祈るのか、願うのか、改めてそうなのだろうか。

真に僭越ながら、神ならぬ身が、我が身に及ぼされた罪悪を甘んじて受忍することとは感情的にはもちろんできないが、論理的にもできない。悪意をもって危害を加えられたら、反撃するのは当然だ。神仏でない人間が、悪意をもって攻撃する相手を許すことなど、それこそあまりに僭越だ。でも、やり返す過程で憎悪に溺れれば、似て非なるとはいえ罪を犯して、意識せずして当事者以外の人々をも巻き込むだろう。復讐をしないのは自律して我慢するからだ。

しかし、心情的に他者の罪を恨み問うても、自らを浅ましいと思ってしまう心情は、一体どこから来るのだろうか。被害者が自らを責める心的外傷はどのような心の作用なのだろうか。加害者に反撃しても、心的外傷は直らないという心情、復讐を押しとどめて自傷するのはなぜなのだろうか。神仏に心の傷の治癒を祈り、願いすれば、癒えるのだろうか。宗教に敬意をはらってはいるが、私の信仰は自然にあり、アニミストだから、その祈りや願いの先は自然のカミガミであり、言い換えれば自然治癒、自分で治れ、すなわち超克するということだろうか。我慢する、自律できる強い精神力を鍛えることだろうか。自問するばかりだ（2020.5.7～5.8）。最近の日本人の多くは神仏、カミガミを畏れていないようだ。増上慢は極まって、神童、神業、神対応、神泡（ビール）、神回（野球）、神曲（流行歌）など、よくもまあ、神の名を騙るとはなんて不遜なのだろうか。

ムラ社会の事はすでにかなり論考してきた（木俣 2011、2015）。しかし、さらに心が凍り憑く事象が自らに起こったのだ。このことについて自傷しながらも、超克するために、さらに具体的事実に基づき、テキスト分析を用いて客観的公正に論考した（第二論考）。一方で、降矢静夫老師の自然賛美、山村自給知足の暮らしを対照して、心を洗うように比較研究することも同時に進めている（第一論考）。

私は田中正造翁が求めた真の文明は生き物の文明と同じ概念だと思い、さらに生き物の文明への希望を探すために論考を深めたい。1）日本の自然の景観・生態系と山村農人の心性の美しさを降矢静夫師の書簡のテキスト分析で明らかにしたいと思う。また、対談録音でも補足する。他方で、2）日本のムラ社会の形成過程について、自らの人生で体験してきた事実および多くの人々が田舎・都会暮らしで体験した証言（書籍、論文、書評、コメント、e-メールなど）を根拠資料としてテキスト分析などによって詳細に検証した。ムラ社会による集団的排除行為、ムラ撥撫は心に巣くう醜い犯罪だ。被害者が心的外傷後ストレス障害を治癒するには自律的に超克するしかない。山村農人に学び、美しい山村に希望を見出すために、これまで十分解くことができなかったこの課題に最期に当たって、明確な結論を示すように、挑むことにした。この課題とはムラ社会の形成とムラ撥撫の発生のことである。

すべては心の仕業、私という人間の歴史時空は常時戦場、阿修羅界にあるようだ。心の構造体としての阿修羅は現代のアニミストだ。菩薩の心にはほど遠いので（R.エイトキン禅師）、やはり人間界に属するのではない。そこでジョージ秋山の『アシュラ』(1970～1971、少年マガジン）をもう一度読み直すために、手元になかったので注文した。アシュラの歴史背景は室町時代の終わり、乱世の頃、飢饉の最中で庶民は飢餓線上を彷徨っていた。この作品の最後の場面は、気が触れて病に侵され余命いくばくもない鬼母と彼女が捨てた子アシュラがともに生まれてこなかったほうが良かったと共感、哀しくも心で許し合ったのかのようだ。

もう一つ彼の作品『The Moon』(1972～1973、少年サンデー）を思い出して、確かに最終場面を切り抜いて保存しておいたはずなので、書庫を探したが発見できずに、これも古書を注文した。その最終場面とは、純粋な心の少年サンスウがカビ発生装置を破壊しようとしてカビに蝕まれてもがき苦しみながら、ムーンの名を叫び、一方、ムーンは何もできずに涙を流すのであった。この先に恐らく未来はなく、人類は滅亡に向かい、まさに絶望に終わっていた。{注：ムーンは新たな神として造られた巨大なロボットで、純粋な心を持った少年たちにしか操作ができない。} 私が大学院生で実験の合間に、水俣病患者の皆さんとともに抗議活動をしていた頃に、少年サンデーに掲載されていたのだ。それでも、私はさらに 50 年近くを生きてきた。私はこのサンスウの心を受けて、公害の象徴としてのカビ発生装置を止めようとしてきたのだろう。そのような自分の人生に不満はないが、いくつかの悔しさはある。

さらに、孫子が読んでいた『鬼滅の刃』(吾峠呼世晴 2016～2020、少年ジャンプ）のアニメーションのストーリーからからインスピレーション inspiration を受け止めた（2020.5.14)。鬼は人間の心の闇の中に隠れ住んでいる。それでも恐ろしいのは鬼よりも人間そのものだ。何故なら、鬼の姿は見るからに恐ろしいが、人間の姿は神に似せてあり、一見では優しいか恐ろしいかはわからない。半世紀ほど前に描かれた『アシュラ』は恐ろしい描写で PTA からの意見で有害図書指定された。ところが、もっと恐ろしい描写が出てくる『鬼滅の刃』は有害図書指定などはされずに、子供から大人まで、爆発的に視聴・読者を得ている。個別作品の違いやアニメ同伴など表現や発信方法にも大きな違いはもちろんある。一方、別の視点で、大正期という時代背景も関わっているとするのなら、それはどのようなことなのだろうか。恐ろしい世界大戦の狭間の大正ロマン・デモクラシーの陰に隠され、蠢いていた鬼たちに重ねてみているのだろうか。鬼の力に勝てはしない絶望があっても、信頼できる友愛に依拠して抗うことに共感しているのだろうか。主人公の竈門炭治郎も阿修羅なのだろう。これらの鬼よりもっと怖い鬼は人間の心の闇に潜み棲みついているのだ。本日出た完結編では、鬼を滅した人間は現代に輪廻転生して楽しく暮らしており、ハッピーエンドになっているようだ。ちなみに、任意団体 NPO の鬼殺隊士は、廃刀令（1876）後の大正時代に剣の道に励み、鬼退治を行っているのである。

現代は後世になれば歴史区分として東京時代と呼ばれるのだろう。ジョージ秋山が『アシュラ』や『The Moon』を描いた時空と、吾峠呼世晴が『鬼滅の刃』を描いた時空にはおおよそ 50 年の経過がある。前者は大学が国権力との紛争で敗退して知的権威を失い、同時に公害も激甚化する状況にあった。一方で、後者の現在はどのようにとらえたらよいのだろうか。沈黙したままの大学は抑圧され学問の不自由、原子力発電所の放射性物質公害、権力犯罪の腐敗構造にさえ異議を言わなくなった。市民社会、大方の世間も代替の権力構成を求めながら、それを見つけ出せずに不憫をかこっている。後者の吾峠は絶望の彼方に、希望を見つけたのだろうか（木俣 2020)。

その上、追い打ちをかけて COVID-19 が世界中に拡散、人的被害も激増して、先行きは見えずに、これから何処に向かうのだろうか。この現代にも心の闇の中に潜む鬼は滅しきれずに、COVID-19 の恐怖・脅えを利用して、人心を惑わし、暴れまわっている。打ち勝つには自律心を鍛えて、超克するしかないのだろう。現代・現世は生きている限り、光と影が彩なす律動にあり、自律を高めるように祈願したい。未来・夢世の便利は虚偽だが、希望を探し求め続けたい。過去・闇世の澱みは陰湿で今でも絶望に沈んでいる。何が正義で、何が邪悪かを問うても、人々の間には強固なバカの壁があり（養老 2003)、空虚にも、越

えることはほとんどできない。それでも阿修羅は永遠に抗い、挑み続ける。（2020.5.22）

図 6.　阿修羅に関する作品の表紙

3.2.　嫉妬と保身の自律制御　　2020.5.27～6.16

悠悠たる上古、厥の初めの生民、傲然として自足、朴を抱き真を含む。
智巧既に萌し、資待因る靡し。
誰か其れ之れを贍らせし、実に哲人に頼るなり。
陶淵明（403）

誰にも嫉妬、羨望や保身の感情はある（表１）。嫉妬とは、自分よりすぐれたものをねたみそねむこととあるが、本来、この 2 文字には異なった意味合いがあり、嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけ、妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつけることであるようだ。保身とは身の安全や地位・名誉などを保つことである（広辞苑）。

嫉妬 jealousy は第三者関係において、自身の愛する人が別の人に心を寄せることを怖れ、その人をねたみ憎む感情である。羨望 envy とも同じような意味合があるが、心理学的には異なる感情である。羨望は自分以外の誰かが望ましいよいものをわがものとしていて、それを楽しんでいることに対する怒りの感情であり、二者関係に基づいている。羨望は最も原始的な悪性の攻撃欲動であり、よい対象を破壊してしまう。嫉妬は愛する対象への愛情は存在していて、よい対象を破壊することはない。羨望を乗り越えたところに発達する情緒として感謝がある。羨望には悪性と良性があると近年は考えられており、良性の羨望は民主主義へと向かわせる原動力だと B.Russell(1930)はいっている(Wikipedia2020.5.27)。

アリストテレス（前 384 - 322）は『弁論術』の記述で、羨望 phthonos とは他人の幸運によって引き起こされる痛みであるとし、さらに、キリスト教では七つの大罪の一つとされ、ヒンドゥ教では破壊的な感情とみなされ、歪んだ感情は克服すべきだとしている。イスラム教において羨望 Hasaad は心の不純物であり、善行を無に帰するものとしており、仏教では嫉 īrṣyā とは富や名声を得るためにひどく熱心で、他人がそれを得ることが我慢できない状態で、この解毒剤は相手の幸福をともに喜ぶ心（喜無量心）であるとしている（Wikipedia　2020.5.27)。

表 1.　心理学用語

語彙			語義	特性
嫉妬	jealousy	嫉む	嫉みは相手を羨ましく思い他の対象に気持ちをぶつけること	第三者関係
		妬む	妬みは羨ましく思う気持ちで相手に直接的・間接的に気持ちをぶつける。	
羨望	envy	悪性、悪意	他者が持つ優れた事物への渇望、その対象がそれらを失うことへの願望。	二者関係
		良性、昇華	社会的に認められない欲求が社会的に価値のある芸術・宗教活動に置換されること（広辞苑）	好敵手として目標に鍛錬する。 代償行動（置き換え）
保身	self-protection	自己	身の安全や地位・名誉などを保つこと（広辞苑）	自己・個人の存在を保つ。
		組織ムラ・シマ		組織の利害・損得を守る。

1）心理セラピストの見解

心理セラピスト二人の著述を要約引用し、考察を補足したい。まず、スタマテアス(2008)の『心に毒を持つ人たち』には、こうした人たちの分析と対処法のとても有効な助言が示されている。

なんでもけなそうとする有毒人間の言葉や提案にけっして耳を傾けてはいけない。あなたが夢を実現することを快く思わない人間は放っておき、目標に向かって進みつづけよう。有毒が用語として人間関係に関してもちいられるようになったのは 1980 年代からだ。罪悪感は人間が抱く感情のうちでもっともネガティブなものであり、他人を操る手段としてごく頻繁に利用される。ねたみによって人は常に不満を抱き、しじゅう愚痴をこぼし、他人が所有しているものを自分はけっして手に入れられないと感じ、信じ込むと、ねたみが生まれる。ねたみは他人の破滅を願う感情であり、獲得したものを奪い取ろうとする人はねたみを抱く。他人の成功が原因となって引き起こされる根深い反感、復讐願望の現れである。何を言おうと、真意はあなたを葬り去ることで、心の奥ではあなたに目的を達成させまいと考えている。ねたみはすべての人が抱きうる感情であり、そのことで自分自身の人生や目標を見失うようになる。健全な自己評価は他人からの承認や名声を求めることや、自己利益の追求に邁進することではなく、自分自身による承認と満足を第一に考えることだ。

中傷する人の特徴は絶賛したかと思うと、翌日にはおとしめ相反するメッセージを発して、あなたの感情、心、理性を操り、支配しようとたくらみ、まったく有毒人間の代表格だ。中傷する人の気質は支配欲が強く、かつ思考が緻密であるという特徴があり、やり口がとても巧妙である。この種の人のもう一つの顕著な気質は、自分は完璧だと考え、誤りは認めず、過失にも責任を取らない。

犠牲者が譲歩すればするだけ、中傷人間はつけいる。中傷を行う人はゆっくり時間をかけてあなたとの関係を深め、全幅の信頼をおくようになり、言い換えれば、隷属関係に変わってしまう。中傷を行う人は、かつては中傷の犠牲者であった。面と向かって対決すると、彼らはうまく立ち回って無傷で事態を切り抜け、すべての罪と責任はあなたに負わせる。すべての有毒人間と手を切り、自分の道を歩むことだ。

攻撃的な人は彼らの目的に役立つあいだは友好的だが、あなたがノーと言うやいなや、何もかも妨害するので、衝突を避けることだ。計略に気づいたら距離をおくことで、その場の状況で自制心を失わないようにする。倫理観が壊れている人は犯罪者だけでなく、あらゆるところにいる。うそをついて人をだます名人で、あなたを裏切り、人生を破滅させようとねらっている。平凡な、ことなかれ主義の無気力状態は周囲への感染性を持っており、これも有毒人間だ。有毒人間は退け、変革や挑戦に対して積極的で、絶えず進歩していくことを目指す人とだけつきあうことにする。

噂とは公式な検証がなされないままに広がっていく情報、事実による裏付けがない説明だ。神経質な人はエゴイズム、ねたみ、噂話、他人との競争、賞賛願望のような態度や行動をとることにより、自分が他人より劣っているのを隠蔽しようとする。神経質な態度の背後にある目的は、他人の世話をすることでなく、他人に対する支配力と影響力を手に入れることで、他人の人生の決定権を握ることだ。理想とする職業や愛情を現実に手に入れることができなかった人の多くは、神経質な行動をとることによって、自分の能力に対する自信や、失ってしまった支配力や影響力を取り戻そうと試みる。劣等感は人間が権力を追い求めるときの主要な動機の一つで、心理学的には劣等感以上に屈辱的な感情は存在しない。

操縦する人の目的はひとえに他人を破滅に導くことにある。彼らが攻撃対象にしたがるのは愛されていて、有能で、社会的名声を持った人で、自分にはない長所が備わっていることに激しい怒りを感じ、ねたみから攻撃する。こういう人からは急いで逃げ、離れることだ。自分は人から操縦攻撃を受けたのだという事実を正面から見据え、これ以上我慢しないと決意した時から、新しい自分へと変わる。操縦の犠牲になったからといって、相手に対する憎しみや恨みの感情を抱きながら生きていく必要はない。いつまでも引きずって人生を台無しにしてはいけない。他人に親切にしようとするあまり、自分を犠牲にしてはいけない。自分自身の考えに基づいて決定し、罪悪感や恥辱感を忘れ、有毒人間の毒から真に自由になることだ。

信念にしたがって行動する。信念は決心であり、確信だ。信念は思考から生まれ、言葉となって表明される。感情を抑え込むことは、自分自身を殺すようなことだ。感情とは今現在感じている思いで、心理状態とはかなり前から引き続いて感じている気持だ。心理状態はしばしば最終的に恨みというかたちをとる。恨みは時間をかけて育ち、言葉に出して吐き出すという必要な処置をとらない場合、最後には本人の身体に害をもたらす。有毒人間の特徴は回復困難な傷を相手に負わせ、見返りを求めない好意的行いなどはあり得ず、後悔も謝罪もせず、弁解の言葉は存在しない。有毒人間に態度を改めさせようとはけっしてしない。有毒人間に腹を立てたり、不快感を抱いたりせず、怒りに我を忘れないことだ。

ここに具体的症例をもって活写されている毒人間はバカの壁以上に絶望をもたらす。性善説は偽善になり、絶望する被害者は吾身さえも護れずに、人間不信に陥り、憂鬱から、果ては自殺にさえ至る病である。本来、毒をもつ人間こそが病人であるに、当事者は自覚できないので、毒に侵された被害者が病人になってしまう。運よく、この状況に気づいたのなら、スタマテアスが言うとおり、反論などせずに、沈黙して逃げることだ。反抗すれば、毒に満ちた嗜虐の土俵にのせられ、もちろん勝ち目などなく、被害者の病状は悪化す

るばかりだ。多くの症例を見てきた彼の意見に従い、性善説の甘い罠にかからず、毒人間とは極力関係を断つことだ。

しかしながら、私は研究者の本性から、一般論として毒人間の行為の事実を白日に晒して、社会の改善を求めるべく、被害者として矛盾する行為をしている。さらに、大きく抜け落ちている視点に気づいた。ここでは主に加害者の病理と被害者の応対について考えてきたが、ムラ社会を形成し、撥撫を生起させる他の役者についての論考が少ないことだ。加害者個人から発して被害者個人を害するとしても、加害同調者（共同正犯、直接共犯）、傍観者（間接共犯）、公正者、および無関心者などの役割がある。地域社会に居住しており、何らかの地域共同利害があり、社会的地位の有る知的な人々さえも、被害者個人を撥撫（イジメ）し、さらに共同絶交宣言（犯罪の罰金判例もある）をしてまで、積極的同調あるいは消極的傍観するのである。同調や傍観をしないで、せめて公正な立場をとってほしい。私は沈黙を選び、ここに消極的な同調者や傍観者になった友人たちが代替標的にならないようにし、また、他の友人たちには緘黙した。それでも、たとえ長年の友人であっても、私の信条や信仰と強く対立するか、あるいは公正性を保たず不当に関与するのなら、たとえ友人であることを失うとも、自らが納得できるように身に受けてきた撥撫の事例を検証し、優先して課題解決を探りたい。ほとんどの人々は日々の暮らしに手一杯で、なかなか、世の中を想い遣るほどの余裕はない。それでも、たとえ、ささやかな想い遣り、貧者の一燈、寸志、五分の魂を人間の誇りとして、共感する心を見せてほしい。

研究する自己個人の課題として、何らかの解決法を提示したい。自ら甚だしく傷つきながら、超克し、さらに超個人を希求するのには明確な理由がある。人生の仕事として雑穀栽培を継承するという一心不乱の強い目的意志である。この研究目的のために主要な人間関係を形成してきたので、雑穀に関する裏切行為は最も心が痛む。しかし、この目的はいくら努力しても自分では達成することがない目標である。この仕事に継子がいなければ、日本の雑穀栽培はいずれ消滅する。それでも人生の結願に此岸の恨みを残さないと意思した。

さらに、スタウト（2005）『良心をもたない人たち』には、これらの人たちの見分け方と対処法が要約すると次のように説かれている。本書の登場人物は特定の個人ではなく、心理セラピーにおける最重要な守秘義務により、人物名は仮名、場合によっては特徴変容もし、本人とわからないようにしてある。プライバシー保護のために登場人物は合成もしていると最初に記している。

あなたは人からは頭がいい、切れ者だなどと思われ、だが、心の奥底で自分には目立った財力や独創性がなく、ひそかに夢見ている権力の高みには手が届かないとわかっている。その結果、あなたは世の中全般に怒りを抱き、周囲の人々をねたむようになる。あなたは少数の個人ないし小さな集団を自分が管理し、支配できる仕事を楽しんでいる。あなたが操作する相手があなたよりすぐれている場合はとくに、自分より頭がよく教育程度が高く階級が上で、魅力があり人気が高く、人格的にすぐれた相手を打ち負かすことは、愉快なだけではなく、存在にかかわる復讐もはたせる。良心が欠けているので、実行は驚くほどたやすい。

精神医学の専門家の多くは良心がほとんど、ないしまったくない状態を、反社会性人格障害と呼んでいる。この矯正不可能な人格異常の存在は、現在アメリカでは人口の約四パーセントと考えられている。この良心欠如の状態は一般的には精神病質サイコパシーとも呼ばれている。アメリカ精神医学会の手引にある臨床診断では以下の七つの特徴のうち少なくとも三つをみたすことが条件

とされている。①社会的規範に順応できない。②人をだます、操作する。③衝動的である。計画性がない。④カッとしやすい。攻撃的である。⑤自分や他人の身の安全をまったく考えない。⑥一貫した無責任さ。⑦他の人を傷つけたり虐待したり、ものを盗んだりしたあとで、良心の呵責を感じない。

アメリカ精神医学会の定義は実際のサイコパシーではなく、単なる犯罪性を説明するものだと考えて、サイコパス全体に共通する特徴に、口の達者さと表面的な魅力を付け加える研究者や臨床家もいる。サイコパスはそれでほかの人びとの目をくもらせる、一種のオーラとかカリスマ性を放つ。トラウマを抱える患者たちは慢性的な不安、無気力な鬱状態、統合失調症的な精神状態に苦しみ、この世で生きていくのは耐えられないと感じ、自殺未遂の患者も多かった。心的外傷を負った患者の大半は、悪意の個人によって支配され、精神的に蹂躙された人たちだった。

サイコパスは自分が道徳や倫理に反した行為や、怠惰、利己的と思える行為を選ぼうとしたとき、それを抑えようとする内的メカニズムに欠けている。おおよそ九六パーセントの人には良心はあまりに当たり前で、意識もしないうちに働くから、いかに想像力を働かせても、良心のない人間の姿を思い浮かべることはむずかしい。自分の行動が社会、友人、家族、子どもたちにおよぼす影響を、完全に無視できる状態とは、どんなふうだろう。良心をもたない人は自分自身と、自分の生活に満足していることが多い。そのため治療法がない。専門家の助けや支えが必要なのは患者だろうか、それともその身近で耐えている人びとだろうか。良心は何のためにあるのか。とりわけ現在、世界は地球規模の不正取引、テロ行為、遺恨戦争で自滅しかけているように見える。その質問に心理学者として答えた。

基本となる五つの感覚が肉体的なもので、第六の感覚が直感だとすると、良心は第七の感覚と言えるだろうか。人類の進化の中で遅く開花した感覚で、今だに万人共通にはなっていない。良心は他者への感情的愛着から生まれる義務感である。第七の感覚はおもに愛と思いやりにもとづいている。良心のない人が妬み、ゲームの中で破壊したいと望むのは良心をもつ人の人格だ。教育は良心を働かせるための一つの要素にはちがいないが、教育程度が人の良心を強くすると考えるのは思い上がりであり、大きな誤りだ。

標的にされたとは夢にも思っていない相手に報復することが、強欲なサイコパスの人生でもっとも重要で、もっとも優先順位の高い行動になる。こうした人間は私たちの日常の中で身近に存在するが、その行動は気づかれないことが多い。私たちはまったく害のない相手に、だれが危険で邪悪な復讐をくわだてるとは考えもしない。強欲なサイコパスのとる行動はあまりに突飛で、あまりに理不尽なことが多いため、それが意図的とは考えにくく、起きたことさえ信じられない。他者には個人的対立にすぎないと思われてしまう。サイコパスはどんな社会的契約も尊重しないが、自分の利益のためにそれを利用するすべは知っている。サイコパスのとった行動はあなたの落ち度、責任でもない。あなたが責任をとるべきものは、あなた自身の人生だ。ふつうの人たちにとって、しあわせは愛すること、より高い価値観にしたがって人生を生きること、そしてほどほどに自分に満足することから生まれる。

良心の大きい人たちに共通する特徴は確実性、積極性、自己と道徳的目標との一致、である。良心が大きくなると、人間の精神をプラスの方向で統合し、生活の破綻を引き起こしたりせずに、人生の喜びを高めていく。良心は母なる自然の良き贈り物だ。その価値は歴史を振り返っても、また身近な日常の中でも、貴重なものであることはまちがいない。

良心のないサイコパスが身近に実在し、気がつかないうちにその毒に侵され、いつの間にか、自分があたかも精神を病むような状態、心的外傷後ストレス障害に陥り、しかも 1

年以上も囚われるとは思いもしなかった。良い家族や師友がいなければ、人間不信の憂鬱は死に至る病、いままで熱意をもって行ってきた任意活動の信頼が卑小な支配欲によって崩される絶望に堕ちこんだことだろう。しかし、このような一般的害悪を研究課題として深く論考する機会にすることにした。残り少ない余生の道草かもしれないが、スタウトが言うように、第七感(良心)が進化の途上にある心の機能であるとするのなら、ホモ・サピエンスの進化史を問わねばならないことになる。これは第四紀の人間と植物の関係における進化学の課題でもある。

私にももちろんいくらかの嫉妬心は有ることを認めるが、嫉妬心を好敵手への競争心に変容して鍛錬すれば、自己を高めることができるとして自律してきた。他者からの嫉妬感情を軽減するために、個人的保身として謙虚で礼儀や誠実を心がけて、地味に質素に暮らして回避するようにしてきた。といっても、自己の心はある程度自律できても、他者の心は如何ともしがたいので、数多く嫌な思いはしてきた。想い遣り（教養）を大切に行為してきたが、このことは大学教授という属性故に、職業病的に逆転して受け止められて、融通は利かせず、高慢な人間だと受け止められていたのかもしれない。他方、羨望という感情に対して私はこれまで有難いことに無意識であったので、今改めて認識を得ることになった。恐らく、子供のころから個人主義的(individualistic)で、正直に言えば、自分の内面に強くこだわり、他者個人にはあまり関心がなかったのかもしれない。社会的な課題も自分事にしてきたとはいえ、わがまま selfish で、興味ある特定の事象以外には関心が薄かったのだろう。

しかし、このように自分を責めてみてきたが、どうもこれだけではまだ心の苦痛から逃れることはできない。あるいは超克に苦しんでいる自己は自らを超えようと意思する拡大自己であり、すなわちトランスパーソナル超己な自己、いいかえればこれも第七感良心のなせる機能なのだろうか。シッダールタ（ヘッセ 1922）や幸福の王子とツバメ（ワイルド 1888）の良心の苦痛と同じなのだろうか。世界の苦を我がものとする良心を縮小するか捨てれば、彼らは何も知らないで幸福の王子のままで、解脱することも、天に召されることも必要は無かった。私も幸せな個人でいられるのだ。支配欲の巨大悪と卑小毒に苦しみ抗う人々に共感しなければ、目を閉じさえできれば、超克せずとも、心の苦痛から逃れられるのかも知れなかった。

他方で、フォックス,W.(1990)はトランスパーソナル心理学を次のように紹介している。この中で、エイトキン禅師が、「菩薩の理想こそ、われわれ人類が生きのびる唯一の希望である。貪欲と憎しみと無知の三毒がわれわれの受け継いできた自然と文化を破壊しつつある。地球市民としてラディカルな菩薩の立場に立てないかぎり、われわれはまっとうな死さえ迎えられないだろう」と言っていることも引用されている。{注:radical/fundamental、根本的・基本的}

トランスパーソナル心理学は、人間性心理学の中心的役割を果たしていた A.H.マズローと A.J.スティッチによって提起された。歴史的に見たときに、人間性心理学は、行動心理学およびフロイト心理学と、トランスパーソナル心理学とのちょうど中間に位置する。理論面からいうと、人間性心理学は、行動主義心理学およびフロイト心理学における機械論的・還元主義的な狭い人間本性のとらえ方に対する批判としてはじまった。これまでの心理学は人間の弱点や病、罪深さといったも

のを暴き出したが、潜在的可能性や美点、抱負、心理学的に達しうる最高の状態といったものにはほとんどふれていない。積極的・肯定的な心理学は、行動心理学が強調する適応にかかわって創造性を重視し、フロイト心理学が強調する神経症的惨状の改善にかかわって、心理学的な健康と自己充足を重視することになる。

マズローの理論は、人間の欲求が五段階の階層構造をなしており、これを基本的欲求とメタ欲求とに二大別した。基本的欲求は、生理的欲求、安全への欲求、愛の欲求、所属の欲求、承認欲求で、これより上位のメタ欲求は自己実現欲求と呼んだ。彼は晩年になって、単に健康な自己実現者と自己実現超越者とを区別するようになり、第六段階として自己超越欲求を加えた。自己超越者とは、自我や自己、アイデンティティといったものをたやすく超越し、自己実現を乗り越えられるような人々である。第四のトランスパーソナル心理学は、トランスパーソナルで、トランスヒューマンで、人間の欲求や関心より大宇宙を中心に置き、人間らしさ、アイデンティティ、自己実現といったものさえ乗り越えるに違いないとした。自己感覚というのは、心や世界のさまざまな側面のうち、われわれがふつう他者ないし非自己ととらえるものを含むところまで広がることができる。

訳者の星川は、トランスパーソナル・エコロジーの道しるべとしては、洋の東西を問わず、地に足がつかない上層文化より、各地の先住民文化に伝わるもっと素朴な生命世界との同化の方がふさわしいと思えてならない、と記している。

2）保身について

苛酷な現世で人生を暮らすには、他者を傷害しない程度には保身が必要だ。しかし、過ぎたるは及ばざるがごとしというように、個人としても保身が過剰になることを回避し、誠実でいたい。大小の権力犯罪は、自己個人やムラ社会集団の過剰な保身のために、事実を歪め、隠蔽し、さらには虚偽を流布することなどにより、騙され、見逃されてしまう。

何とか自由に楽しく生きるには、心の構造と機能を整えて、自律する心を鍛えなくてはならない。私の保身方法は、マスメディアに露出せず有名にならない、役職を謝絶して社会的地位を回避することであった。この世では名声や地位を得ないと、作品が普及し、必要かつ正当な評価を得ることはできない。でも、過大な名声や地位を得れば、自由な学びや家族との幸せな時間を失う。しかし一方で、学問は自己の嗜みだが、これを税金により賄われる職業として行っていたからには、その成果を、社会的責任として人世のために役立たせなくてはならない。この矛盾を慰めるために、三浦梅園の「人生恨むなかれ人知るなきを。幽谷深山華自ずから紅なり。」を座右にして、社会的立身と保身の過剰を戒めてきた。また、三浦は「学問は飯と思うべし」とも言っている。

研究者の研究姿勢を概観してみると、①書斎に籠り文献調査をもっぱらとする、②実験室に籠り科学分析や他者・公的機関の収集したデータ解析をもっぱらとする、③植物園・圃場に出て野外試験をする、④自然に出て観察や測定調査をする、⑤地域社会で参与観察や聞き取り調査をする、⑥地域社会で課題解決の活動をする、⑦社会的課題を解決する方策を提案する、などに類型化できよう。①や②では現場・現実に身をさらすことはない。③から以降の姿勢では次第に現場での調査研究することになるので、地域社会や社会政策にも身をさらすことが多くなる。現場の現実を参与観察から、さらに参与提案活動にまで踏み込むと、地域社会の有力者らの嫉妬・羨望に晒されることになる。その結果として、ムラ社会からムラ撥撫を受ける危険が増す。さらには、思想信条の異なる人達からも社会的論難を受けるだろう。

大方の研究者は研究成果を上げるための効率性を第一に、危険が十分に予測できる現場には出ないように保身を図る。つまり、多くの研究者にとっては、その上の参与提案活動はもってのほか論外で、そこまでして社会に尽くす必要があるとは思わない。これは当然の保身である。ところが、私は長期に渡って定点参与観察を行うばかりか、社会政策や法案の基礎調査、政策提言にも関わり、一般の研究者とは大きく異なる研究方法論を現場で実行してきた。社会を信頼して正当な保身までも行わずに、度重ねて危機に瀕しながら、なおも生の心身を現場に晒してきたのである。その結果として、社会寄与への努力がムラ社会の過剰な保身と嫉妬によって無力にされたことへの虚無を耐えねばならない。

人世における虚無と便利も、現代社会文明の根底にある心の在りようだ。これらも過剰になると、心の構造が一層大きく歪み、心の機能を自律できなくなる。現代の科学技術の便利をどこまで受け入れ、過剰の境界を決めて、自律するかだ。ITC 技術は研究資料の分析に使用する。しかし、日常の暮らしにおいて携帯電話を持たない、SNS には加わらない。私がこれらの過剰便利に支配されれば、心は病んでさらなる虚無に蔽われてしまうだろう。

3.3. 教養を磨く

良心が第七の感覚とするのなら、教養を磨き、想い遣りの心を深めることは良心の鍛錬だ。五感が心の構造を形成する各知能の発達基盤であるのなら、第六感（直感・直観）は一般的知能を流動させ、第七感（良心・教養）はその核心が教養（想い遣り）ということなのだろうか。やはり、上の引用（スタウト 2005）のように良心を持たない人が 4%いるという現実は高学歴がすべての人々に教養を保証してはいないということだ。先天的な素質というものはあるが、一方で後天的に五感も第六感も、さらに第七感こそ鍛錬が必要である。

他者の内なる毒を制する方法はない。自己の毒は教養を高めることで自律制御し、自家中毒を防ぐことができる。学ぶことを望む人は他者から教養を高める方法を受け取ることができる。しかし、他者に教養を伝える意思を示し手助けはできるが、他者に受容を要求することはできない。すべては個人の自由な所業にあり、当人が望むのなら誰もが阿修羅のごとく自ら励むしかない。私が思うに、阿修羅は人間としての苦しみを自らの課題として終始戦い（学び）に明け暮れ、人間道や畜生道だけではなく、阿修羅はすべての六道に移動できる存在ではなかろうか。

アシュラ阿修羅はインド神話における鬼神の一種で、サンスリット語 asura の写音、アーリア人のインド・イラン共通時代にはアスラとデーバ deva は共に神を意味し、彼らが分かれて定住してからはインドではアスラが悪神を、デーバが善神を意味するようになった。イランではアスラはゾロアスター教の主神アフラ・マズダとなった。神 deva と阿修羅の闘争はインド文学のよいテーマとなった。阿修羅は初期仏教の五道にはなく、阿修羅は天道や餓鬼道に含まれていたが、大乗仏教になって新たに修羅道が派生して六道になり、三善趣の下位に位置付けられた。阿修羅は原初の古い神であり、ヒンドゥでは敵対する鬼神となり、佛教では改心して守護神に位置付けられている（Wikipedia、世界宗教大辞典 1991)。アシュラは本来系統の異なる神であって、古くは邪悪な存在とはされておらず、たとえば、乳海撹拌の時はヴィシュヌ神らと協力しており、リグ・ベーダの暴風雨神ルドラもアシュラの一種であり、否定的な意味はなかった。インド神話が先住民との闘争史を反映しているのならば、アシュラはアーリア人に対抗した種族と考えられる（長谷川 1987)。

第 4 章　心の構造と機能

絶望は精神におけるすなわち自己における病である。
人間とは精神である。精神とは自己である。
自己とは自己自身に関係するところの関係である。
（キルケゴール 1848）
逃げることができない出口なしの世界は、恐怖である。
そして、自分が悪意のターゲットにされたときの絶望。
人類はこのはらわたがねじれるような現象に苦しんできた。
（内藤朝雄 2009）
絶望の中にあっても、いつもお互いのことを想い、
私たちはもっと強く生きなければなりません。
生きてさえいれば、希望があります。
（周庭 2020）

今までに私は次のことを考えてきた。これらを踏まえて、さらに続きの考察を進めたい（黍稷 2017）。

黍稷農季人は三つの謎を解きたいと言った。第 1 謎は、何故、現世の人々は先人の生活文化、庶民の歴史に関心がなく、先祖への敬意を失ったのか。第 2 謎は、何故に自然文化誌研究会の環境学習活動は有耶無耶のうちに地域社会の有力者から四度も追放されてきたのか。第 3 謎は、何故、地域住民は地域のために自由民権活動をした人々、また郷土を守るために戦死した人々を沈黙して助けず、敬意を表さず、忘却の穴に放り込んだのか。

また、文福洞先斗はこの謎を解こうとして、次のように応じている。第一の謎の解、過剰な都市の便利に幻惑されて、自然離れし、生業を忌避して、人間であることを自己疎外しているのだ。第二の謎の解、行政の仕事範囲を超えた成果が出て、村の変容に踏み込み始めたと為政者に解釈されると、彼らの領分を侵犯し、面子を潰したとして、その後は弾き飛ばされるのだろう。自然を忘れた無知な都市民が恥知らずに山村を軽視し、恩知らずに犠牲を強いてきたため、山民の誇りが痛く傷つき、脆弱になったからに違いない。第三の謎の解、明治維新の功罪のなかに隠蔽された「重罪」である。自由民権｛運動｝の徹底した弾圧（治安維持法）が恐怖を刷り込み、地域社会は沈黙したのだろう。また、足尾銅山鉱毒事件などは常民・市民を守るべき為政者に虚偽・隠蔽によって抑え込まれてきた。

山村の人口が著しく減り、限界自治体崩壊の危機にあるのに、村の為を真摯に思い、活動する人々を迫害するなんておかしいと思う。これまでいろいろな排除経験を受けてきた。志ある都市民・山民は仲良くしているのに、為政者は何故仲良くできないのだろうか。追放・排除の理由を考えてみた。①都市から来る若者の活動への猜疑的排除、②不特定の都市民の頻繁な来訪忌避、③都市民への不要な劣等感、屈折した嫉妬心、④地域内の土地所有や権力争い、⑤思想信条の対立、政治党派や私欲利権争い、⑥個人の人柄への感情的好悪など。

これらの負の課題を解き、山村に豊かな暮らしを創るにはどうしたらよいのだろう。寛大な心で、自律した友愛を育ててほしい。このくにの人々は孤独に耐えられず、孤立を恐れて思考停止、付和雷同するが、実際には他者を信頼できずに孤立を深めているのだろう。ここから脱却しなければ、

地域社会の再生はない。人々は自然や歴史から学び、暖かい情理に添うべきだ。山民は厳しい自然に挑戦し、共存・共生して、誇り高く暮らしてきた。その生活や生業は三浦梅園が言う深山幽谷に美しく咲く紅の花である。どうか、山民は自然に挑戦する心、冒険心、勇気や誇りを、都市民に学ばせてほしい。弱くなったこのくにの人々の心の形を、V.ゴッホ（1990）の言うような｛日本人へと｝、大らかに咲く花のように楽しく、幸せに導いてほしい。

4.1.　さらなる内面への道

H.K.ヘッセ（1922）は、『内面への道－シッダールタ』の中で、「世界の創造、ことばや食物や呼吸の発生、五官の秩序、神々のわざなど、無限に多くのことを彼らは知っていた。しかし、そういう一切を知ることに価値があったろうか。もしも一つのもの、唯一のもの、最も重要なもの、ただ一つ重要なものを知らないとしたら。」とシッダールタに言わせている。ここで言うただ一つの重要なものとは、「真我」すなわち「なんじの魂は全世界なり」なのだろうか。

私は雑穀調査と在外研究でインドにのべ６回行き、合わせて２年余り滞在した。バンガロールの郊外で下宿暮らしをしていた時には、瞑想の小部屋があった。家主のシヴァナンダイアの勧めに従って毎朝 30 分ほど、香を炊いて瞑想した。ヒンドゥ教徒でも仏教徒でもないので、神像も仏像も小部屋に置くことはなかった。すでに壁面にはヒンドゥ教の神々が描かれていた。帰国する際には、家主から、あなたは敬虔な暮らしをしていたので、健康でいられたのだとお褒めの言葉をいただいた。

さて、私は雑穀と環境学習の研究として、45 年ほど、山村に関わり続けて、多くの村人から温かい親切と助力を受けてきた。でも、その地に定着し、10 年ほどして、何人もの村人と親しくなり、信頼を得て活動が軌道に乗ると、何故か私たちは村の有力者から撥撫を度重ねて受けてきた。私は山村やそこで暮らす人々が好きで、それでもめげずに、自ら意思しては決して逃げ出さないと村人に約定して、山村に通い続けてきた。何故、撥撫という事象が起こるのかを、内省的に考え続けてきた。研究者としてこのことを解き明かさないわけにはいかない。私たちの真文明に向かおうとする内なるトランジションを阻害し続けてきた問題だからだ。人間の心の構造や機能の課題なのだと考えるようになった。心の構造において、良心すなわち教養を鍛え、自律する心の動的平衡を保持するのだ。

心の構造は生まれながらの遺伝的素質にもよるが、それでも生れてから後天的に鍛錬することによって一層発達向上する。心の構造はその機能としての五感、第六感（直感から直観）、さらに第七感（良心）によって平衡が保たれていることに考えが進んだ。この文化的進化を教養（想い遣り）の獲得、洗練化と理解したい。構造は形態的に支えられ、機能は生理的に働き、これら構造と機能は社会環境において生態的に保たれ、その統合された心は個人の特性として分類される。心の構造については既に第 2 章で論考したので（木俣 2019）、ここでは心の構造を統合に導くような心の機能について、さらに内面への道について論考を加えたい。

内面とは心の構造と機能のことである。変化とは①感性：五感・感覚、身体性、②信念：直感、直観、精神性、③信仰：教養、良心、霊魂性、の変容に関わることである。内面の変化 inner transition について、Transition Town Media.html より（2021.3.12）、その定義や活動について見てみよう。

Inner transition　内面の変化とは何か？

トランジション活動は、私たちが単に「外」世界（たとえば、食物農園、水樽、地域経済、など）のみでなく、私たちの「内」世界をも変化していることを理解している。

少しの例：

○私たちが「成功」を定義する方法を変えること。

○お互いの関係、地球上の他の暮らし形態との関係を変えること。

○意識における変化。

○時間との私たちの関係を変える。

○トランジションの霊的、心理学的視点に習う。たとえば、未来に対して持つ私たちが持てる夢（大きな家、贅沢な退職など）を認識するような失望感は決して結実に至らない。

○また、多くのことども。

（Transition Los Angeles city hub、
https://sites.google.com/site/transitionlosangeles/working-groups/inner-transition）

内面の変化 Inner transition：心と魂の内面の変化（2012 年 10 月 21 日　Marion 投稿、木俣訳）

トランジション・イニシアティブ（移行の創意）のもっとも重要な視点の一つが Inner transition（内面の変化）である。これは私たちの存在・心と魂のもっとも深層に触れることである。私たちは、本当の自分を忘れてしまった消費文化にそれほども根付いてきている。結果として、私たちの暮らしの霊的な視点が重要性を減らし、そして私たちの惑星は破壊されつつある。私たちは目を開き、もし、私たちの惑星上の生命が存続するのなら、何が私たちの世界に現実に起こっているか、見る必要がある。私たちはすべての「素晴らしい物」、気の利いた小物および現代社会の技術によって取り乱されてきた。私たちは互いから、益々隔離され、切り離されてきている。私たちはアメリカの理想、独立と個人主義を極端に進めてきている。また、結果として、私たちはしばしば孤独で、疑い深く、恐ろしく、また、他者を信じなく感じる。

人間の意識の大きな転換は、私たち自身の中にあるもっともなもの、生命の維持に必要なものとの再結合を必要とし、また私たちを、惑星上で持続できない人間の存在から持続できる存在へと動かすことができる。Joanna Macy はこの転換を「大回転」と呼んでいる。Thomas Berry はそれを、今日、私たちの誰もが直面している「大仕事」と呼んでいる。

私たちは内面への変化を始めるために次の質問を考えることができる。

○惑星の歴史におけるこの時代に生きることはどのような事か？

○私たちは暮らしている社会によってどのように形づくられるのか？

○現在の経済システムは、地球上の私たちおよびすべてに、生き物にどのように影響しているのか？

○未来に対する私たちの夢や展望は何か？私たちが世界の現況を現実に見つめる際に、私たちは何を感じるのか？

○私たちの世界に起こっている何かに目を広く開けてみることの代わりに、私たちはなぜ否定し、無視し、閉鎖し、また実際に使える気晴らしを探るのはなぜなのか？

○自然の必要に関するとしても、共に生きる新しい方途を創ることを私たちに可能とさせる、どのような内面の供給源を、私たちが持っているのか？

心と魂の集合はこれらの質問を処理するために、トランジション・イニシアティブに持ち上がっている。これらの問題を誠実で、開放的な探求へとともに向けることは、私たちの歴史のこの時代にとても本質的である意識の転換を支え、励ましている。Joanna Macy の言うように、「私たちは千年の眠りから、私たちの世界との、私たち自身とお互いとのまるで新しい関係へと目覚め始めてい

る。」私たちはこの旅に加わるようにあなた方を誘う。

Transition Network では、Inner transition のために、質問 inquiry、案内 guide、活動 activity など、多くの提案をしている。たとえば、

質問 inquiry：自己、他者および世界との関係　　R. Cuthbertson　2020

案内は、会話を始める契機として、あなたよりももっとこれらの話題に異なったつながりを持っている人々への理解の増進に向けようとする。

活動 activity：

・個人の内省 personal reflection は人間の経験理解に向かう内面の変化の価値ある部分であり得る。人間の経験は個々人、集団ら、および広い世界にとって、より深くより多い情け深い関係を理想的に育む。このための具体的な活動が提示してある。

・自己治癒（6 指針）；精神的、身体的・感覚的、自然、情緒的、社会的、および世界観。

指針 guide：

・個人の回復力のための内面反応 feedback

イギリスは、孤立を社会問題とみる国の取り組みとして、世界初の孤独担当大臣を置いた（2018）（朝日新聞デジタル、丹野敦子　2020.1.8）。メンズ・シェッド男たちの小屋はオーストラリア発祥。イギリスには 500 以上あり、利用者は 12000 人超、背景にはイギリス国民の孤独への危機感がある。英国赤十字など（2016）の調査では成人の約 2 割、900 万人が恒常的に孤独を感じている。2018 年に孤独担当大臣をメイ首相が任命した。英国政府の孤独の定義は、人づきあいがない、または足りないという、主観的で好ましくない感情。社会関係の質や量について、現状と願望が一致しないときに感じる、ということである。　BBC ラジオの調査では、16～24 歳の若者が最も孤独を感じている。2020 年からは小中学校のカリキュラムで孤独の学習が組み入れられた。

孤立は社会が対応すべき問題（朝日新聞デジタル、みずほ総研・藤井克彦　2020.1.8）で、孤独 solitude と孤立 loneliness は違う。孤独は寂しいといった感情で、個人の内面の問題。孤立は他者との関係性が乏しいことで、社会的孤立ともいう。さらに、セネシオ（2018.12.23）は次の様に述べている。

Kodokushi　孤独死：5～6 年前は lonely deaths と表記されていたが、2 年位前から日本語の kodokushi が使われだした。孤独 solitude が一人でいる時間だとしたら私はそれは貴重なものだと思っている。豊かな孤独の時間は子どもの内面生活を大きく育てる。イギリスやフランスでは孤独や孤立が重大な社会的な課題として認識されて、いろいろな社会活動や政策が行われてきている。

4.2.　ムラ社会とイジメの仕組み

歴史的な課題は、日本の人々の相当数は個人主義的に生育せずに、野蛮にも利己主義的に記憶力競争の受験体制により教育されて、これら名利に囚われて相反する信条を区別することができていないことにある。閉鎖的集団（群れ）、ムラ社会は洋の東西、田舎・都会を問わず、どこにでも形成される。人間の心の構造に巣食う病弊、負の機能である。ムラは村を意味するのではなく、閉鎖的集団を意味する。村は小さな地域だから、ムラ社会が目につきやすいだけで、たとえば、イギリス（ヴェラ、バーナビー警部、ルイス警部）やフランス（絶景ミステリー）などのテレビ・ミステリーを見ていても、ムラ社会が形成され、撥撫イジメが発生し、この犯罪による不幸が起きている。山村の自然と生業文化は好

きだが、ムラ社会の撥撫（イジメ）はきっぱり拒否する。
　しかしながら、イタリアの小さな村の物語シリーズを見ていると、私が希求してきた素のままの美しい暮らし sobibo と良く合致している。イタリアの小さな村の物語の番組概要は次のように記されている。

　美しく生きるということ。気候や風土に逆らわず、共存しながら暮らす。先人たちが築き守ってきた伝統や文化を誇りに思いながら生きる。人間本来の暮らしが息づく小さな村が今、注目されています。海を望む小さな漁村、山肌にはりつくように佇む村、雪に覆われた山間の寒村・・・。古き良き歴史と豊穣の大地を持つイタリアで、心豊かに生きる人たち。豊かに暮らす、美しく生きる、とはどういうことなのか。私たちが忘れてしまった素敵な物語が、小さな村で静かに息づいていました。番組ではありのままの時間の流れを追い、村人たちの普段着の日常を描いていきます。

　毎回見て、家族の情愛の深さに涙が出てくる。村で暮らす親たちが子供たちを都市の大学に進学させ、子供たちは都市で高給の職業を得ても、いずれ故郷に戻り、家族と共に過ごすことを大事にしている。日本と似たように山や海に近い暮らしでありながら、イタリア人は故郷を大事にしている。日本人はどうして小さな村を打ち捨て、また、街でも家族を大事にしないのだろうか。自分を支えてくれている家族や師友からの温かい好意、心情を想い出すことだ。あなたや私は素のまま、美しく暮らし、幸せに生きていてよいのだ。生活信条や信仰に支えられて、信念を真っすぐに生きてよいのだ。

　新たな用語ムレ（群れ）社会の定義を思いついた。ムラ社会は村を想起させ先入観による田舎への偏見を助長させてきた。したがって、ムラ社会を定義し直して、ムレ社会と表現する方がよいのではないかとも思うが、しかし、小さな地域社会の方がムレ社会の形成が実態的に働くので、逃げ場のないムラ撥撫が生じる。つまり、田舎の小さな地域社会の濃い歴史性を負ったムラ社会形成と都市の歴史性が希薄なムレ社会は幾分かの差異があるのかもしれない。都市では、隣の人は何する人かもほとんど問われないので、逃げ場はある。都市ではムラ社会が形成されないと言っているのではない。都市でも古くからの土地所有住民のムラ社会（地元神社の氏子など）は隠然としてある。それでも、個別のムラ社会に関わらないで暮らしてはいける。また、多様なムレと同時に関係を結ぶことが出来るので、都市の希薄な人間関係が、この場合は良い意味で一次的な引き籠り、逃げる場所にもなり得る。
　ところが、学校、会社、あるいはいろいろな社会集団が閉鎖的であると、これらの中にいろいろなムレ社会、イジメ・グループ、学閥、派閥、ムラ、シマ、隣組、などが出来る。人間社会では普遍的に群れができるのであり、当然ながらムレ社会はその構成員と非構成員にとっても正邪の両義性をもつ。閉鎖的集団としてのムレ社会で、撥撫（イジメ）の対象にされると、被害者が自分に落ち度があるのではないかと、自分を責め心身の痛みが生じる。ひどい場合は鬱屈して病み、自死に至る。こうした心身の痛みを快復するには、社会的自立、心理的自律するように、超克することである。
　内藤朝雄（2009）から要約引用する。イジメは日本の学校だけで生じる問題ではないが、ここでは、主に日本の中学校における具体的な事例からイジメの生態的分析を行っている。

①群生秩序；群れの勢いによる秩序。空気を読め。みんなから浮いているにも関わらず、自信を持

っている者は、ものすごく悪い。普遍的秩序は反感と憎しみの対象になる。面白いからイジメる、遊びであればすべてが許される。
②市民社会の普遍的秩序；普遍的な理念やルールを組み合わせて市民社会の秩序が編成されている。中心部分は人権、尊厳、自由、平等、などである。
③小社会の秩序、学校；事件の当事者を孤立させる。拒否すると村八分とわが子の差別を覚悟しなければならない。人の魂を深いところから奴隷化する、陰惨な秩序を感じる。生徒たちは濃密に付和雷同して生きている。人道に反する学校らしさが問題だ。人間の死を軽く見る傾向や、個人と個人の間に信頼関係が全くないにもかかわらず濃密に密着し合っている傾向、学校共同体では結局個人の責任は生じない。

イジメが成立するためには、①加害者の嗜虐意欲、②加害者による現実の攻撃行動、③被害者の苦しみという三つの要素が必要である。この三要件を概念の中心に位置づけて、イジメを三段階に分けて次のように定義する。①最広義の定義 A:　実効的に遂行された嗜虐的関与。②広義の定義 B:社会状況に構造的に埋め込まれたしかたで、実効的に遂行された嗜虐的関与。③狭義の定義 C:　社会状況に構造的に埋め込まれたしかたで、かつ集合性の力を当事者が体験するようなしかたで、実効的に遂行された嗜虐的関与。イジメの中核群は、群れたみんなの勢い、あるいは自分たちなりの特殊な秩序を背景にしたタイプである。すなわち、定義 C に類型化されるイジメである。

イジメの加害者は、イジメの対象者にも、喜びや悲しみがあり、その人自身の世界を生きていることを承知しているからこそ、その他者の存在を丸ごと踏みにじり抹殺しようとする。イジメの加害者は、自己の手によって思いのままに壊されていく被害者の悲痛のなかから、全能の自己を生きようとする（全能筋書）。被害者がイジメられるのを拒否すると、加害者のほうがこのような態度をとられたことに、独特の被害感覚、屈辱感、激しい憤怒を感じる。全能の自己になるはずの世界を壊されたとして、被害者に対して復讐をはじめる。

イジメは日本特有ではなく、世界共通あるいは人類普遍の心理―社会的なメカニズムによって蔓延し、世界共通（人類普遍）の心理―社会的なメカニズムによって減らすことができる。

各人の人間存在が共同体を強いる集団や組織に全的に埋め込まれざるをえない強制傾向が、ある制度・政策的環境条件のもとで構造的に社会に繁茂し、遍在している場合に、その社会を中間集団全体主義社会という。人々を直接的に苦しめる主要な力は、国家権力や市場の貧困化力というよりも、「生活の細部にまで浸透し、霊魂そのものを奴隷化する（J.S.ミル）」ローカルな秩序の作用である。内側から自分を変えてしまう場の変形力が、自己構成的な中間集団共同体＜世間＞にはある（注:自己が自己である仕方まで、当人の制御が及ばないところで、いつの間にか作りあげられる）。この侵食作用は、自分に対する不信感や嫌悪感や無力感や、場のなりゆきに対峙する自己であることへのなげやりさを蓄積させる。

戦時中の隣組制度により地域コミュニティの自治と共同の過酷な強制が行われた。公に献身する共同体的様式が強制されると、今まで潜在化していた妬みや悪意が解き放たれた。適度に物象化された市場と法に隔てられて、各自が適度な距離をおきながら私的な幸福を追求していたころには、決して起こらなかったようなイジメが頻発した。国家が個人を直接圧殺する全体主義ではなく、われわれの強制的な献身要求、献身を自己のアイデンティティとして共に生きる心の強制、われわれの共生を離れたプライベートな自由や幸福追求への憎悪、これらが草の根的に沸騰する共同体的専制による全体主義である。

必要なことはこのような社会に名「中間集団全体主義社会」を与え、このような社会に生きる人々の構造的な苦しみの諸相を明るみに出すこと、さらに、この全体主義の苦しみに着目したやりかたで、自由な社会の構想を描き、社会変革へとつなげることである。人間が人間にとって怪物になる

現象を説明する。これは人類の歴史のあらゆる時代、あらゆる地域に当てはまる普遍的な現象である。私たちに共通の痛みの経験から、もっと恐ろしい大人の普遍的な現象を理解し、それを止める方策を練る必要がある。小権力者は社会が変わると別人のように卑屈な人間に生まれ変わった。状況次第で人が変わってしまうのは情けないが、このような豹変を希望の論理として受けとめる。適切に制度・政策的な環境条件を変更すると、小権力者が卑屈な人間に生まれ変わり、愛想のよい近所のおじさんになる。結果として、多くの人々が隣人＝狼の群れから被害を受けずにすむようになる。群れた隣人たちが狼になるメカニズムを研究し、このメカニズムを阻害するような制度・政策的制度設計をすることだ。

浅野の聞き取り調査によれば、イジメにかかわった中学生は遊びだから、被害者を自殺に追い込んだとういう罪の意識はない。みんなのいま・ここは重く、個人の命は軽い。彼らにとってもっとも悪いことは、みんなが共振し合うノリの世界にひびを入れることである。彼らは人権やヒューマニズムを生理的に嫌悪する、とまで述べている。

たまたま、検索にヒットした小説『あたしたち、海へ』(井上荒野 2019) を読んでみた。女子中学生の集団的イジメの構造とその顛末を描いたフィクションで、中途半端な物語だが、事実を単純化していてとても判りやすかった。友情を支配、分断され、自殺（ペルーに行くと象徴的に言い換えている）寸前にまで追い込まれていくが、父親の住んでいる海外のペルーに転校するという母親の提案で、解決できないイジメにあっている 3 人の女子中学生はとりあえず友情を再確認し、自殺を思いとどまるところで物語は終わっている。悪なる者はそのまま悪いままにしておけということか。

イジメをする者たちと関係を断つことが、良心ある善人が自らを護る現実的で最良の対処法だろう。しかし、イジメを続けている小集団、対応を忌避した教員・学校に対しては何の解決策もないままである。学校は時として人間関係を形成するところではなく、人間関係を壊すところのように作動する。学校や教育委員会がイジメの事実を隠蔽したり、虚偽の調査報告書を出したことも、時々聞き及ぶ。良心を持たない毒人間と、その毒に侵されてイジメに加担する者たち、次の標的になることを怖れて傍観無視する者たち、ましてや、被害者にも落ち度があると非難する者たち、そこには絶望的に解決はない。しからば、とりあえず、登校拒否して学校から別の場所に逃散するしかないのではないのか。

人間性善説によって、制度・政策を作れば、イジメはある程度回避できるということには合意する。しかし、良心を持たずに毒を溜め込んだ人間は少数でも存在するということを事実として前提とせねば、根本的な解決策はあり得ず、イジメはなくならない。マスメディアの過剰反応は毒を持った人間の嗜虐に沿うので、事実に憶測の尾ひれを付けるような報道はやめるべきである。{注：嗜虐、残虐なことを好むこと（広辞苑）}

私は子供の頃から、だれの子分にもならなかったので、イジメられっ子だった。理由は肌の色が小麦色だとか目が大きい、あるいは和菓子屋の子、きっと貧乏であるとか、である。原日本人の私が、アフリカ系アメリカ人、すなわち黒人として二重に差別されたのだ。教員は大方助けてはくれなかった。それでも、友人がいたので孤立することはなかったので、毎日、泣きながら喧嘩し、負けることが分かっていても抵抗し続けた。子どもの腕力は必死になればさほどの違いは無いので、番長にもダメージは与えられたから、イジメ集団は私へのイジメをやめた。したがって、私は根に持ち復讐しようなどとは、有難いことに、サスペンス事件のように成長してまでも、今まで思ったことはない。人種や民族など、あるいは身体的特徴など、私は子供の時から差別を嫌悪し、学校教員という職業も嫌いに

なった。このために、アフリカに行って、シュバイツアー博士の手伝いをするとの志をもった。それでも卒業式には「仰げば尊し」を歌うように強要された。しかし、さほどぐれもせずに大過なく社会生活をしてきたのは、本当に良い師も少しはいてくださったからだ。今でもその恩義は思い出すし、良い友人もいたからその友情への恩も想い、もちろん忘れてはいない。学び、励むことは望むが、しかし、立身出世主義はもう沢山で嫌いだ。因果なことに、東京学芸大学に職を得て、連合大学院博士課程の教育構造論講座教授として環境教育学研究も責任をもって行ってきた。また他方で、異質な抗いをしながらも、環境学習原論をまとめて職業的責任を果たし、これで充分自己満足したのだが、できればラジカルな教育方法論として、さらに正直に言えば、いくらかでも学校関係者や保護者に普及したかった。ありがたいことに環境学習原論を幼年者・保護者向きに描く機会を頂いたので、その本質は生きている（木俣監修 2017）。

仰げば　とうとし、わが師の恩。互(たがい)にむつみし、日ごろの恩。別るる後(のち)にも、やよ　忘るな。身を立て　名をあげ、やよ　はげめよ。

私は知性、良識の府である東京学芸大学の中でも学閥や分野領域に形成されるムラ社会をいくつか見てきた。それには加わらないで、無所属、自由にふるまってきた。ムラ社会（ムレ群れ）による、私への反感の理由は、次の事柄がエリート意識と受け止められたことによるものだろうか。わが師の学恩に対して師弟の礼を重んじてきた。この師は自ら選んで師事し、学校に入って選ぶこともなく、決められていた先生のことではない。こうしたアカデミック・ファミリーなどというものは、古い考えで、これも学閥という一種の群れなのだろうか。それでも、学術調査（探検）に同行した人達のことは、たとえは悪いが、軍隊でいうところの戦友のようなものなのだろう。危険な探検旅行を共にし、同じ釜の飯を食ったからである。さらに、親炙する師は現世でも広く求めるべきであり、また、古典書によって何百年も前の師にも私淑することができる。古典書は良心を鍛え教養を高める力を秘めている。学校教育制度で押し付けられる教員が師のすべてではなく、自ら人生の師を遠くにまで、広く求め探すべきである。

醜い為政者たちに対して異議申し立てをする、マララ・ユスフザイ、グレタ・ツンベリーや周庭が多くの若者たちから共感されるのは、純粋な志と勇気を見るからだろう。国制度のすべてが悪いわけではない。権力者が名利を求め、過剰な出世や保身のために、自由、平等、友愛あるいは民主主義という文化的進化、すなわち良心の発達を阻害することが悪徳の栄えになるのだ。巨悪な権力犯罪の野蛮に対して抵抗することは英雄的である。恐怖を超えて精神の高揚がある。巨大な権力者に立ち向かい、恐怖にふるえながらも、信念を曲げない。香港の若者たちの自由な社会を求める勇気ある抵抗に強く共感し、高い敬意を持つ。私の青春も同じだったが、その時に敬意すら感じていた中国や北朝鮮の歴代の為政者たちが今では香港市民の自由を封殺しようとしている。隠蔽されていた共産主義社会の現代史的事実も知らなかったことを、今更ながらにとても恥じ入る。さらに加えて驚いたことに、ベラルーシでは、市民から庶民の現代史について穏やかに聞き書きをしてきたアレクシエーヴィッチが現政権に反対する代表的な良心ある人になってしまっていることだ。日本を訪れたときに、彼女は、「今、ベラルーシでは政府に対する反対派が忽然と行方不明になったりしている。自分も危ないとは言われているが、こちらが臆病風を吹かせなければ手を出されない」と言っていたと聞くが、いよいよ権力犯罪の危険が迫っている。（アレ

クシエーヴィッチ 1985)。

それに比べ、この日本では内外の状況にほとんど無関心で、いつまでも内向きで卑小な中間集団全体主義社会（群れ）が良好な地域社会の形成を阻み続けるのだろうか。日本の市民の知的水準が衰微し、第六感（直観）は発育せず、第七感（良心）も衰弱しているのは、偏に強要する学校教育の実際的退化によるもので、自ら意志して学習することを阻害しているからだろう。善良な市民は多いが、邪悪に流される人々も少なくないのだ。増殖するイジメの心毒を自律超克して治癒せねば、日本はこのまま若い人々の引き籠りや自殺が多く、悲惨な社会状況を続けることになるだろう。

この卑小な権力という精神風土は半千年紀の間に形成されたのだろう。天皇公家と武家とを併存させた二重権力の無責任政治機構、喧嘩両成敗、刀狩りで庶民の武装解除をして抵抗を失わせ、幕藩体制で逃散を防ぎ、五人組、檀家制度という行政末端支配で、常民間の相互監視や連帯責任を日常化してしまったのだろう。さらに悪いことに、キリスト教を禁止、一向宗を弾圧までし、社寺が行政末端として一体化し、真の信仰心まで衰微させてしまった。

しかし、独裁専制権力の野蛮な巨大暴力とはまったく対照的に、イジメなどという心の機能不全は卑小な野蛮だ。こんなことで行動を阻害され、自らの心をも苦しめるようなことは、鬱屈としてとても嫌になる。しかし、これが毒に侵されて自律できない人々の悲しい野蛮とするなら、情けなくても、哀れであっても抵抗するしかない。この毒を解かなければ、楽しく幸せな個人、家族や地域社会を形成し、維持することはできない。歴史的閉鎖性と地理的閉鎖性をせめて半閉鎖性にまで移行させたい。

支配欲を制御しない巨大／卑小の権力者は、心の機能が幼形成熟｛注：ネオテニーの類推｝して、発達阻害・転換したのだろうか。この生物学的基礎については第 2 章で論考した。ホモ・サピエンスがホモ・ネアンデルターレンシスを三万年前までに残虐にも絶滅させた頃の心の機能のままに退行進化し今日までサピエンスの 4%が、第七感（良心）の発達を忌避したのだろうか。サピエンスは残虐性を芸術や宗教などの文化的進化で昇華、置換して、良心（想い遣り）を確かに発達させてきた人々は多い。しかし、良心などもち合せれば、熾烈な社会では生き残れないので、サピエンスは良心の未発達な野蛮の人々を 4%ほど残しているのだろうか。こうした良心のない現代の野蛮人が、情報科学技術や生命操作技術を悪用する新人類ホモ・デウスとなり、サピエンスを隷属させていくのだろうか。

私は人生の大半でおおよそ性善説を信じて暮らしてこられた。短い人生でも、少しはいやな人々はいたが、まあ、なんとか乗り越えられてきた。しかし、性善説だけでは解釈できない、明らかに悪なる毒を持つ人間はいるのだ。これを前提にして、地域社会の在りようを論考すべきだ。綺麗ごとだけでは課題解決はできないのだ。聖ヨハネの黙示録に、「天使は、不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。正しい者には、なお正しいことを行わせ、聖なる者は、なお聖なる者とならせよ。」と言ったとある。また、キルケゴール（1848）は次のように書いている。絶望に至る病は、超克の努力によってしか快復には向かわないということか。つける薬はなくとも、支えてくれる家族や師友はいる。疲れれば休めばよい。その現場から逃避してもかまわない。

人間とは精神である。精神とは自己である。自己とは自己自身に関係するところの関係である。人間は有限性と無限性との、時間的なるものと永遠的なるものとの、自由と必然との、綜合である。

人間とは綜合である。総合とは二つのものの関係であり、第三者の関係など派生的な措定された関係が人間の自己なのである。自分ひとりの全力を尽くして自分の力だけで絶望を取り去ろうとしているのなら、なお絶望のうちにあり、その苦闘はかえって深刻な絶望のなかに引摺り込む。絶望における分裂関係は単純ではないので、同時に他者との関係を措定したところの力との関係のなかで無限に自己を反省するのである。絶望が全然根扱ぎにされた場合の自己の情態は、自己が自己自身に関係しつつ自己自身であろうと欲するに際して、自己は自己を措定した力の中に自覚的に自己自身を基礎づける、ことである。

4.3. 社会ダーウィニズム

さて、また世俗の不学・無学の話題に戻る。自由民主党の「憲法改正ってなあに？」の漫画第 1 話で、次のようにもやウィンが言っている。「ダーウィンの進化論ではこういわれておる。最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるのでもない。唯一生き残ることが出来るのは、変化できる者である。」多様な生物の進化を簡単な法則性に集約することはできない。ダーウィンはそのような事を言ってはいないし、彼以後も進化学は大きく発展しているので、単純な社会進化論の繰り返しの適用は無学をさらして、無恥であるので、慎むべきだ。あまりに見かねた日本人間行動進化学会（会長・長谷川真理子総合研究大学院大学長）は「生物進化がどのように進むのかの事実から『人間社会も同様の進み方をするべきである』とする議論は間違いだ」と反対する声明を出した。

声明は「ダーウィンの進化論は思想家や為政者に誤用されてきた苦い歴史がある」とし、権力者らによって差別や抑圧に悪用されてきたことを紹介。科学者は警鐘を鳴らしてきたが、現代でも特定の政治的主張に権威を持たせるための誤用が後を絶たないと懸念を表明した。さらに「ダーウィンの言う進化は、ランダムに発生した変異の中から、環境に適さないものが淘汰（とうた）されていく過程だ」と漫画の誤りを改めて指摘。政治的主張は科学的知識を誤用して行うのではなく「個人や団体の信念として表明するべきだ」とくぎを刺した。

ダーウィン（1859）『種の起原』を再読した。{注：進化論に関する詳細な議論は別稿『第四紀植物』で論考する。} 動植物の進化について、自然選択 natural selection が種分化を進めるのだが、自然の中での研究事例がまだ多く収集されてはいないので、とりあえず飼育栽培下の研究事例を参照することは有効であるとしている。栽培植物の進化過程には自然選択も働くが、強い恣意的な人為選択 artificial selection の影響が強く加わる。人間でも自然選択から逃れられないが、しかし、他生物とは著しく異なり、人為選択を強く働かせ、さらに文化的進化 cultural evolution として私意的な社会選別により自己家畜化 self-domestication さえも志向している（第 2 章）。たとえば、歴史的に見られる奴隷制度や、現代的には思考停止もその現象の一端である。

人類学者アイズリー,L.（1978）は『星投げびと』で、初期人類への先祖帰りについて、若い研究者だったころに出合った田舎娘の面影に郷愁を記している。

今日のことだが、私はあの体験のことを思って、古いノートを必死で探してみた。しかし、見つからない。年月というものは、印刷の保護にあずからないものをかたづけてしまう。より古い出来事の記憶は残っている。私がかつて知っていた生身の人間のことだったからだ。人生の秋を迎えた現在、彼女の顔と彼女の隣人として過ごした奇妙な季節は、おぼろげな教訓のようによみがえるの

だが、そのころは私も若すぎて何もわかってはいなかった。突然の洪水が起こればロッキー山脈の巨大な岩をも海に向かって運ぶ涸れ谷をかかえた、普段は旱魃に苦しむ西部の広い土地のどこかで起こったことだ。強い風をのがれて丘の陰に隠れるように建てられた、芝土を積み上げてできた家が一軒あるだけだった。わき水でできた小さな池が牧草地のなかにあった。私がおぼえているのはそれだけだ。

彼女は最後のネアンデルタール人なのだ。彼らは、自分ではしらないのだが、獲物を失った狩猟民族であり、戦士を失った女なのだ。彼らの生き方のうえには衰退が重くのしかかる。奇妙な優しさをたたえた彼女は、はるか昔に消えたネアンデルタール人の優しさを思い起こさせる。彼女のからだのなかに復活した繊細な遺伝子は、ふたたびサピエンスと呼ばれる生物の影に埋もれてしまうだろう。あの幻の娘の血族たちは、イタリアの地中海沿岸地方や、方々に触手をのばす氷河以南の地域で、都市を形成することなく生きていた。

ネアンデルタール人は、長年の発掘の結果、独自の夢や優しさをもっていたことが最近わかってきた。彼らは死者に贈り物をそえて埋葬したし、野の花を敷きつめたベッドをしつらえた例さえいくつか見つかっている。彼らの心は、のちに私たち｛注：サピエンス｝に宿る心性にはおかされていなかった、おなじ血をひく恐ろしい生物の心性には。

アイズリーのその想いに甚く共鳴する。素のままに美しく暮らしていたネアンデルタール人の美しい心性が、サピエンスの都市国 polis の権力構築のために農耕文化を起こして、農業文明社会に向かう初期過程、前農耕段階の時代において、ネアンデルタール人はサピエンスに迫害されたようだ（朝日新聞 1991）。しかし、サピエンスに吸収された素朴な美しい心性は時としてサピエンスの心にもよみがえり、先祖返りするようだ。たとえこれがアイズリーの夢想であっても、私も今に受け止めて、その心性をサピエンスの中に探し求めたい。また、考古学者ミズン（1996）は『心の先史時代』で心の構造について、さらに次の様に詳細に論考している。すでに第２章で概観したが、さらに要約引用する。

現代の狩猟採集民の統合された心では、認知領域群の領域の間を概念、思考方法、知識が自由に行き来する状態へ変形をとげる。ネアンデルタールは芸術を生まなかったが、サピエンスはその後の芸術や宗教を出現させた。

｛心の構造における｝＜一般的知能＞は、ピアジェの見解に従えば、学習及び意志決定についての汎用の規則によって構成されている。基本的特徴はどの行動領域であれ、経験されたことに照らし合わせて行動を修正するために用いられる。学習と問題解決のための包括的な規則群。＜博物的知能＞（直観的生物学）は自然界の理解、動物、植物についての思考。居住地域についての地理学。＜社会的知能＞（直観的心理学）は他の個々人とやりとりする心を読む。個人間の社会関係を調整する。社会的な相互作用、社会的柔軟性の能力。＜技術的知能＞（直観的物理学）は道具を作り、操る。環境から資源を取り出し利用する。＜言語知能＞は感情や情報を伝達する。

十五万年前以降のヨーロッパと近東で見られ、ヨーロッパではわずか三万年前まで生き残るホモ・ネアンデルターレンシス（初期人類）、彼らの脳容量は 1200 ないし 1750cm^3 へと飛躍的に変化し、社会的言語の発達が｛脳の｝発達を反映している。しかし、認知流動性は抜けていた。ネアンデルタール人の心では、社会的知能は道具の製作（技術的知能）や自然界との相互作用（博物的知能）に関連する知能から切りはなされていた。もの作りの伝統が単調で、骨製や牙製の道具が存在せず、芸術もないのだ。ネアンデルタール人は芸術を生まなかった。

一〇万年前に、ホモ・サピエンス（初期現代人類）が登場する。文化が六万年から三万年前に爆

発的に開花する。人間の心の発達においても進化においても、ひとつづきの比較的独立した認知領域群によって構築されている状態から、そうした領域の間を概念、思考方法、知識が自由に行き来する状態へと変形を遂げる。四万年前から三万年前にかけての時期に、個人的な装飾品が製作され、一万七千年前頃にはラスコー洞窟の壁画が描かれた。宗教的信仰という観念が認知流動性とりわけ博物的知能と社会的知能の統合から生まれる。この両知能が統合されていたことで、先住の初期人類との競争が有利になり、初期人類を絶滅に追いやった。

4.4.　自然の階層と全体論

分子生物学の草創期に渡辺格の集中講義を聞いた。自然の階層という概念に甚く感銘を受けたので、生意気にも最前列から何かと質問をした記憶がある。彼からは、世の中を良くしたいのなら、辻説法をせよ、と言われた。彼の影響に加えて、国立遺伝学研究所の阪本蔵書にあったJ.B.S.ホールデンの本を読み、草創期の分子生物学と全体論の議論に強い印象を受けて、その興味を今日にまで持ち続けてきた。当時、私は研修生であったが、研究所の抄読会において、全盛であったショウジョウバエの研究成果をゾウに当てはめるような論理はおかしい等という反論を応用遺伝学の側から聞いていた。渡辺格（1969）編『生物学のすすめ』で、彼は自然の階層に関して次のように記している。

そこで、学部生の頃の私は公害への批判から科学論や哲学にも関心をもち、還元論や人間機械論に対抗する全体論や自然の階層構造に誘引された（山口 1970）。全体論 holism とは、系全体はそれの部分や算術的総和以上のものであると考え、全体を部分や要素に還元する（還元論 reductionism）ことはできないとする立場である（Wikipedia2020.9）。ここに、ゴールドシュタイン（Goldstein, K.1934）『生体の機能』から全体論による機能の統合について、要約引用する。心の構造の統合はその機能が動的平衡を維持することと理解したい。

自然現象の分類の根底とした三つの部門への分類、即ち生命過程を増殖（栄養、成長、生殖）興奮性（刺激に対する反応）および感覚（意識的感覚）に分ける方法が再び新たな意味をもった。生体全体の統一性に関与する程度の大きさによって、個々の器官系を分類せんとする方法も想起するべきだ。統合の強さは存在の高さの標準となる。もっとも統合は自由、全人格的行動、生産性、充実せる行動などの言葉で特徴づけられるが、それらはいずれも同一事実の異なった表現にすぎない。

生物の階層的秩序づけの試みの困難さは、個々の生体の本質の把握が困難であり、さらに、生物の全生物界における位置決定には、この全生物界そのものを知っていなければならないからである。全生物界の認識は個々の生物を総合するだけでは不可能で、できるだけ多くの資料を蓄積して、かの全体的直観が現れ出るのを待つよりほかはない。

生体は比較的に恒常な質的特徴的な存在として定義される。環境刺激によるあらゆる変化は必ず適当な時期に適当な平衡に達するという事実によって、生体はその主要特徴なる比較的恒常性を維持することができる（生物学的基本原則）。あらゆる作能は質と空間的関係の外に、時間的契機からも規定されている。存続の危機的な動揺は生体が世界と生産的な交渉にある時に生じる。それは征服されるべき不平衡状態の表現である。平衡の回復は生体が大いなる世界の内に自らの環境を発見することによって可能となる。人間においてのみ、不完全性即ち苦悩に耐え忍ぶことによって本質と世界との狭小化に対抗するという努力が見られる。この努力は人間存在、自由性における最高の生物学的存在に特徴的な現象である。

ダーウィンもゴールドシュタインも、自然界の中で営まれる研究事例資料をもっと蓄積しながら、論考していこうとの学問的姿勢であったと受け止められる。また、人間の特異性を認識・区別していることを確認しておきたい。ベルタランフィー（1967）『人間とロボット―現代世界での心理学』も理学部生になった頃、身近な大学闘争や公害闘争の最中で、科学とは何かと大いに考えざるを得なかったので、読んだ。こうしてみると、50年ほど前に読んだ書籍が今改めて論考を進めるにあたって新鮮に背中を押してくれているように思える。深く考え、緻密に書かれた著作は古典になり、これらの古典を読むことはとても大事なことだ。欧米の大学でギリシャ時代からの古典を大事にし、また、副専攻を求めていることに教養への敬意の差異を思う。日本の大学は図書館や博物館を大事にせず、幅広い教養を捨て、今ここの実利に溺れてしまったのだろう。このことはいずれ別稿で三省してみたい。次に関心の深い記述を要約引用する。

現代世界での心理学的技術の発展が大衆社会の中で生み出した影響力の深さは、ますます複雑精妙になる一方の機械装置技術の発明から生ずる影響にいささかも劣らないものがある。物質的技術である自然の支配は、心理学的技術である人間自身の支配で補われたのである。科学と技術は諸刃の剣で、熱核戦争の脅威や人口の爆発やサイバネティック社会での社会問題はもはや常識である。生物学者である私は基本的なものの見方を問題にするのであり、ある時代の社会＝文化状況と科学と世界観との相互関係や相互作用の研究である。全体を組織だてられた系 system としてまとめて眺めることは容易でない。

生命現象は機械論的アプローチでと対比されるものとしての有機体論(全体論)的アプローチによってとらえられる。物理＝化学的レベルから細胞、生物個体、社会的レベルまで、すべての階層的レベルで生命現象を研究する必要がある。突然変異と選択という機会的なできごとによって生きものの秩序と編成を説明するのには限界があるようにみえる。生物体は、その成分や構成素材をたえず交換している開放系としてとらえられ、このような系をあつかえるように物理化学を拡張すべきである。全体性の概念とそこから生ずるいろいろの結論とを認識論的に明らかにして、科学の認識論全体に役立てる。システムには物理学的、生物学的、技術的、社会学的等々のいろいろな形で現れているものがあるけれども、実際にどんな形をとっているかにかかわらず共通の性質を示す抽象的なものとしてのシステムを対象とする多くの分野にまたがる学際科学として、一般システム理論というものが想定される。

人間は言語、思想、社会的存在、金銭、科学、宗教、芸術などのシンボルの世界に住んでいる。彼をとりまく対象物の世界は、こまごました周囲のものをはじめ書物、車、都市、爆弾にいたるまで、シンボル的活動の物質化したものなのだ。緊張の作りだしや遊戯や探検行動では、たんに恒常性維持的（ホメオスタシス）なものではなくて、生物体の自律活動の表現である。全体として（例外はある）生物学的に不利な行動は選択によってすみやかに消滅していく。これと対照的にシンボル的行動はその根元において創造的（高次の自律性）であるばかりでなく、生物学的な有利性をはるかにこえたものでもある。文化のシンボル的世界は基本的に非自然であり、生物学的な自然、衝動、有用さ、適応をはるかにこえたものであり、しばしばそれを否定する。

創発 emergence は、世界のどのレベルもそれぞれ特有の性質と法則性をもっていて、それらはおのおの下位のレベルの特性と法則から単純にみちびきだしたり、それらに還元したりできないとの考えかたである。機械論的な生物学は生物体の機能を人工の機械をもちいて説明しようとし、バイオニクス（生物工学）は自然の発明をまねようと試みている。あの広大にして魅惑的な神秘は、生物学的には劣っていてふがいない生物が、シンボル的活動という独自の方法で自然と進化を越え、

それにうちかっているということだ。シンボリズムはホモ・サピエンスの種差である。認識的シンボルが進化してくるためには、洞察｛注：直観とほぼ同義か｝、それまで無関係であったものごとをいっしょに見るということだ。決定的な段階は人間がどのようにしてか、ものごとの代表とするのに適当なイメージ心象を作りあげたことだった。価値の自然主義的な理論は科学にもとづいている。究極の価値は個人の維持、社会あるいは種の存続、最大多数の最大幸福であるようにみえるが、このことが生物学的な一般原則であるからこそ、これは真、善、美という伝統的な三位一体で表現され人類の文化、科学、芸術、宗教につながる人間に特有の諸価値にかんしては、無縁のものなのだ。

人間は、文化および文明という名の自分自身の環境を創りだす動物であるが、この環境は個人と社会のどちらの点から見ても、生物学的有用性をはるかに超越したものである。文化と文明は、ただ生物学的あるいは生存のためというだけの価値とはうまく一致するものではない。｛注：次には非常に率直な見解が記されているが、世情では誤解されるだろうから略そうと考えたが、そのまま引用する。｝黄金律やそれと同様の訓えは適度に社会的な種の本能に根ざしているので、さまざまな国民や文化のあいだで共通の道徳の基盤になっている。しかし同じ理由から、いっそう進んだ人類社会ではこの自然主義的命題は問題をはらんでいる。これは極めて崇高な道徳的教えで、人口がまばらでよく開けた国土では適切であったであろうが、近代的衛生学や医学、寿命の延長等々が人類の悲惨さの倍増に繋がっている今、知恵おくれの人、精薄児、犯罪者にまで手あつくすることが、どれだけ有用で、道徳的とさえいえるのだろうか。その結果、人類という種の遺伝子プールが劣化して、バカと悪人の世代を養いはぐくむことになることは、科学的事実である。自然主義的価値はホモ・サピエンス特有の人間的価値ではなく、社会的動物の本能をことばになおしたにすぎない。ある生物がその行動の格律が普遍的法則となりうるように行動することこそ本能の定義であり、自然選択は通常、本能が種を保存するようにしてくれている。

シンボリズムこそが人間を最高の動物よりもさらに高めた。知的な何かのために犠牲を払うことは本能のレベルの上にきずかれたシンボル的上部構造である。私たちは価値の体系をも一つのシンボル的世界として理解し、基本的基準はどの場合にも共通であり、価値もまた自由に創造されるものである。人間の条件は自由な決定にゆだねられており、自分自身で築いたシンボル的構造のうちどれを選ぶかは自由であり、これこそ人間の尊厳なのである。ニーチェが私たちの時代のうちに見いだしたニヒリズムは、伝統的な価値が崩壊してしまったためというより、複雑な文明に必要な価値体系がまだ進化してきていないことからくるのだろう。非人格的で、非人間的でもある社会的な諸力が個人のもっとも私的な生活までもまきこみ、統制し、支配した時代はこれまでなかった。個々人の道徳心の高さ、人間的な誠実さではどうにもならない。問題は道徳律を押し広げて個人以上の社会的実体までも含ませるようにすることであり、個人が社会的巨怪にむさぼり食われないような防壁をもうけることである。

いま現れはじめているもう一つの文明が厳然とした実在であることを、念頭におかねばならない。それは大衆文明、技術的で国際的で全地球全人類をおおう文明、そこでは古い文化的価値と創造性が、新しい機構によりとってかわられていく文明である。イデオロギーの差や人種の差は長い目で見て、産業化された大衆社会の物質文化の同一性を前に、無意味になるだろう。その時の個人の課題は、大衆社会が許すかぎりで古い文化の遺物を保存することにある。

まず最初に斬新なものはナンセンスとしてしりぞけられる。第二段階では自明のこと、つまらぬことだと宣言される。やがて第三期には、以前の反対者が自分こそ発見者であると名のるのだ。商業主義社会が供給するあらゆる小道具でもって、人間のなかにある人間的なものを抑圧した。このような自家撞着は必然的に絶望、知的不幸、非行に行きつくほかはなかった。彼らは科学研究から

予期できる利益を触れまわるよりは、むしろそこから美的満足をひきだし、実在の一元性の会得に比すべき洞察をひきだしたのだ。私はいろいろの時期に実験にもたずさわり、数理生物学や科学哲学もやった、詩なども書いたが、これらの活動のあいだに矛盾や対立を感じはしなかった。一般システム理論のような統一概念は、科学と、人文活動という見出しのもとに伝統的に包括されている諸分野とのあいだに橋をかけると思う。

ベルタランフィーの見解によれば、生物学的に不利な行動は自然選択によりすみやかに消滅する。しかし、人間の文化的進化としてのシンボル的行動はまさに非自然であり、生物学的な有利性をさえ否定することができる。すなわち、人間は生物学的には劣った存在であるが、シンボル的活動によって自然的進化の枠から外れることができる。生物学的一般原則は人間の諸価値とは無縁なものになってしまっているのである。自然選択は本能が種を保存するように働くが、人間の場合は社会的動物の自然主義的価値を越えて、社会的弱者はもとより、犯罪者をも手厚く処遇するように人権概念を指向している。日本では弁護士がえてして悪意・毒をもった殺人者さえも精神錯乱者として免罪をするように仕向けているようにさえ見える。犯罪の被害者がさらに二次的に社会的被害を受けるような構図は納得できない。私とて国権力による死刑制度に賛同はしないが、明確な悪意をもってなされた犯罪を法律の名のもとに恣意的に許すのなら、法治社会とはならず、日本のサスペンスの定石のように、私的復讐を助長することになる。被害者を犯罪者にさせてしまい、悲しい正義の犯罪を誘発することになる。

今日、私生活の場面にも、防犯カメラ、車載カメラ、GPS やビッグ・データ利用などあまりに監視が行き届き、個人の誠意や人間の信頼は虚無化されてしまう。過剰な商業主義はすべての物心を商品として金額評価に替えてしまい、金銭では測れない、目では見えないような真善美の価値を失わせてきた。全人的な心の構造と機能の発達を求めて、生き物としての人間が暮らしのために必要な生業、家事、遊び趣味、任意な奉仕や環境保全活動などにも人生の時間の一部を用いたらよいのだ。

野生動植物に働く自然選択だけではなく、自己家畜化した人間の場合は強力な人為選択、極論すれば人為選別が行われてきた。人種や民族差別のみではなく、階級、階層、さらには微に入り細に入るような個人能力への選別が社会ダーウィニズム、優生学などによって行われた。ハックスリー（1932)『すばらしい新世界』がまるで予言したようだ。ドーキンス（1989)『利己的な遺伝子』に記述されたジーンとミーム、およびハラリ（2011)『サピエンス全史』と（2015)『ホモ・デウス』については別に論じたので、次のサイトを参照されたい（木俣 2019、『環境学習原論』　www.ppmusee.org/_userdata/pel2019.pdf)。

第 5 章　自然への祈り

民俗社会では、労働と遊びと祈りが一体化し、
身体の動きのなかに収斂している。
（岩田慶治 1986）

遊びは学問と見つけた。人生はヒンドゥ教の四住期には型どおりにあてはまらないようだ。幼児期（前住期、造語）は天性の遊び心に、五感で生きる。学生期は修行としての学問で、直感を得る。家住期は仕事としての学問で、直観を磨く。林住期は趣味を遊びに昇華し、学問は遊びに統合され、良心を知る。遊行期は解脱に向うはずなのだが、それはないかもしれない。解脱があるとすれば、死後になるだろう。だが、阿修羅の心は不死だろうから、解脱することはない。アニミストのない物ねだりは、自然への祈りしかない。別稿で信仰を論考する際に、祈りについてはさらに深めたい。岩田（1986）は、次の様に書いている。

臼をつく労働そのものが遊びであり、祈りであった。臼は臼のままで楽器であるということは、われわれが忘れ去ってしまった民俗社会におけるきわめて魅力的な現実なのであった。道具は道具、手は手、感覚は感覚として、バラバラに外界に接している現代文明のなかでの人間よりも、自然と人間との一体感のなかで、全体作用している伝統社会の人々のほうが、より生き生きとした日々を送っていると言えないであろうか。

図 7.　出雲大社拝殿と飛鳥寺釈迦如来像

古事記によれば、木俣神は大国主と最初の妻八上比売の子であった。素戔嗚尊の娘須勢理姫が正妻になり、八上比売は須勢理姫の嫉妬を恐れて、木の又にその子を置いて、身を引いたという。飛鳥時の釈迦如来は日本最古の仏像。

5.1.　やまとたましひと武士道

降矢静夫が隣家のおばあさんが侍の娘で、嫁する前に見習いとして家事、学芸、武芸な

どを身に着け、立派に人生をやりくりしていたことに感心し、鍛錬あっての侍であると話していた（第１論考、木俣 2021）。そこで、侍の心構えあるいは日本人の心構えの基層にある、やまとたましひとは何かを歴史をさかのぼって再考してみた。

大島建彦ら（斎藤 1980）は、『日本を知る小事典、6 自然とこころ』において要約すると、日本の自然と心の関わりについて次の様に記している。ここに、やまとだましひの本来の語彙が示され、とても意外なことに、新渡戸（1899）の論じた武士道とは全く異なった概念であった。

日本の自然が美しいという場合、その特性は小規模で変化に富んでいることである。四季の移りかわりが非常に顕著である。日本人が季節に対する鋭い感覚をもち、独特の華道や茶道や俳句などを発達させた。これまでは審美的＝趣味的に風景美に見惚れ且つ楽しんでいれば足りたのであるが、今後は、風景は目で見るものだけではなく、五官で感ずるもの、知識探求欲によって捉えるものになった。

平安時代、からざえ（漢学の才）が男ごころであるのに対して、女流文学の中で、やまとたましひは女ごころであった。やまとたましひとは、心ばへ、心ばせ、心もちゐをさし、自主的な気魄、心の持ちかた、思慮分別、ようするに事に処して行く才能を意味していた。日本人独特の魂のはたらきも、学才を基礎としないと適切十分に発動できない。やまとたましひはまことに平和でのどかな心のはたらきであった。女性的で日常必須の心ばせ大和魂がいきなり、殺伐とした武器の匂いを帯びるのは、近世もほぼおわりがたの文政・天保年間以後のことである。国学（平田篤胤）という復古主義的文学研究運動が興隆し、神道の発達にともなって、儒仏思想による牽強付会的解釈が、神道的色彩を鼓吹されて、国粋化していった。その結果、本来女性的な心ばえであったやまとたましひを、一挙に雄武なるものに転ぜしめたのは本居宣長没後の門人平田篤胤であった。このように見てくると、日本魂、大和心が殺伐たる武力主義や天皇制と結合されたのは、実はほんの百数十年前の、文化・文政時代の産物であった。国学の勝利が明治維新という形をとり、さらに天皇制絶対主義国家の建設という形をとって、その武断的尊王攘夷思想が近代的に合理化されて行ったときその行く手には不幸が待ち受けていた。原義を失った、近世末の産物でしかない。尊王攘夷のやまとたましひは、昭和 10 年代の軍閥的ファシズムに日本国民を引きずり込み、有為な若者を戦場に散華させてしまった。

近世以前には武士道の語は用いておらぬ。封建制度が出来上がらないうちは、武士道などあり得るはずはなかった。新渡戸稲造は武士道の起源と封建制度の起源とが同一なものであることを見逃してはいない。武士道とは、その起源からみて、服従の道徳であり、隷属の道徳であり、献身の道徳であった。津田左右吉の分析するところ、武士道は猜疑心・自己本位、死を軽んずる気風、主従関係のみの義理・人情、である。和辻哲郎の観察では、葉隠れは江戸時代の士道ではなく、武士道ですらない。

日本人は真心から自発的に寛大な行為をすることを要求しない。義理を果たさなければ、世人の前で恥をかく。世間の取沙汰が恐ろしいのである。有賀喜左衛門「義理と人情」では、民俗語彙を調べれば、ギリのある関係は冠婚葬祭にさいして行われる家の互助関係をはじめとして、家屋の改新築や災害病気、に対する互助関係、本家・親分に対する分家・子分の年始礼や盆礼、地主小作間のそれ、親戚知己間の贈答慣例などに表れている。義理は人情の対概念として機能し、義理は公を意味し、人情は私を意味すると考えられる。

名を重んずるとか、恥を知るとか、このような生活規範は他人本位の倫理でしかない。罪の文化 guilt culture は道徳の絶対的標準を説き、良心の啓発を頼みにするから、ここでは、人は、自分

の非行を誰ひとり知る人がいなくても罪の意識に悩み、誰ひとり知る者がいなくても、善行を行う。従来、日本人に欠けているのは、この自律性である。私たちは恥の文化を脱却できないでいることを、今こそ恥とせねばならない。

親孝行という思想がわれわれの心性に根をおろしたのは、明治以降の文教政策の根本に、日本の国を家族国家とよんで国民の心をやわらげ、天皇、国の父親に対する忠義を、一家の主人、戸主に対する孝行に見立てようとする考え方がすえられたためである。

現代に及んでもなお農民に対する蔑視の言葉が用いられ続けているが、農民の道徳的心性の中に依然として前近代的封建的要因の残されていることもまた事実である。江戸幕府の権力機構の中で、封建農民たちは農本主義的勤労哲学をもち、身分意識に縛りつけられて分限を守り、義理に生きる処世術にたより、共同体的強制や外部から圧力を加える権威的支配に忍従し諦観する生活態度もちつづけてきたのであった。

農民にとって、日常生活の場であり、全面的な生活関連の集中的に見られる場であるのが、村である。村においては、農民各自の分限は、その身分的階層地位に応じて、形成されるので、それを守って村の権威の定めるところに服従することがきびしく求められる。旧来の慣習や習俗に従う事なかれ主義や、因習にこだわる保守主義や、現状維持に執する退嬰主義が農民の処世方針として採られる。このように、あくまでも外部に行動の規矩を求め、自分の都合の悪いことには沈黙をきめこみ、他人に対する追随をむねとして、そのくせ他人の成功に対しては内心で嫉妬の感情をおこすという農民根性がつくりあげられる。これが他の要素と組み合わさったとき、どしがたい事大主義や自分の家さえよければ、自分の部落さえよければ、という利己的情念を増幅していくのである。封建的農民根性を克服せねばならない。それは、ひとり農民の課題であるばかりでなく、日本人全体の問題でもある。

日本人相互の嫉妬排斥や、他人に対する猜疑心ないし不寛容や、大局を見ず小事に齷齪する心情の偏固狭量さや、目さきの功名心の満足、合理的判断を欠く感情の衝突、卑屈とその裏返しの空威張り、などなどの言動が、この島国根性として捉えられた。日本人の敵は日本人自身である。外国崇拝がたちまち国粋主義に転じ、自己卑下がたちまち唯我独尊に変ずる。

やまとたましひは女ごころで、心ばへ、心ばせ、心もちゐをさし、自主的な気魄、心の持ちかた、思慮分別、ようするに事に処して行く才能を意味していた、という。国学の本居宣長没後の門人平田篤胤による復古主義的文学研究運動が興隆し、神道の発達にともなって、儒仏思想による牽強付会的解釈が、神道的色彩を鼓吹されて、国粋化していった結果、本来女性的な心ばえであったやまとたましひを、一挙に雄武なる大和魂に転ぜしめた。また、封建的遺制に発する農民根性や島国根性の発生についても論じ、日本人の敵は日本人であるとも記している。

明治維新の賛美をする新渡戸（1899）が武士道を、日本人の人倫たる概念は学校で教訓として受けたものではなく、人から教わり命じられてきたことだと記している。武士道について考える契機になったのは、ベルギーの法学者ラブレーが、日本では学校において宗教教育をしていないことに驚いて、宗教がないのなら、子どもたちにどのように道徳教育を授けるのかと問い、新渡戸は即答できなかったことにある（1890 年頃）。その後、封建制と武士道がわからなくては、現代日本の道徳の観念は封印された書物同様であると考えるに至り、『武士道』を著すに至った。この本は彼が 37 歳で、アメリカに滞在中に英語で書いた。原題は次の通りであった。”Bushidou The Soul of Japan,” Another of the History of the Intercourse between the U.S and Japan.（奈良本 1997）。

武士道が日本の活動精神、大和魂の推進力で、そのもとは孔子の教えにある。封建社会において、儒教が教える最高の道徳は仁・義・礼・智・信のごとくである。新渡戸は封建制と儒教を賛美しているようにうかがえる。この本は諸国語に訳されて欧米に流布したので、日本人の何たるかに、強い先入観を与えたようだ。たとえば、象徴的な事例がある。

安部（2015）の小説『維新の肖像』の最後の場面は、第２次世界大戦中、ボストン美術館の展示室、「吉備大臣入唐絵巻」の前であった。反日世論が厳しい中でも、上品に金髪を結い上げた老婦人が、大和絵を始めてみて、貫一に声をかけた。「初めて見て、日本人に対するイメージが変わりました。獰猛で野蛮な人たちかと思っていたけど、よほど文化的に洗練されていなければ、こんな絵は描けないものよ。」朝河貫一は、「自分も苦難に屈しないで、人の心を動かす仕事をしよう。そうすればいつかきっと永遠なるものに到達し、世界の平和や人類の幸福に寄与することができる。」と決意した。ちなみに、彼の父、朝河正澄は二本松藩士として侍の義により戊辰戦争を戦った。その子朝河貫一は薩長閥を嫌い、アメリカに渡ってイェール大学の歴史学教授になり、日本の第二次世界大戦に向かう社会状況に警鐘を鳴らし続けたという。

新渡戸は武士道を美化したが、その薩長の尊王攘夷の武士は明治維新に際して、謀略、テロリズム、内戦を続けて、どこに正義があったのだろうか。歴史事実を学ぶにしたがって、松下村塾や水戸学派の虚像が崩れてきた。司馬遼太郎の達筆に目を眩ませられて、尊敬する人物であった高杉晋作や坂本龍馬の色は褪せてしまった。戊辰戦争を官軍と戦った父朝河正澄の方に誠意を見て取るようになった。武士道が日本人全般の精神性をすべて培ったとは考えられない。水戸学など、尊王攘夷など、木に竹を継いだに過ぎない。高杉の素晴らしい作戦だと思っていた奇兵隊は戊辰戦争で惨い仕打ちをしたし、その後すぐに悲惨な末路をたどったようだ。ただし、彼らを利用した長州の維新元勲たちは山縣陸軍閥を形成し、自由民権運動も抑え込んで、恐らく今日に至るまで日本の政治権力を操っているのだろう。学校教育で教えられた日本歴史とは別に、自ら郷土誌などや直接の証言を聞けば別の事実が見えてくる。尊敬する維新の英雄は色あせてしまった。

5.2.　学問は独学で

私は幼稚園から始まる学生期をへて、さらに職業人としても教育機関に属してきた。しかし、学校で学ぶことがすべてであったわけではない。生きている限りの生涯、自らの発問に従って学びに明け暮れている。学問は基本的には独学なのである。第１論考(木俣 2021)で分析した降矢静夫は優れた独学の達人であった。また、読書猿（2020）はとても優れて詳細に、共感できる学習についての持論を『独学大全－絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための 55 の技法』において展開している。次に序文より要約引用する。

独学者とは、学ぶ機会も条件も与えられないうちに、自ら学びの中に飛び込む人である。独学者は学ぶことを誰かに要求されたわけでも、強いられたわけでもない。学ぶことで人は変わる。変わるためにこそ人は学ぶ。自立した学習者である独学者は、自分の変化に応じて自らの学びをデザインし直す必要がある。ヒトは「なぜ？」と問うてしまう生き物である。そしてこの問いかけずにはいられない性質こそが我々の学びを支え、どのように学ぶべきか考えることを可能にしている。

知識や経験を獲得し思考することに関わる認知的スキルだけでなく、自制心や忍耐力など非認知スキルのも関わる、人の仕様を統一的に理解できる枠組みとして、二重過程説 Double process theory がある。これはヒトの認知や行動は大きく分けて二つのシステム process から形成されてい

るという理論である。システム１は、無意識的で自動的、迅速で直感的に働く。システム２は、意識的に制御され、処理が遅く、熟慮的に働く。

システム１はモジュールの集合体である。システム１が適応した環境は人類が進化的時間を過ごしたサバンナ平原でせいぜい百数十人規模の集団で暮らしていた時のものである。システム１は今でも多くの場面で、意識する必要さえなく正しい判断を下す。システム２は新しい課題にも対応できるが、仕事は遅く、必要な認知資源も膨大である。システム１は環境依存的である。生命にとって重要な情報にシステム１は適合しており、それが培われた長い旧石器時代の環境に適応的だったと考えられる。

生物が周囲の環境に働きかけ、自分に都合のよいように環境を改変することをニッチ構築と呼ぶ。ヒトという生き物もニッチ構築を行い、その環境を変え、文明を築いてきた。物理的な環境改変にとどまらず、認知的なニッチ構築にも及び、これを介して大規模かつ長期的な環境改変が可能になった。システム２が関わって積み重ねた認知的ニッチの一部を知識と呼ぶ。すなわちシステム２の特徴は言語を使って考えることができることだ。

その遅さや一度に一つずつしか考えられない欠点はあるが、言語によって仮設的思考や抽象的思考、反省的思考が可能となる。言葉で伝達し、学び習い知識を可能にする。神話を語り、大集団を作り、農耕や都市、文明を築くことを可能にした。さらに自己コントロールや道徳観上だけでは維持できない大社会を支える法制度の基礎にもなった。システム１が追いつけないほどにヒトは急速に環境を改変した。

知識を学び、次代に伝え続け、ヒトと知識の共生＝共進化はヒトが生きる世界を変え、かつての進化環境からますます遠ざけることになった。ヒトは直感と感情が優先する脳を持っていながら、生得的な認知機能だけでは適応しがたい世界に、理性と知識なしには社会と文明を維持できない世界に生きている。

システム１に含まれる身内びいきと報復感情が他人に損害を与えると報復によって自分への損害につながるから、他人への損害行為は抑制される。身内びいきの感情は仲間には親切にすることをデフォルト（default 基準、初期設定）にする。身内内では協力行動が連鎖し、集団が維持される。身内びいき感情は親密度によって差をつけ、同じ事実について異なる解釈を産む。私的制裁による復讐は復讐を呼び、集団全体に深刻な損害を与える。この脆弱性について多くの文明において私的制裁の禁止と法による刑罰が考え出されたが、これはシステム２による解決である。感情・直感というシステム１の働きを一旦抑制し､仮説思考を使えるシステム２を作動させることが必須である。

同時に、制度の歴史やその働きを抽象化し理論化した知識を習得することが必要となる。巨大で複雑な社会を維持するために、生活のコミュニティから切り離された教育の場＝学校が必要となる。われわれが悪感情を抱く様々な学校の諸要素は、自己コントロールが苦手で環境依存的なシステム１を安定させるために必須の要素である。学校は、我々が生まれ育ったコミュニティでは学ぶことができない知識を長期にわたって系統的に学習する人工環境であると同時に、感情と直感だけでは解決できない問題への対処法がシステム１の抑制を伴うことを体験する場でもある。

賢くなるためには、学び続けるためには何が必要であるかを考えるために、ヒトという生き物の知･情･意を俯瞰的に捉えることのできる二重過程説は有用である。システム１の脆弱性を理解し、システム２によって必要な修正や補完ができるならば、我々は自身の愚かさを減らし、その限りで賢くなったと言える。ヴィゴツキーの発達の最近接領域説を祖父とし、ブルーナーを父として心理学で提唱され、学習科学に継承された足場作り scaffolding という概念は、子どもが主体的に問題を解決できるように、その発達に合わせ大人が行う援助を指し、やがて取り外されることを含意している。これに対してクラークが言う外部足場は取り外されることなく利用され続ける。その外部

足場とは、我々が学ぶこと、考えること、自己コントロールすること等を助けるツール（外部装置）である。我々は外部環境にある外部足場（書籍、コンピューター）と共同しながら思考し、行動している。

知的営為を分類し無用の垣根と階梯を設けることは、益よりも害が多い。学習を研究と分断するより、同じ知的営為の連続体の一部としてみなした方が得られるものが大きい。ヒトは知ることを、学ぶことをあきらめることができなかったという事実である。

5.3. 自然への祈り

人間の社会は何時までも変転、流動し続けるものだ。個人の自由な孤独を楽しみ、他者からの撥撫による孤立に抗う。それでも確信が持てる人生の根本情理はある。それは、個人の心を支えているのは、家族が想い合い、師友と学び合い、自然を信仰することだ。

祈りとは、宗教によって意味が異なるが世界の安寧や、他者への想いを願い込めること。利他の精神。自分の中の神と繋がること。神など神格化されたものに対して、何かの実現を願うこと。シャーマニズム、アニミズムなど対象が漠然としたものに対する感謝などの、意思の表明や表現、現象に対しての活動でも語彙、祈りが用いられ、より根源的な欲求に基づいた人間の普遍的な活動様式である（Wikipedia）。神社の種類、宗教・宗派の現状については、島田（2020a、2020b）を参照した。私はいまだ林住期と遊行期をさまよっており、阿修羅のごとく、生きているうちに解脱を得ることはないのだろうし、やはり死に際しても解脱はないのかもしれない。

本居宣長の定義によれば、凡て迦微（かみ）とは古御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐す御霊をも申し、又人はさらにも云はず。鳥獣木草のたぐひ海山など、其与何まれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云なり。すなわち、神話の神々はじめ、各地の神社の祭神、人、鳥獣、木草、海山、通常のものより優れていれば神、良いものも悪いものも優れていれば神である。

自らの死を意識するようになった段階で、「遊行期」に入る。これはすべてを捨て、死が訪れるまで遊行を続けるものだ。世俗の生活に対する執着心が少しでも残っていれば、苦をもたらす輪廻から永遠に解脱できない。飽きない人生を送る上では、学び続けるということが一番大事なことである。学びたいから学ぶ。学び続けることで、見えてくることもある。長く生きられる時代にせっかく与えられた時間を学び続けることに使うというのは、もっとも賢いやり方ではないだろうか。いつまで生きられるかわからないので死ぬまで生きる。現実の社会と距離をとるということが必要になってくる。一歩引いたところから客観視していくのだ。分析的に物事を見ていくということである。人間は最後、世俗の生活から身を引いて生きる必要がある。大切なのは、世界を理解することである。何かを納得できたとき、私たちは、自分の生が決して無駄なものではなかったことを知るのではないだろうか。信仰は、感染症の前にはまったく無力である。この出来事が、宗教離れをより促進していくかもしれない。人類は宗教を捨てようとしている。

手塚治虫（1989）の最後の作品は、『ルードウィヒ・B.』と『ガラスの地球を救え―二十一世紀の君たちへ』である。最後の未完漫画には、子どもの頃に、クロイツシュタイン公爵の息子フランツに顔を叩かれ、耳を傷めて、その後も、サイコパスの彼に何かにつけて悪心により阻害されて一生苦しむことになったベートーベンの半生が興味深く描かれている。また、最後の随筆は、次世代の人々への遺言のようで、珠玉の言葉で充たされている

ので、次に要約して記す。

林の向こうに真っ赤に大きく揺らめきながら沈んでいく夕日や、風のざわめき、青い空に高く流れる白い雲、そんな自然にふれたとき、たとえ幼くても、ぼくはいつもやさしい気持ちになっている自分を感じていました。大人になったいまだって、それは同じ。人間がどのように進化しようと、物質文明が進もうと、自然の一部であることに変わりはないし、どんな科学の進歩も、自然を否定することはできません。それはまさに自分自身＝人間そのものの否定になってしまうのですから。

人類はまだ野蛮時代なのかもしれないと思うことがあります。環境汚染や戦争をやめない限り、野蛮人というほかないのではないでしょうか。未来に向かって、地球上のすべての生物との共存をめざし、むしろこれからが、人類の本当のあけぼのなのかもしれないと思うのです。怒涛のように滅亡に向かってなだれをうって突き進むさなかに、ノー！と言える人間かいったい何人存在するでしょう。

残忍でウソツキで、嫉妬深く、他人を信用せず、浮気者で派手好きで、同じ仲間なのに虐殺しあう、醜い動物です。しかし、それでもなお、やはり、ぼくは人間がいとおしい。生き物すべてがいとおしい。あの罪のないたくさんの子どもたちを思うとき、とても人類の未来をあきらめて放棄することはできません。たとえ、どんな状況にあっても、明日へ夢につなげていくための活力や理想を育むことがわれわれ大人の責任ではないでしょうか。

子どもたちが、健全な批判力を養えるような教育環境を整えることが、先決なのではないかと思われます。自然というものは人の心を癒す不思議な力を宿していて、自然こそ子どもにとっては最高の教師だとぼくは思います。いま、子どもたちに必要なのは冒険することではないでしょうか。そしてやじ馬精神こそ、子どもに冒険させる原動力ではないでしょうか。まだまだ世界には謎が無数にあります。その謎に好奇心を持って、さまざまな仮説を立てることは、なんとも楽しいことではありますまいか。

老人にもいわば生きがいがなくては生きる気力が湧いてこない。日本のみならず、老人に対する社会の目は、かなり冷たいものがあるようです。もうお役御免のやっかい者のように考えている青年や壮年層の見方は、とんでもない思い上がりであり、傲慢です。

差別されている人間は、そのむごい痛みを知っているからこそ、逆に差別する側にはならないものだと思い込んでいたぼくは、かなり楽天的すぎたようです。近・現代社会が、とにもかくにも産業第一、生産性第一を掲げた時から、堕落が始まったのではないでしょうか。日本人は昔から付和雷同といいますか、社会で同じような生き方をすることが、最も安全といったような性質があります。

生命というものが有限で、ある時がきたら、すべての愛するもの、父母、妻や夫、子ども、恋人、そして自分にも永遠に別れを告げなくてはならないなんて、じつに不条理なことではあります。冒険という未知への挑戦を失ったら、この世は、まったく味気ないものになってしまいます。何ものかに向かってチャレンジしていこうとする、子どものロマンを大人が刈りとってはならないのです。無駄や遠まわり、道草を許さない社会は、どう考えても先に豊かさは見えません。合理主義や生産至上主義は、結局はその社会を疲弊させてしまうでしょう。なぜなら、みずみずしい感性や独創性をもった子どもたちが、育っていくはずがないからです。自分以外の人の痛みを感じとるには、想像力が必要なのです。

5.4.　死に至る病・絶望の恢復と希望

天使の教え（ヨハネの黙示録）に添って、撥撫（イジメ）という悍ましい毒に対する方策が 3 つある。まず、悍ましい毒に報復の毒を以って制する方法であるが、これでは自らをも別の毒に汚染させてしまうだろう。次に、悍ましい毒から逃散する方法であるが、とりあえず毒から身を守ることはできるが、悍ましい毒がなくなるわけではない。第 3 に、悍ましい毒に事実によって向きあい、超克する方法である。これは重大な苦しみを伴うが、個人の毒を解くことになるだろう。これらはおおかた倉田の記した処方箋に近い。

毒人間は良心を持たないので、良心を持って抵抗してもまったくの無駄である。『あたしたち、海へ』の結末のように、ペルー（自殺する事と解釈される）ではなく、もう一つのペルー（別の場所で生きるという意味）に行ってしまうことである。毒人間の毒が及ばない場所に逃散することである。良心ある人が負けて悔しいなどというのはそれこそ毒素に侵されているのであって、抵抗や復讐など無意味なことから自らを解放してもっぱら幸せを求めるのだ。

それでも勇気をもって、根本的に毒素から自ら恢復するには、苦しい事実に向きあい、心的外傷後ストレス障害を超克するしかない。被害者は良心を持って自らを責めるのではなく、良心を待たない人がいる事を認知して、それを回避しながら目的を達成する方策を見つけることだろう。とはいえ、個人としては良心を弱めたらどんなに生きる事が容易になるだろうか。でも、社会は壮絶な騙し合い、奪い合いの争いの場になってしまうのだろうか。人は大方のだれもが幸せになってよいのだ。科学的に唯物論の立場に居れば、祖霊や心霊などはいない。しかし心の機能は、父母、祖父母から祖霊にまで想いは及び、たとえばお星さまとして象徴してでも、現世の私たちの心を励まし、護っているのだと感じさせるのだろう。陶淵明の「帰去来の辞」はそれなりの長文である。結びの文節で、彼は次のように言っている（松枝茂夫・和田武司訳注 1991）。

晴れた日が来れば、ひとりで歩き回り、杖を傍らに突き立てて農作業の真似ごとをする。また、東の丘に登ってのんびりと口笛を吹き、清流を前にして詩をつくる。自然の変化にわが身をあわせ、生命の終わるのを待ちうける。天命を素直に受け入れて楽しむ境地に入れば、もはや何の迷いもなくなってしまうものだ。

この境地は私の老師降矢静夫のライフスタイルとほとんど合致するものだ。私もこのような境地を願っているが、残学の故に今しばらくはそこに至らないだろう。有機無農薬でささやかに家族の野菜を育てているだけだが、害虫を防ぐためには日々殺生をせねばならない。可哀そうとは思うが、食べ尽くされてしまう。昨年はイノシシに、山畑で栽培していた作物のすべてを舐めるように食べられてしまった。まねごと山村農だから、飢えもせずに都市で暮らしているが、山村で農業者として生計を立てている高齢の人びとにとっては、まさに死活の事態である（木俣 2020）。

私は陶淵明と同じく「八政始食」、農業を国の経世済民の基盤に置くべきだと考えて、政策提案をしてきたし、都市民も含めて消費者などと自らを位置付けずに、自らも庭や市民農園などで任意に楽しく農耕をして、家族の野菜くらいは生産したいものだ。他国に依存した大量生産物の輸入だけでは、量的かつ質的な食料の安全保障はできない。国の経世済民政策が世間に及ばなければ、家族や地域共同体を護るために、地域自治共同体は家庭菜園、市民農園や家族農業を政策として促進、振興するべきだ。

第 3 の超克という方法をとるにあたって、現代人の心の構造と機能について考察を深め

る必要があることに気づき、本論考を書き進めてきた。まとめとして要点を繰り返すが、現代人の多くが自然から乖離する都市的環境に居住することで生物的には退行進化に向かった。このために心の構造を構成する諸知能が衰微し、この劣化を発達した科学技術による外部機械装置で代替するように文化的進化を進めた。これにより五感は充分に発育せず、第六感（直感・直観）はマスメディアの無限流布する不確実情報に強く影響され依存し、人間の心の構造も機能も統合的に働かず不調に陥った。第七感（良心）も鍛錬されず、文化的進化の自己複製子ミームの活力を鈍らせて、個々人の美や真を求める心の機能も衰弱し、万物を想い遣る善なる認知流動機能も失われようとしている。

ウェブサイトを作り、メールマガジンなど送っても、如何程の人も見てはいない。即自的、即時的な SNS のほうが多数の人が読み、ただし、深く考えもしないで反応するだろう。若い人々の思考停止、虚無や刹那主義に応対はできない。どうしたらして考えてもらえるかなど、論を待たない。当人のことは他者が強要はできない。

CIVID-19 に関わって、政府ばかりでなくごく身の回りからも、自粛が空気で強要されている。本来、行動する必要であるのならば、自粛ではなく、個人の意思で自律制御することであるはずだ。支配欲、澱んだ心の中の毒を自律制御できない人。孤独や孤立を恐れる。恐怖に弱い日本人、人は金、恐怖、暴力、撥撫、孤立、イジメによって支配できる。しかし、自らの心は鍛錬、学びにより克服できる。知足に向かう未来はあり得ると希望をつなぎたい。

しかし、性善説の楽観論は不公正で、あまりに単純化した理解である。ランガム (2019) の提示した善悪の複雑なパラドックスをどのように理解し、真の文明へと移行変容するかが、最重要な課題である。この過程はサピエンスがネアンデルターレンシスを、日本でいうなら弥生人が縄文人を絶滅ないし衰亡に追い込んだと同じようで、さらに穿ってみれば、サピエンスがデウスに自ら進んで心を売り渡して、隷属する過程にあるようにさえ思える。このような絶望的工程表を進めさせずに、別途の自律する文化的進化の方途を人間の希望として自然に寄り添う暮らしを探検して、学び直してほしい。この際に、自然に添う温故知新、深い知恵を記した古典や伝統的知識体系を参照することが必要である。

私は科学者として、科学的知識体系にほんの微力でも寄与したと自負するが、それでも人間が生き物であるからには、全体自然から離れて、科学技術に依存した人工環境だけに集住することはできない。近未来の科学技術が万能で、人間は神々と同等になれるなどと増上慢してはいけない。広大な宇宙、果てのない大自然は人間がすべてを支配する場所ではなく、さらにその小さな一部にすぎない地球で、それでもすべての生きとし生けるものにとって崇高な地球において他の生き物とも共存して素のままに美しく、幸せに暮らすほかはない。地上において、素原の超個人主義がトランスパーソナル・エコロジーの基礎として、第四紀人新世 Anthropocene が健全な真文明へと展開し、サピエンスが生存し続けられる保障、希望を見つけたい。これはカミガミや諸神への願いを超えて、生き物の文明へと移行したいアニマの祈りだ。(2020.9.23)

用語集　　歴史学会編 2005、郷土史大辞典、朝倉書店、東京。

自然村：自然発生的に成立した村で、行政村に対していう。村は、日本はもとより世界的にも自然発生的に成立したものが多い。そして同一の氏神をもち、血縁的にも地縁的にも深い結び付きをもつ社会集団を形成している。冠婚葬祭をはじめとする日常生活の講、組（相互協力)、生産生活の

結(ゆい)（相互労力提供）をはじめとして基本的な村落生活は、伝統的な相互扶助的結合によって運営されている。{日本大百科事典}
村社会：① 集落に基づいて形成される地域社会。特に、有力者を中心に厳しい秩序を保ち、しきたりを守りながら、よそ者を受け入れようとしない排他的な社会をいう。しきたりに背くと村八分などの制裁がある。② 同類が集まって序列をつくり、頂点に立つ者の指示や判断に従って行動したり、利益の分配を図ったりするような閉鎖的な組織・社会を①にたとえた語。談合組織・学界・政界・企業などに用いる。{https://dictionary.goo.ne.jp/word/村社会/}
村：人間がムレ合って生活する小地域、概念としての村落は居住領域＋生産領域＋その他が有機的に統一された小地域的社会結合体をさし、村も概念的には村落と同意であるが、村は古代から存在し続けている実態的な歴史用語である。
家：家父長制的な強い家長権に基づいて構成される、日本的な家族形態の一つ、近親者を中核にして構成される家族に対して、経済的・社会的・観念的な枠組みとして、歴史的に規定された単位。
五人組：江戸時代の末端支配組織、年貢や治安維持などに関して相互検察、連帯責任を負った。
隣組：近世の五人組を原型として、約 10 軒を単位にした隣保団体、1937 年に始まる国民精神総動員運動の末端組織。1947 年にポツダム政令によって廃止された。
連座：犯罪者の身内以外の近隣者や同じ役所の者が、連帯責任を負わされて処罰されること、見せしめと相互監視による犯罪の未然防止の効果を持つ。
喧嘩両成敗：喧嘩で暴力を行使した者に対して、その非理曲直を糺さず、当事者双方に同等の刑罰を科すこと。中世以降に両成敗法は天下の大法として定着し、慣習法的に続き、近代以降の判決にも影響を与えている。
用語集 2　　生物学辞典第 4 版（2001 岩波書店）、Wikipedia 参照確認
環元論（還元主義）reductionism：生物学において、あるレベルの体系はその成分部分に分析され、より高いレベルの行動がその部分の性質や行動、配置によって説明される。下位分類として、①存在論的還元主義；生命体はそれを構成する分子とその相互作用によってのみ存在する生物学的特性は物理的特性に付随している。②方法論的還元主義；生物学的システムは最下層を調査すること、生物は分子生物学と生化学によってもっともよく説明できる。③認識論的還元主義；ある高い領域に関する科学的知識はそれより下の根源的なレベルの科学的知識に還元できる。
機械論 mechanism：生命論や生物学方法論において、無機的自然について知られている因子およびその組み合わせを重く見る。生物体に起こる現象は生物体を構成する物質的要素それぞれの単独の性質の加算として理解できるとする方法論的立場。自然現象に代表される現象一般を、心、精神、意志や霊魂などの概念を用いずに、科学的方法論で分析する。唯物論は機械論の先鋭化した概念で、霊魂などはないとの断定している。
有機体論（生体論）organicism：生命現象の基本は部分過程が編制されてその系に固有の平衡または発展的変化を可能にしている点にあるとする生命論的または生物学方法論的立場。
唯物論 materialism：観念や精神、心などの根底には物質があると考え、これを重視する。
唯心論 spiritualism：精神のほうが根源的で、物質は精神の働きから派生したとみる。
ネオテニーneoteny：成熟していながら、幼態のままの性質を残している現象。
動的平衡 dynamic equilibrium：物理学・化学などにおいて、互いに逆向きの過程が同じ速度で進行することにより、系全体としては時間変化せず平衡に達している状態。類推としては定常状態、生物の生死や物質の出入りは系外との流れとして直接観察できる。
サイバネティックス Cybernétique：統御し、情報を伝える能力。生物のサイバネティックスには種属を末永く保存する遺伝的情報と、人類の場合には文明という獲得された情報がある。

黄金律 golden rule：キリスト教倫理の原理、マタイ福音書 7 章 12 節「人からして欲しいと思うことのすべてを人々にせよ」(広辞苑)。

関連資料

山口晶 1970、人間の未来―次の世代の環境について― I.（生物学について 50 年前に考えたことの再検討 2020）www.milletimplic.net/essey/futurehuman.pdf
木俣美樹男・土橋稔・篠田具視 1979、雑穀食の伝承、東京都奥多摩町水根部落の事例、環境教育研究 2（1・2）：77-89。
木俣美樹男・川上確也・岩谷美苗・小川泰彦 1990、環境教育の方法論とその実践に関する研究 I.環境教育プログラムと冒険学校、東京学芸大学附属野外教育実践施設報告、野外教育 1：11-24。
木俣美樹男・岩谷美苗・川上確也 1991、環境教育の方法論とその実践に関する研究 II.自然と一体感を得る統合プログラム、東京学芸大学附属野外教育実践施設報告、野外教育 2：19-23。
木俣美樹男 1992、環境教育プログラムの枠組みとエコミュージアム、環境情報科学 21(2)：16-20。
小川泰彦・岩谷美苗・山下宏文・樋口利彦・木俣美樹男 1993、環境教育の場としての農山村エコミュージアム　I.野外体験学習に関する埼玉県大滝村住民の意識調査、東京学芸大学附属野外教育実践施設報告、野外教育 4：23-32。
木俣美樹男・井村礼恵 2008、ホーム・ガーデンによる雑穀の生物文化多様性保全～エコミュージアム日本村「植物と人々の博物館」づくりを通じて、エコミュージアム研究 13:34-42。
木俣美樹男 2008、野外学習から地域社会の再生へ、環境情報科学 37（2）：52-56。
木俣美樹男、2009、ELF 環境学習課程、pp.1-30. 植物と人々の博物館プロジェクト。
木俣美樹男 2011、森とむらの生物文化多様性－家族を守るための自給農耕と栽培植物在来品種の保全、森とむらの会、東京。
黍稷農季人 2014、帰去来の辞― いわゆる教育を去る、
www.milletimplic.net/essey/comhom.pdf
木俣美樹男 2015、生きるという任意・自律的営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト 8：23-66。
黍稷農季人 2015、黙示録エッセイ：都市と田舎 ～ 生活文化の再創造による継承、
www.milletimplic.net/essey/ruralcity.pdf
黍稷農季人 2016、幸せは自由である ―このくにの人々が不幸からぬける手法、
www.milletimplic.net/essey/happyfree.pdf
黍稷農季人 2017、保守と保身のなかみ、
www.milletimplic.net/essey/hoshuhoshin2017.pdf
木俣美樹男監修 2017、こどもかんきょう絵じてん、三省堂、東京。
黍稷農季人 2017、黙示録エッセイ：哀しい私たちの日本、
www.milletimplic.net/essey/tragichome.pdf
木俣美樹男 2019、自分で日本国憲法を考える、自然文化誌研究会、電子出版、
www.ppmusee.org/_userdata/constJapan2019.pdf
木俣美樹男 2019、先真文明への覚書 5.文明の野蛮へ退行、民族植物学ノオト 12：17-36.

木俣美樹男 2019、環境学習原論―人世の核心、www.ppmusee.org/_userdata/pel2019.pdf
木俣美樹男 2020、まねごと山村農の 6 年記、民族植物学ノオト 13：35-60.
黍稷農季人 2020、超克への祈りと願い、
www.milletimplic.net/essey/conquest.pdf
黍稷農季人 2020、超克 2 嫉妬と保身の自律制御および農耕の勧め、
http://www.milletimplic.net/essey/conquest2.pdf
木俣美樹男 2020、家族の物語：アシュラと禰豆子を事例に、環境と文明 28（7）：5-6.
木俣美樹男 2021、山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里くらし、民族植物学ノオト 14：52-75.
文福洞先斗 2021、日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析、民族植物学ノオト 14：76-115.
注：山口晶、黍稷農季人、文福洞先斗は木俣美樹男のペンネームである。

引用文献

安部龍太郎 2015、維新の肖像、潮出版社、東京。
朝日新聞社 1991、朝日＝タイムズ―世界考古学地図―人類の起原から産業革命まで、東京。
アレクシエーヴィッチ（S.Aleksievich）1985（三浦みどり訳）、ボタン穴から見た戦争―白ロシアの子供たちの証言、群像社、横浜。Poslednie Svideteli.
ベルタランフィー（L.von Bertalanffy）1967、長野敬訳 1971、人間とロボット―現代世界での心理学、みすず書房、東京。Robots, Men and Minds; Psychology in the Modern World.
クリスタキス,N.2019、鬼澤忍・塩原通緒訳 2020、ブループリントー「よい未来」を築くための進化論と人類史（上・下）、ニューズピックス、東京。Christakis, N,A. 2019, Blueprint, The Evolutionary Origins of a Good Society.
マイケル・コール 1996、（天野清訳 2002）文化心理学～発達・認知・活動への文化―歴史的アプローチ、新曜社、東京。M.Cole 1996, Cultural Psychology: A Once and Future Discipline, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.
ダーウィン（C.Darwin）1859、　八杉竜一訳 1971、種の起原 I～Ⅲ、岩波書店、東京。On the Origin of Species by Means of Natural Selection.
ドーキンス Dawkins, R. 1989、日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳 1991、利己的な遺伝子、紀伊国屋書店、東京。The Selfish Gene,　Oxford University Press.
読書猿 2020, 独学大全－絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための 55 の技法、ダイヤモンド社、東京。
アイズリー(L.Eiseley)1978、千葉茂樹訳 2001、星投げびと、工作舎、東京。The Star Thrower.
フォックス（W.Fox）1990、星川淳訳 1994、トランスパーソナル・エコロジー　―環境主義を超えて、平凡社、東京。Toward a Transpersonal Ecology: Developing New Foundations for Environmentalism.
ゴールドシュタイン（K.Goldstein）1934、村上仁・黒丸正四郎訳 1957、生態の機能―心理学と生理学の間、みすず書房、東京。Aufbau des Organismus: Einführung in die Biologic unter besonderer Berücksichtigung der Erfahrungen am kranken Menrtinus Nijhoff. Haag, 1934.
ハラリ Harari, Yuvak Noah 2011、柴田裕之訳 2016、サピエンス全史―文明の構造と人類

の幸福、河出書房新社、東京。 Sapiens: A Brief History of Humankind
ハラリ Harari, Yuvak Noah 2015、柴田裕之訳 2018、ホモ・デウス―テクノロジーとサイエンスの未来、河出書房新社、東京。 Homo deus: A Brief History of Tomorrow
長谷川明 1987、インド神話入門、新潮社、東京。
ヘッセ (H.Hesse)1922、高橋健二訳 1959、内面への道シッダールタ、新潮社、東京。
平山和彦 2005、歴史学会編郷土史大辞典下、朝倉書店、東京。
岩田慶治 1986、人間・遊び・自然－東南アジア世界の背景、日本放送出版協会、東京。
ハックスリー (A.Huxley) 1932、黒原敏行訳 2013、すばらしい新世界、光文社、東京。Brave New World.
井上荒野 2019、あたしたち、海へ、新潮社、東京。
キルケゴール 1848、斎藤信治訳 1939、死に至る病、岩波書店。
倉田百三 1952、超克、角川書店。
小松裕 2011、真の文明は人を殺さず―田中正造の言葉に学ぶ明日の日本、小学館、東京。
K.ローレンツ 1949、(日高敏隆訳 1970)、ソロモンの指輪－動物行動学入門、早川書房、東京。K. Lorenz 1949, The King Solomon's Ring, Zur Naturgeschichte der Aggression, Dr. Borotha-Schoeler Verlag, Wien.
K.ローレンツ 1963、(日高敏隆・久保和彦共訳 1985)、攻撃－悪の自然誌、みすず書房、東京。Das Sogenannte Böse, Zur Naturgeschichte der Aggression, Dr. Borotha-Schoeler Verlag, Wien
ミズン(S.Mithen)1996、松浦俊輔・牧野美佐緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。The Prehistory of The Mind.
Nakane, C. 1970. Japanese Society; A Practical Guide to Understanding the Japanese Mindset and Culture. Tuttle, Singapore.
中島義道 2006、醜い日本の私、新潮社、東京。
中根千枝 2009、タテ社会の力学、講談社、東京。
内藤朝雄 2009、イジメの構造―なぜ人が怪物になるのか、講談社、東京。
日本聖書協会 1995、ヨハネの黙示録、新共同訳　聖書、東京。
新渡戸稲造 1899、奈良本辰也訳 1997、武士道、三笠書房、東京。
小熊英二 2002、＜民主＞と＜愛国＞、戦後日本のナショナリズムと公共性、新曜社、東京。
小此木啓吾 1998、モラトリアム国家・日本の危機、祥伝社、東京。
大島建彦・大森志郎・後藤淑・斎藤正二・村武精一・吉田光邦編著 1979、日本を知る小事典 1 冠婚葬祭、社会思想社、東京。
大島建彦・大森志郎・後藤淑・斎藤正二・村武精一・吉田光邦編著 1980、日本を知る小事典、6 自然とこころ、社会思想社、東京。
ペロ (A.G.Perrot)、奥田潤・奥田陸子訳 1970、生物のサイバネティックス、白水社、東京。Cybernétique et Biologie.
ランガム,リチャード 2019、(依田卓巳訳 2020)、善と悪のパラドックスーヒトの進化と＜自己家畜化＞の歴史、NTT 出版株式会社、東京。R.Wrangham 2019,The Goodness Paradox: The Strange Relationship between Virtue and Violence in Human Evolution,
歴史学会編 2005、郷土史大辞典、朝倉書店、東京。
清泉亮 2018、誰も教えてくれない田舎暮らしの教科書、東洋経済新報社、東京。
スコット,J.C.2009 (佐藤仁監訳 2013)、ゾミア―脱国家の世界史、みすず書房、東京。

スコット,J.C.2012（清水展・日下渉・中溝和弥訳 2017)、実践日々のアナキズム―世界に抗う土着の秩序の作り方、岩波書店、東京。
スコット,J.C.2017（立木勝訳 2019)、反穀物の人類史―国家誕生のディープヒストリー、みすず書房、東京。
島田裕巳 2020a、教養として学んでおきたい神社、マイナビ出版、東京。
島田裕巳 2020b、捨てられる宗教、SB クリエイティブ株式会社、東京。
スタマテアス,Ｂ．(B.Stamateas）2008、久世修平訳 2015、心に毒を持つ人たち　―あなたを傷つける「困った人」から身を守る方法、ＳＢクリエイティブ、東京。
スタウト（M.Stout）　2005、木村博江訳 2012、良心をもたない人たち、草思社、東京。
手塚治虫 1989、ルードウィヒ・B.、(手塚治虫文庫全集 2010)、講談社コミッククリエイト、東京。
手塚治虫 1989、ガラスの地球を救え―二十一世紀の君たちへ、光文社、東京。
徳田御稔 1957、改稿進化論、岩波書店、東京。
陶淵明 403、勧農、陶淵明全集(上)、松枝茂夫・和田武司訳注（1991)、岩波書店、東京。
ワイルド（O.Wilde）1888、西村考次訳 2003、幸福な王子（改版)、新潮社、東京。
山折哲雄監修 1991、世界宗教大辞典、平凡社、東京。
養老孟司 2003、バカの壁、新潮社、東京。
由井正臣・小松裕編 2004、2005、田中正造文集（一・二)、岩波書店、東京。
財団法人森とむらの会 2011、森とむらの会記念誌、社会的共通資本としての森とむら、東京。

参考文献

Collins, H. and R. Evans 2007, Rethinking Expertise, The University of Chicago Press, Chicago and London, USA.
オーウェル,J. 1945、(高畠文夫訳 1972)、動物農場、角川書店、東京。G. Orwell 1945, Animal Farm,